0026943000

0026943-000

６９８－６９

景気読本

大阪毎日新聞社，東京日日新聞社エコノミスト部・著

一元社

昭１１

ADG

大阪毎日新聞社
東京日日新聞社エコノミスト部著

景氣讀本

一元社版

昭一一・三・一 本學圖書

698-69

序

題して景氣讀本といふ、一攫萬金を志して本書を購讀されたる方は恐らくは十分の滿足を得がたいであらう。何となれば、この書は相場や投機を專門とする書物ではないからである。吾等の考へるところによれば、景氣變動の解釋が出來れば、人間業としてはそれが精一杯のところで、前途の觀測なんか、さう容易に出來るものではない。語を換へていへば過去を理解し、現在を判斷する能力はあつても、前途を具體的に豫測する靈能は授かつてをらぬ。過去の經驗的事實を基礎として將來に對する見透しをつけることは、偶然的に適中する場合はあり得ようが、必然的に可能だとはいへないと思つてゐる。もし人間の智慧を、そこまで買被つてゐる人があるなら、その人はまづ認識から出直さなければなるまい。こゝに經濟現象と自然との質的な相違があるのだ。だから、兩者を比喩的に對照することは便利な場合もあるが、同質的なものと見做し、同じ方法で研究出來ると考へたら、それはとんでもない心得違ひである。

本書が一攫萬金の御用にたゝないことは、この意味において寧ろ正しい態度だと思

ふ。吾等がこの書物で志したことは、景氣は如何に動いて來たか、景氣變動についてどんな解釋が行はれて來たか、將たまた景氣の波紋は何を物尺として測定するか、といふような點であつた。卽ち景氣變動論、景氣學說、景氣指標の解釋が中心課題をなしてゐる。しかし景氣といふものは、只漫然と滿ちたり缺けたりしてゐるものではない。景氣變動の因つて生ずるみなもと――資本主義經濟の歷史的發展を見落すことは出來ぬ。かうした機構上の變遷を省みつゝ、そこに立つ景氣の波紋を把握して見たいといふのが本書の念願であつた。

本書は、以上の如き意圖の下に、エコノミスト同人が各々その分擔をきめて筆を執つた。しかし共同執筆の場合、陷り易い弊害を未然に防止するため、豫じめ研究の目標、範圍、方法等について十分打合せを行つたのではあるが、何分にも忙中寸閑をぬすんでの仕事だけに、結果に於いて意に滿たない點の尠くなかつた一事は、吾等の衷心慚愧に堪えざるところ、切に讀者諸君の諒恕を仰ぐ次第である。

昭和十一年二月

エコノミスト編輯長　佐藤善郎識す

目次

第一部　景氣觀測篇……（一）

第一章　經濟變動と景氣變動……（一）

第一節　經濟變動……（一）

一、經濟現象の分析……（一）

二、靜的經濟現象の意味……（二）

三、動的經濟現象の意味……（四）

（イ）質的（構造）變動――（ロ）量的變動

四、單一變動の意味……（六）

五、偶然變動と中斷的變化……（八）

六、反覆變動――週期的變動……（九）

七、季節變動――拘束律的變動……（一〇）

第二節　景氣變動とは……（一一）

一、景氣變動の意義……（一一）

二、景氣變動と他の經濟變動との關聯……（一三）

三、景氣の內容……（一五）

四、アダムスの景氣觀……（一八）
五、景氣の語源的意味……（二〇）
第三節　景氣變動の經過……（二一）
一、二分法から六分法まで……（二一）
二、ミッチェルの四分法……（二一）
第四節　景氣變動の原因……（二三）
一、基礎的前提條件……（二四）
二、直接的動因……（二五）
三、自律運動……（二六）
第二章　景氣變動の學說……（二九）
第一節　旺んな景氣研究……（二九）
一、景氣研究はなぜ旺んになつたか？……（二九）
二、景氣變動學說はなぜ多いか……（三二）
第二節　景氣變動學說の歷史……（三四）
一、景氣學說の進步……（三四）
二、十九世紀の景氣學說……（三四）
三、景氣論の二大學派……（三五）
第三節　近代景氣學說大觀……（三九）

一、近代景氣論の特徵……（四〇）
二、近代景氣學說の分類と解說……（四一）
第四節　ブルジョア景氣研究に對するヴアルガの批判……（五四）
第三章　景氣指標と景氣研究所……（五六）
第一節　資料の蒐集と整理……（五六）
一、經濟資料の蒐集……（五六）
二、經濟資料の整理……（五八）
三、趨勢値の測定……（六〇）
四、季節變動の測定……（六二）
五、景氣運動の測定……（六三）
第二節　景氣指標の見方……（六三）
一、景氣バロメーター……（六七）
（イ）統計材料の加工方法——（ロ）景氣指標の材料——（ハ）景氣豫測指數の作り方
二、バブソン・チヤート……（六九）
三、ジンガーのバロメーター……（六九）
四、ハーヴアド景氣範式……（七一）
五、ワーゲマンの立場……（七一）
（イ）生產のバロメーター——（ロ）生產財および消費財產業に於ける就業指數——

(ハ) 在荷增減のバロメーター——(ニ) 內地市場のバロメーターとしての外國貿易——(ホ) 商勢のバロメーター——(ヘ) 信用のバロメーター——(チ) 商品價格のバロメーター——(ト) 三市場のバロメ
第三節　世界の景氣研究所……(七八)
一、營利的研究所……(七八)
二、ハーヴアド研究所……(七九)
三、ベルリン研究所……(八一)
四、モスコー研究所……(八一)
五、日本の景氣研究機關……(八二)
第二章　世界景氣變動史……(八五)
第一節　序說……(八五)
一、景氣變動史の取扱ひ方……(八五)
二、資本主義前期の景氣變動……(八六)
三、近代的の景氣循環……(八八)
第二節　資本主義の一般的危機……(九〇)
一、資本主義と社會主義の對立……(九)
二、資本主義の一般的危機の內容……(九一)

三、一般的危機と戰後の景氣……(九三)
第三節　大戰直後の恐慌……(九四)
一、有史以來の恐慌……(九四)
二、この期の特色……(九六)
第四節　相對的安定期……(九八)
一、相對的安定とは……(九八)
二、重要指標のうごき……(九九)
三、相對的安定の原因……(一〇一)
第五節　世界恐慌期……(一〇五)
一、指標からみた恐慌期……(一〇五)
二、恐慌に關するヴアルガの解釋……(一〇八)
三、國際聯盟の恐慌觀……(一一三)
第六節　不況期の展開……(一一六)
一、恐慌期より不況期へ……(一一六)
二、不況期へ移行の理由……(一一七)
第二章　主要諸國の最近景氣狀態……(一二〇)
第一節　アメリカ……(一二〇)

一、好景氣來の聲……(一二〇)
二、九ケ月週期の異例……(一二一)
三、生産財部門の活況……(一二三)
四、低金利の浸潤……(一二五)
五、勞働賃銀の低落……(一二八)
六、農家收入の增加……(一二〇)
第二節　イギリス……(一三二)
一、ボールドウイン内閣の勝利……(一三二)
二、まづ『貿易回復』……(一三三)
三、利潤はどうなつたか……(一三五)
四、『回復』の程度……(一三八)
第三節　ドイツ……(一三九)
一、再軍備へ……(一三九)
二、軍備と經濟……(一四〇)
三、失業は減退したか……(一四四)
四、貿易の破産……(一四五)
五、シヤハトの新計畫……(一四七)
第四節　フランス……(一四八)

一、ラヴアル内閣と金本位……(一四八)
二、農業保護の成果……(一五一)
三、物價變動の特殊性……(一五二)
四、生産費の低下難……(一五三)
五、貿易萎縮の内容……(一五五)
六、金蓄積の豐富……(一五六)
七、財政回復の展望……(一五七)
第五節　イタリー……(一五八)
一、デフレーション政策の强行……(一五九)
二、生産、物價、貿易の動向……一六二)
三、政府の諸對策……(一六四)
四、エチオピア進略の背後……(一六六)
五、戰爭の經濟影響……(一六八)
第三部　日本景氣篇……(一七三)
第一章　本邦景氣變動史……(一七三)
第一節　我が國の景氣變動史を貫くもの……(一七三)
一、景氣・不景氣の正體……(一七三)
二、景氣變動史＝勞働者農民の窮乏史……(一七五)

第二節　資本主義搖籃期の景氣變動……（一七七）
一、動搖期の財界變動……（一七七）
（イ）明治十年代の景氣不景氣――（ロ）二度の不景氣――（ハ）三度の投機熱景氣
二、西南戰爭とインフレ景氣……（一七九）
（イ）不換紙幣の增發――（ロ）物價の激騰――（ハ）企業熱起こる
三、戰後インフレの反動……（一八一）
（イ）霧散したインフレ景氣――（ロ）深刻な反動來――（ハ）明治十七年の大不景氣
第三節　景氣循環始まる……（一八三）
一、最初の資本主義的好景氣……（一八三）
（イ）資本主義的發展の準備整ふ――（ロ）猛烈なる企業熱の勃興
二、第一回目の資本主義的恐慌……（一八八）
（イ）この反動のもつ意味――（ロ）深刻なる資本主義恐慌
第四節　日清・日露役と景氣の動き……（一九一）
一、戰爭は何をもたらしたか……（一九一）
二、日清戰爭と財界の變動……（一九二）
（イ）好景氣の爆發――（ロ）企業熱の高潮
三、戰後の反動襲來……（一九五）
（イ）第二、第三次の恐慌現はる――（ロ）三十年の恐慌――（ハ）再び恐慌爆發
四、日露戰後の景氣變動……（一九五）

（イ）日清・日露役の比較――（ロ）戰爭開始と財界の激動――（ハ）再び戰爭の恩惠を味ふ――（ニ）反動もまたつきもの――（ホ）暗雲低迷時代の持續
第五節　大戰の勃發と其後の景氣……（二〇〇）
一、大戰景氣の到來……（二〇〇）
（イ）躍る踏指標――（ロ）好景氣の表と裏
二、最盛期をすぎた日本資本主義……（二〇四）
（イ）大戰景氣の夢――（ロ）政府必死の救濟策――（ハ）僞裝景氣の正體――（ニ）經濟界老衰期に入る
第二章　日本經濟の基調……（二一二）
第一節　我國の人口構成……（二一二）
一、經濟構成の基礎關係……（二一二）
二、內地の人口大觀……（二一三）
第二節　農村の階級的構成……（二一六）
一、國民經濟上に於ける農村の地位……（二一七）
二、農村の社會階級……（二一九）
（イ）不耕地主と耕作地主――（ロ）小作農
三、農家の階級別所得……（二二四）
四、鋏型恐慌と貧農の生活苦……（二二九）

第三節　勞働階級の購買力……（二三一）
一、勞働者の階級所得……（二三一）
二、仕事一單位當りの勞銀……（二三三）
三、紡織業の實例……（二三五）
四、幼年工の使用增加……（二三七）
五、臨時工の問題……（二三九）
六、好況と失業者……（二四一）
第四節　中小企業と景氣の關係……（二四三）
一、事業工場の企業狀態……（二四三）
二、輸出貿易と中小企業……（二四七）
（イ）輸出品內容の檢討——（ロ）中小企業の利益享受程度
第三章　金停迄の景氣變動史……（二五〇）
第一節　景氣變動の足跡……（二五〇）
第二節　歐洲大戰勃發と其後……（二五一）
一、戰爭勃發直前直後……（二五一）
二、戰爭擴大以降……（二五二）
（イ）貿易の膨脹——（ロ）國際貸借の大好調——（ハ）對外債權の激增——（ニ）物價の暴騰——（ホ）事業界の爆發景氣——（ヘ）株界の爆發景氣——（ト）金融市場の發達

三、休戰と其直後及其後の再發……（二五九）
四、大正九年のパニツク……（二六一）
第二節　大戰後の長期反動期……（二六二）
一、パニツク以後の景氣……（二六三）
二、中間景氣の出現……（二六四）
三、關東大震災の突發……（二六五）
四、昭和金融恐慌の勃發……（二六七）
五、金融恐慌後の整理期……（二六八）
第三節　金解禁と其後……（二六九）
一　金解禁斷行……（二六九）
二、世界恐慌と日本の一般恐慌……（二七〇）
第四章　金本位停止後の景氣變動……（二七二）
第一節　指標の動向と其意味……（二七二）
一、金停後の景氣諸指標……（二七二）
二、指標の跛行性……（二七四）
三、金融指標の特色……（二七七）
四、基調惡化を物語る指標……（二八二）
第二節　景氣の波動——全面的上昇期……（二八四）

一、概觀……（二八四）
二、「犬養景氣」と「犬養恐慌」の特色……（二八六）
三、インフレ進行と非常時不安の交錯……（二八九）
四、景氣跛行の兆候……（二九二）
第三節　景氣の波動——跛行期……（二九七）
一、景氣跛行の事由……（三〇一）
二、跛行景氣の症狀（その一）……（三〇五）
三、跛行景氣の症狀（その二）……（三〇七）
第四節　反動進行の中絶——第二次景氣……（三〇七）
一、第二次景氣を可能ならしめたもの……（三〇九）
二、第二次景氣の樣相……（三一二）
第五章　滿洲國と內地の景氣との關係……（三一二）
第一節　大觀……（三一二）
第二節　對滿輸出の躍進と內地の景氣……（三一三）
一、滿洲國の貿易バランス……（三一五）
二、生產財の輸入增加……（三一六）
三、日本との依存關係增大……（三一八）
四、輸出市場としての滿洲……（三一八）
五、對滿輸出貿易の特異性……（三二一）
第三節　滿洲新興產業の將來と內地景氣……（三二二）
一、經濟建設と統制主義……（三二三）
二、產業勃興と對滿貿易……（三二五）
第四節　對滿投資と內地の景氣……（三二六）
一、輸出と投資との關係……（三二六）
二、投資の最盛期すぐ……（三二七）
三、滿洲事件費の影響……（三二九）
第六章　支那と日本景氣の關係……（三三一）
第一節　貿易と企業……（三三一）
一、在支邦人企業……（三三一）
二、貿易關係はどうか……（三三四）
（イ）關稅の引上——（ロ）廣東方面に於ける輸出入禁止制限——（ハ）日貨排斥運動
第二節　數字から見た支那國勢……（三四一）
一、中國の領土と主權の及ぶ範圍……（三四一）
二、支那の農業事情……（三四三）
三、鑛・工業はどうか……（三四五）
第三節　行詰つた國民經濟……（三四七）

目次（終）

一、經濟窮迫と幣制改革問題……（三四七）
二、北支自治運動の起る所以……（三四八）
第七章　結び——最近景氣動向を測る……（三五一）
第一節　指標概觀……（三五一）
一、中間景氣か本景氣か……（三五二）
二、株價・物價・生活・勞働……（三五三）
三、金融指標と貿易指標……（三五五）
第二節　偏軍財政と産業界……（三五七）
一、重工業は引續き順調……（三五七）
二、輸出工業はどうか……（三五九）
三、農業は改善至難……（三六一）
第三節　日滿支の經濟關係……（三六四）
一、滿洲通貨安定問題……（三六四）
二、支那の幣制改革……（三六七）
三、北支政權とわが經濟……（三六九）

第一部　景氣觀測篇

第一章　經濟變動と景氣變動

第一節　經濟現象の分析

景氣變動論は、また景氣變動學說とも呼ばれるが意味は同じである。要するに經濟變動のうちの一種の變動であるところの景氣變動（とくに景氣循環變動）がなぜ起こるかを說明しようとする學說なのである。

この學說を理解するには、まづもつて、經濟變動と景氣變動の意味をよく識つておく必要がある。よつて、とくに一節を設けて、この意味を明かにしておきたいと思ふ。

經濟現象は、それを分析研究して、理解を便ならしめるために、次のごとく分類することができる。

- 經濟現象
  - 靜的經濟現象
  - 動的經濟現象
    - 質的變動（構造變動）
    - 量的變動
      - 單一變動
        - 偶然變動
        - 趨勢變動（進歩變動＝擴張再生產行程）
      - 反復變動
        - 季節變動
        - 景氣變動
          - 一、二ケ月市場を支配する人氣的變動
          - 循環變動

以下ひと通り、この表の説明をしよう。

二、靜的經濟現象の意味

經濟現象はみんな動く現象である。絶對に靜止してゐる經濟現象といふものはありえない。それだのに、どうして經濟現象を動的なものと靜的なものとに區別するかといふに、これは經濟變動を識るうへに便宜上頭の中で、假定的に設けた區別に過ぎないのである。實際問題としては靜的經濟現象といふものはない。

では靜的經濟現象とはどういふ現象を指すかといふに、ひと口に言へば均衡（バランス）を保つてゐる經濟現象であると定義を下すことができる。即ち生產と消費との均衡、生產設備の量と消費財（直接、間接の）との均衡、國民所得分配の均衡、國民所得が投資と消費とに振り向けられる均衡、通貨量と財貨量との均衡、人口と經濟活動量との均衡、財政のごとき公經濟と一般經濟活動との均衡、かうした均衡狀態を保つた經濟現象を指すのである。かうした均衡狀態が經濟社會に全面的に現れゝば、好景氣不景氣などと云ふ現象は現れないであらうといはれる。さらに、もつと極端な場合を考へれば、人口に增減なく、財貨に對する需要の質と量との變遷がなく、財貨の生產技術に殆ど進歩發展がなく、資本の蓄成過程と用途に變化がなく、企業の形態組織等に改良工夫が行はれないと假定するごときであつて、かゝる場合には社會經濟的均衡は殆ど完全に保たれ、好景氣、不景氣などの變動は起らないかも知れない。つまり生產と消費との例をとれば、生產と消費に增減のない場合、そしてまた生產が增加しても、それと同じ割合で消費が增加する場合、この何れの場合も、生產と消費は均衡狀態におかれ、バランスをえてゐるといはれる。このバランスを保つてゐる狀態を靜的狀態と云ひ、この靜的狀態に置かれてゐる經濟現象を靜的經濟現象と呼ぶのである。

この均衡を保ち、バランスをえてゐる靜的狀態が破れるときに景氣、不景氣の現象が起こる。そこで景氣、不景氣を起こさせる原因を尋ねる場合には、何がこの靜的狀態を攪亂するかといふ答を求むれば足りる。したがつてかうした靜的狀態を假定することは、經濟變動を起こさしめる原因を説明し、また、その變動の經過を説くのに便利である。さらに理論經濟學において或經濟法則を説

明する場合にも至極都合がよい。かういふわけで經濟的均衡狀態、靜的狀態乃至は靜的經濟現象が假定されるのである。しかし、前に述べた均衡的、靜的狀態といふものは實際において、今日ではありえない。したがつて、經濟均衡といふ靜態狀態を想設し、これをあたかも實在するがごとくに看做して、これに或要因が働きかけることに依つて經濟變動が生じ、從つて景氣、不景氣が醸成されるといふ說明は誤りである。靜態狀態といふのは、經濟現象乃至經濟法則を理論的に說明する場合に、頭の中に假定した概念にすぎないといふことに注意すべきである。むろん學問上かういふ假定をつくることは誤りではない。かういふ假定をつくつて經濟法則を說明する學問を靜態經濟學と云ふ。

三、動的經濟現象の意味

動的經濟現象とは靜的經濟現象のような假定にもとずく概念上のみに存する現象ではなく、實際に、現實に動いてゐる、經濟現象を指すのである。かうした現實に動いてゐる經濟現象を說明し、その法則を說明しようとする學問を動態經濟學といふ。動的經濟現象に二つある。質的變動（構造變動とも云ふ）と量的變動がこれである。

（イ）質的（構造）變動　質的變動とは、讀んで字のごとく、經濟社會の本質の變動である。

經濟社會の本質とは國民經濟もしくは世界經濟を構成してゐるところの諸要素――卽ち自然的、社會的環境、財界の意向、販路の方向、人口の構成、人口の大きさ、國民經濟の組織、企業狀態、消費習慣、技術等々である。かうした經濟社會の本質卽ちその本體を構成するところの諸要素の變動を質的變動と云ひ、また構造變動とも稱するのである。また人によつては、經濟社會の構成諸要素のうち、それを動かすところの支配的な要素は生產方法と、生產組織とであるから、この變動をもつて、質的乃至構造變動と呼んでゐる。此質的變動は、すべての經濟變動の基調をなすものであり、此變動が動因となつてその他の經濟變動卽ち量的變動（次項で說明する）が起るのである。

（ロ）量的變動　量的變動とは、質的變動から釀し出されるところの數量（物量・價額）的變動である。例へば貿易制限を實施した結果輸入量が減つたとすれば、貿易制限は經濟機構の變化卽ち質的變動であつて、輸入量の減少は量的變化である。量的變動は前揭表に示せるごとく、單一變動と、反覆變動とに區別され、さらに單一變動は偶然變動と趨勢變動とに、反覆變動は、季節變動と景氣變動とに分類されるが、ワーゲマン博士はこれを次のごとく分類する。

このワーゲマン博士の分類とさきに揭げた表の分類とをその內容から比べて見るに、單一變動は一回的變動に、偶然變動は中斷的變化に、趨勢變動は繼續的變化に、反覆變動は周期的變動に、季節變動は拘束律的變動に相當し、景氣變動は自由律動的變動と同じである。

量的變動
- 一回的變化（單一變動）
  - 繼續的變化（發展即ち生長、變革、後退）（趨勢變動）
  - 斷續的變化（發展の挫折即ち移動破壞、分裂、增進）
- 中斷的變化（偶然變動）
  - 過渡的變化（發展の中絶例、罷業によるもの）
- 週期的變動（反覆變動）
  - 拘束律的變動（季節變動）（季節的振動）
  - 自由律動的變動（狹義の景氣）（景氣變動）

四、單一變動の意味

單一變動とは一定方向の一回限りの量的變動であつて、決して繰返へすことのない變動である。さればワーゲマンはこれを一回的變化と呼ぶのである。

單一變動即ち一回的變化をさらに分析する。趨勢變動といふのは、例へば消費人口の繼續的な增加または減少（質的變動）のために米の賣上げが增減する場合のごとき、一定方向に繼續（反覆ではない）する變動である。即ち大勢的に趨勢的に二十年とか三十年とかごく長期に亘る變化である。ワーゲマンはこれを繼續的變化と呼ぶが、さらにこれを進步變動と唱へる人もある。進步變動と唱へる人の意見を聞けば次のごとくである。

「經濟社會の進步變動と云ふのは　經濟社會全體の進步又は退步を齎すところの變動である。即ち生產が增大し、財力が增進し、國民全體の分配分（收入）が增大し、取引數量や生產數量が毎年累增し、國民の消費力が旺盛になつて行く場合が、進步變動をなしてゐる場合であつて、反對に、生產力は衰へ、財力は減じ、分配分は減り、生產取引の數量は減少し國民の消費力も弱つて來る場合が經濟社會の退步變動をなしてゐる場合である。かゝる現象を總稱して、吾々は之を進步變動といふのである。從つて、此進步變動は、反覆したり、循環したりしない。即ち進步變動は決して律動的でない。十年、二十年、三十年、五十年、百年の久しきに亘つて同一方面に向つて進むものである。たとへば、我國の進步變動は明治維新時代から今日に至るまで、大體上向きにあつたと云へよう。之に反して、オーストリアの如き國は、最近は、その進步變動が下向きに轉じたものと見ることができよう。斯くのごとく、進步變動は、統一力と持續力と活動力とを內面的に具へてゐて、變動そのものが歷史的に一貫してゐる。從つてそこには個性の色彩が濃厚であつて、一度去れば再び來らぬ。同一の場面は再び反覆されないのである。つまり進步變動は生命の流れのごときものである。」

ローザ・ルクセンブルグ女史は、進步變動を經濟界の本質と看做し、景氣變動は、經濟界の表面を彩る變化に過ぎないと考へ、さらに彼女は進步變動のことを、擴張再生產行程と呼び、資本蓄積をもつて、その特色となし、經濟界の表面を彩る景氣變動を突破して、經濟界の本質に觸れなければ

擴張、再生産行程の眞相を理解し、社會全體として、この資本蓄積の意義を看破することができないと云つてゐるといふ。

五、偶然變動と中斷的變化

經濟社會は絶えず發展してゐるものである。卽ちたへず生長、變革、後退しいづれかの途を歩むでゐる。この發展的變化を趨勢變動もしくは繼續的變動と呼ぶことは前述したが、この發展的變化を中斷する變化を、偶然變動もしくは中斷的變化と稱するのである。偶然變動といふ言葉は嚴密に解釋すれば適當でない。けだし、この社會に偶然といふものはない。或現象が偶然に現れたように見えても、それはそう見えるだけであつて、よくその原因を分析して見るとそれは必然なのである。その原因がよく判らないために偶然的、突破的現象と見られるのである。したがつて、ワーグマンのように、中斷的變化といふ項目に分類することが正しいと思ふ。例へば新しい市場が現れて急に商品の賣行が增加したとする。かうしたことが繼續的に起これば、これは趨勢變動だが、これが一回起こつたゞけで繼續しないとする。かゝる場合この量的變動を偶然變動と云ふのであるが、この現象は、經濟社會が、生長、變革、後退のいづれかの繼續的變化の途を辿つてゐる場合に、その進行を中斷する。その中斷の仕方が、その中斷によつて發展を挫折せしめ、發展の方向を移動せしめ、また發展を破壞し、分裂し、增進せしめる場合には、これを斷續的變化と呼び、さらに、中斷の仕方が、罷業の場合のごとく發展を一時的に中絶せしめるならば、これを過渡的變化と呼ぶ。

六、反覆變動——週期的變動

量的經濟變動のうち、週期的に、反覆する變動を反覆變動もしくは週期的變動と呼ぶのであるがこの場合注意を要することは、反覆するといつても、或狀態から出發して或變化を經て再び原型に戻るといふ意味ではないと云ふ點である。反覆された變動は前の變動とは內容を異にするのである。したがつて反覆するのは變化の內容ではなくて、その變化の經過（プロセス）なるのである。例へば毎年六月末とか十二月末とかの期末乃至は年末には取引決濟の繁忙から兌換券が膨脹する。かゝる膨脹が毎年繰返へされ反覆されることは事實だが、膨脹內容はその時々の變動によつて異るごときである。また經濟社會は回復期、好況期、反動恐慌期、不況期のプロセスを反覆して變動するといはれるが、この場合反覆するのは、回復好況、反動恐慌、不況といふ經過であつて、反覆された回復狀態、好況狀態、反動恐慌狀態、不況狀態、はいづれも、以前のそれらと內容を異にしてゐるのである。內容の同じ、二つの經濟變動といふものはありえない。

七、季節變動——拘束律的變動

週期的、反覆變動は季節變動（拘束律的變動）と景氣變動（自由律動的變動）とに分つことができるが、そのうち季節變動とは、季節的に必ず反覆される機械的の運動である。景氣運動は、有機的であつて、經濟界と云ふ一個の有機體が、全體として一定した軌道を辿る場合であるが、季節變動は、機械的であつて、經濟界の一部分が他の部分とは獨立に、外部の條件に制約されて、一定の軌道を辿る場合に外ならない。ゆゑに、拘束律的變動とも呼ばれるのである。從つて、季節變動は部分的であり反覆的であるが、景氣變動は、全部的であり、循環的である。つまり、部分的、機械的だから反覆的であつて、全部的・有機的であるから循環的であるのだ。手近な例をとれば、朝は氣分が爽快であるが、夕方は氣分が陰鬱になるが如きは、外部の條件に規定せられて、心の一部分が一定の軌道を辿るのであるから、之は反覆運動である。ところが、悲しんだ後には樂觀すると云ふのは、心そのものゝ內部的關係からして、心全體が一定の變動を辿るのであるから、之は明かに循環運動である。以上のごとくであるから、季節變動は（一）その反覆が季節といふ外力に支配されること。（二）その變動が一定の軌道を辿ること。（三）その變動が有機的組織的でないこと、といふ三點を特色とする。（季節變動については「經濟界季節的變動の研究」——野村證券調査部著の良書あり、以上の說明はこの書による）

第二節　景氣變動とは

一、景氣變動の意義

景氣變動もしくは自由律的變動は、經濟現象のうち、質的變動と、量的變動のうちの單一變動、反覆變動のうちの季節的變動を除いたところの經濟變動であるといへる。また景氣變動とは經濟現象のうちの一部類たる量的變動のその一部類たる反覆變動の、そのまた一部類の經濟變動であると云ふことができる。

したがつて景氣變動の特質は第一に量的變動であるといふことである。

第二の特色は反覆的であることだ。但し反覆的ではあるが、季節的變動のように外部の事情に拘束されて反覆されるのではなく、その運動自身の內部の事情から反覆される自由律動をもつてゐる變動である。さらに季節變動の項に述べたごとく、部分的でなく全體的であり、機械的でなく、有機的な變動である。

第三に反覆の時間的制限が季節變動ほど判つきりとしない。季節變動は大體において一年を單位

とされるが、景氣變動の週期ははつきりとしない。と云つてもこの變動の週期が十年、二十年、三十年、五十年、百年といふ長きに亘れば、それは進歩變動とか趨勢變動とか呼ばれる變動となる。よつて大體の週期は數年を單位とするものと見られてゐる。景氣變動が數年を單位とする週期的變動であるといつても、一週期と他の週期とは必ずしも時間的に長さを一定するものではない。各週期の變動の內容の異ることは申すまでもない。景氣變動研究の權威ミッチエル氏はこの點について次のごとく述べてゐる。

「甲の時から乙の時へ、甲の國から乙の國へと沈滯、恢復、繁榮、頓挫が繰返へされるといふことは、この年表　ソープ氏編アメリカ經濟調査局公刊の財界年表）中に概括された諸經驗から抽き出された主たる結論であるが、併し、第二の結論は、凡そ總ての範圍に亘つてこの反覆なるものが、決して二度と再び同じ仕方では反覆されないものであるといふことこれである。もろ〳〵の景氣循環は、その繼續期間においても、また、その循環中の個々の段階の相對的長さにおいても、異るものであり、產業上及び地理上の關係においても異れば、循環の强さにおいても違ふし、甲の國から乙の國へと殺到してくる時間と均一性とにおいても相違するものである。」

つまりミッチエルは變動の順序は同じだが、變動の內容、時間的長さ、においては異るといふのである。

景氣變動をさらに分類して、循環變動、人氣變動、眼先變動の三つに區別されるが、人氣變動及眼先變動は、その變動の經濟社會におよぼす影響程度が循環變動より、著しく低いこと及びその測定方法が困難であるために、多くの場合景氣變動とは循環變動を指す意味に用ひられ、人氣變動眼先變動は無視されてゐる。

要するに景氣變動とは（イ）數年置きに循環的に繰返へされる（ロ）量的經濟變動であると定義しうるであらう。人によつては、循環の時間的長さを規定して景氣變動を說明する場合には週期的景氣循環と呼ぶべきだと說いてゐるが、そして、それは確かに理由のあることだが、本書ではそんなに窮屈に文字に捉はれる必要はあるまい。

景氣變動論もしくは景氣變動學說（或は新しい言葉で景氣科學とも云ふ）は、かうした意味の景氣變動がどうして起こるかを說明し、さらに將來の景氣變動を豫測しようとする學說である。

二、景氣變動と他の經濟變動との關聯

以上によつて、いろ〳〵な經濟變動と景氣論で取扱ふ景氣變動とを區別して說明したが、實際問題としては、かような區別があるわけではない。以上區別した經濟變動のいろ〳〵は、決して、それ〳〵獨立して存在してゐるものではない。經濟社會の有機的變動といふものは一つしかないもの

であつて、この一つの有機的變動を理解する便宜上、以上のような區別を設けたに過ぎない。

從つて質的變動と量的變動とは別個の變動ではない。量的變動の中には質的變動が含まれ、質的變動は量的變動の形態をとるものである。丁度人間の精神と肉體とが區別できないのと同じである。精神の量的表現が肉體であり、肉體の質的表現が精神であるのと同じように、經濟活動の質的變動の量的表現が量的變動であり、また、その質的表現が質的變動である。そしてまた、肉體が精神に、精神が肉體に影響を及ぼすように、量的變動は質的變動に、また質的變動は量的變動に影響を及ぼし合ふ。經濟變動乃至景氣變動を觀測するにあたつて、このことを閑却してはいけない。

また、同じ量的變動のうちの、區別、卽ち單一變動、同偶然、趨勢兩變動、反覆變動、同季節、景氣兩變動その他の細かい區別とても孤立的に獨立的にそれらの變動が存在してゐることを意味するものではない。それらは經濟社會といふ一つの有機體の全變動の中に不可分的に含まれてゐるのである。それだのにどうして、いろ〳〵な區別を設けるかといふに、この有機的な經濟社會に起こる景氣、不景氣の循環的變動の姿とそして、その原因をはつきりと識るための便宜上から出でたものである。この經濟社會といふ有機體は、以上述べたいろ〳〵の量的變動を同時に起こしてゐるのであるが、この變動の跡を統計資料によつて調べて見ると、以上述べたような變動の仕方を現はすいろ〳〵な數字的傾向が出て來るのである。そこで經濟社會全體の量的變動を示す統計から、單一變動、季節變動を示す統計を除けば景氣變動を示す統計が現れて來る。かうすることによつて景氣變動を具體的に識り、また景氣變動が他の變動によつて、いかなる影響を蒙つてゐるかも知ることができる。といふ建前から、右のような區別を設けたものである。よつて、この區別は人間が頭の中で勝手に設けたものであつて、經濟變動それ自身のうちに、かゝるいろ〳〵の變動が個別的に起こつてゐるものではない。そしてまた、かうしたいろ〳〵な變動が同時的に不可分的に起こつてゐる以上、それらの變動が相互的に影響し合つてゐることは云ふまでもない。

かういふ次第であるから、景氣論乃至景氣學說が、景氣變動を他の變動から切り離して、獨立したものとして論ずるのは誤りであるし、かうした立場に立つては景氣變動を正當に說明しえない。

三、景氣の內容

以上の說明は、景氣變動を、量的經濟變動の變動形式から解說したのであるが、これだけではまだ景氣變動の內容が說明されてゐないから不十分である。

景氣變動卽ち數年置きに循環的に變動する量的經濟變動形式は資本主義經濟社會にのみ起こる特殊の變動であり、この變動こそ資本主義社會の特徵である。これは資本主義經濟經綸が發生した後と、それ以前との經濟變動を經驗的に實證的に調べて見た結果到達した結論であつて、この點につ

いては、異論がないようだ。景氣變動とくにその循環變動以外の經濟現象――質的變動、量的變動中の單一變動、反覆變動中の季節變動等――は、中世紀における經濟組織の下にあつても、現在のソヴエート社會主義經濟組織の下にあつても、存在したし、存在してゐる。

けれども、今日までの經驗と、實證的な研究の結果、景氣循環といふ形の經濟變動は、資本主義經濟制度の下においてのみ發生するものであることが、確證されてゐる。

どういふように確證されたかといふに、過去における恐慌の歷史を調べた結果、中世紀における恐慌の襲來する時期は、いちじるしく不規則であるが、それがだん〳〵規則的になり近世、とくに產業革命完成以後（資本主義發生以後）における恐慌襲來期はほゞ十年乃至七年の間隔を置いて週期的に訪れてゐる事實が發見されたのである。次に參考のため恐慌の週期性が最も典型的に發展したイギリスについて、恐慌發生年代を誌して見よう。

1825年	中世的恐慌（不規則）	1640年	
1836〃		1667〃	
1839〃	近世的恐慌（規則的）	1672〃	
1847〃		1695〃	
1857〃		1708〃	
1866〃		1720〃	
1873〃		1745〃	
1882〃		1763〃	
1900〃		1772〃	
1907〃		1778〃	
1914〃		1783〃	
1920〃		1793〃	過渡的恐慌（稍々規則的）
		1796〃	
		1810〃	
		1815〃	
		1819〃	

十九世紀の二十年代に入つて產業革命は一應の完成を遂げ、恐慌は純粹に近世的性質を帶びて來た。以後約半世紀の間約十年の間隔をおいて規則正しく發生し、この頃から恐慌の週期性が注目されだした。即ち、恐慌は近世資本主義の成立（產業革命の完成をもつてそう看做す）とともに週期性を帶びて來たのであり、かくて景氣の週期性――循環性は資本主義の所產であり、その特徵であると看做されるに至つたのである。かようなわけであるから、景氣變動の本質は何かといへば、それは、資本主義經濟組織だといふことになる。つまり、資本主義經濟組織の變動の量的表現が景氣變動なのである。

しからば、資本主義經濟組織の本質は何か？　といへば、それは、利潤經濟、營利經濟であるといへる。つまり、この利潤經濟、營利經濟といふ性質が、資本主義經濟を、中世紀經濟（封建經濟）や社會主義經濟と區別せしめる根本の基準となるのである。そして、この營利經濟、利潤經濟の特徵は大體次の四つであるといはれる。

一、價格制度――各企業者が經濟價値（人間の欲望を滿足させるに役立つもの）を造るよりも、價格の差增による利潤を獲得することを目的として經濟生活を營むものであつて、自由競爭（無政府的生產制度）と私有財產制度とは價格制度の骨子である。

二、機械生產による大市場生產制度。

三、貨銀制度――卽ち純生產價額（剩餘價値）を生產要素提供者（資本家、企業家、勞働者）に分配するに當り、企業家の手を經てなされること。

四、信用制度――鑄造貨幣以外の預金通貨が流通要具として盛んに用ひられ、金屬貨幣以外の手段による決濟法が盛んに行はれること。

そこで、かういふことになる。卽ち景氣とは資本主義經濟組織の量的表現であり、したがつて、利潤經濟、營利經濟の量的表現であるし、さらに利潤經濟の特徵たる（イ）價格（ロ）市場生產（ハ）貨銀（ニ）信用の量的表現であるのだ。景氣循環變動とは、かうして定義ずけられた景氣の循環的變動に外ならない。されば社會主義社會にはこゝに云ふ景氣も景氣變動も存在しない。

つまり、景氣變動は、變動の形式から分類すれば循環變動となり、その內容から定義すれば資本主義の特質たる利潤、價格、生產、貨銀、信用の量的變動となる。であるから、好景氣とは利潤が增大し、價格が昂騰し、生產が增加し、貨銀が騰貴し、信用が膨脹する狀態であり、不景氣とはその反對の狀態を指すのである。

四、アダムスの景氣觀

景氣研究の一權威と稱せられるアダムス氏の景氣、不景氣、好景氣に關する定義を紹介すれば、次のごとくである。

(1)　景氣と基本的經濟狀態卽ち商業制度（筆者註・利潤制度）とは同一體である。資本主義制度は企業を通じて活動する。企業の目的は他人のために生產し、事業の各個人所有者のために利潤を獲得するにある。商業制度は、財貨の使用價値よりも、むしろ其交換價値を重視する。實業家は事業を指揮するに當り主としてその受くべき利潤に關心するのであつて、其事業上の活動が、社會にいかなる效果を及ぼすかについては、たゞ理論的興味をもつに過ぎないのである。商業制度の原動力は利潤の豫期である。

この制度は利潤獲得といふ一定の目的のため實業家によつて組織されて居り、利潤の豫期は彼等の商業上の行動を決定する殆ど唯一の力である。故に事業は豫期利潤の少なる時には不振となり、大なる時には勃興する。商業制度が一段の經濟厚生を增進するために組織せられたと想像するのは大間違ひで、その目的は組織者の個人的利益を圖るにあつて、この制度が圓滑に運用せられてゐるときには、各個人の自利追求の偶然の結果が、全體の經濟厚生を增進することゝなるのである。併し商業制度の運用が圓滑でない時には自利の追求は屢々他人の經濟厚生を害ふものである。一般の經濟厚生と景氣の趨勢との上述の關係こそ、後者を個人の利害の問題たらしめるのである。

(2)　景氣の趨勢即ち景氣の情況が基本的經濟狀態と對照せられる時には「ビジネス」(英語——景氣の意味)なる言葉は、商況即ち特定の物價平準と利潤の餘剩(筆者註——資本主義の特定狀態)の下に於ての商取引の量を意味する制限された觀念に用ひられる。玆に基本的經濟狀態と云ふのは、景氣を左右する諸原動力を指すもので、その中には、生產高、在荷高、信用狀態及び各經濟階級の相對的收入等の要素が含まれる。故に景氣の大勢とは市場の大勢と同義である。

景氣が好轉すると云はれるときには、商取引の增加、或は物價の騰貴のために、實業家の利潤の增大してゐることを意味し、景氣がよくないと云はれるときには、商取引量少なく、或は物價弱含みのために利潤の少ないことを意味する。

五、景氣の語源的意味

獨逸語では景氣のことを「コンヂュンクツウル」と呼ぶが、ワーゲマンによれば、この言葉は、中世紀における星學上に用ひられたラテン語であるといふ。星學ではこの言葉は大體「星座」(コンステラチョン)といふ言葉と同じ意味に用ひられ、その時々の星辰相互の地位のことを指す語だそうである。そして十七世紀頃に、これが、日常生活の用語に使ひられ、間もなく商業用語に轉化し事業の盛衰を意味するようになり、更に景氣を意味するようになつたといはれる。英語の「ビジネス」(景氣)は、アダムスによれば商況の意味であるといふ。商況即ち商取引の量と、事業の盛衰(コンヂュンクツウル)とは密接な關係をもつてゐるのであり、從つて、獨逸語の「コンヂュンクツウル」は、語源的に見ても英語の「ビジネス」と大體同じような意味をもつてゐることが判る。

なほ獨逸の景氣學者ワーゲマン氏は、この「コンヂュンクツウル」といふ事業の盛衰を意味し、景氣を意味する、言葉の最初の意味が、「星座」といふ天文學的現象であつたことは、はなはだ當をえたものであると云つてゐる。けだし、星が一定の諸法則に從つて離合するのと同樣に、經濟的諸現象も一定の合法則性に從つて交互錯綜してゐるからであるといふ。

第三節　景氣變動の經過

一、二分法から六分法まで

景氣變動が變動形式から見て循環運動であり、內容から見て、資本主義制度の特質たる利潤を中心とする價格、生產、賃銀、信用等の量的變化であること前に解說した。それならばこの循環運動は、どういふ段階を辿つて循環するか？　この經過をよく識つておくことは、政府が景氣政策を

樹てるに當つても、資本家が利潤を擁護するに當つても、大切なことであるために、學者は、いろ〳〵の區別を設けて、この經過を理解するに努力してゐる。

最も簡單には、景氣の上昇期（好況）と下降期（不況）に區別される。好況から不況への轉換は急激であり、從つて、此轉機を劃することは容易であるが、不況から好況への轉換は徐々であり、從つてこの時機を明瞭に劃することは普通の場合困難だといはれる。好況期にはすべての經濟活動は活潑となり、著しく量的に伸張するが、不況期には經濟活動は萎縮して量的に收縮する。二分法はたゞこれだけを云ひうるに過ぎないから、景氣の經過を說明しうるためには更に段階を小分する必要が起こる。三分法をとるものは、上昇期のみを更に二分して恢復期と繁榮期（好況前期と好況後期）となし、四分法をとるものは更に下降期をも二分して之を恐慌期と沈滯期とする。ベルリン景氣研究所は之に屬する。ハーヴアード研究所は更に繁榮期の最後に金融緊張期を劃して五分法をとり、六分法をとるシユピートホフ氏は更に沈滯期を二分してその後期を恢復前期とし、かくて上昇期を三分し、下降期を二分してその中間に恐慌を獨立せしめる。併しこれら各時期の區劃は、恐慌を除いては何れも漸次的推移を示すに過ぎず、その轉機を適確に指摘することはむずかしい。しかも上昇期の前期と後期とは甚だしく事情を異にするから、この兩者を區別しなければ、景氣の經過を明かにすることは困難である。（岩波版經濟學辭典――景氣變動の項參照）

谷口吉彥氏は、株價と物價と金利との變動關係から次の六分法を採用してゐる。

		株價	物價	金利
好況期	恢復期	上向	下滯	下向
	繁榮期	上向	上向	下滯
	區迫期	上滯	上向	上向
不況期	恐慌期	下向	上滯	上向
	沈衰期	下向	下向	上滯
	緩和期	下滯	下向	下向

二、ミツチエルの四分法

ミツチエルは、景氣循環の階段を、恢復期、好況期、反動恐慌期及び不況期の四段階に分割してゐるが、この四段階が一般に採用されてゐる。

好況期と不況期との間の期間を從來は一般に恐慌期と名づけたのであるが、今日では、これを反動期又は恐慌期と名づけるものが多い。これを恐慌期と稱する場合には、恐慌の解釋に二樣の見解があるために、景氣循環の段階として不都合が生ずることがあるといはれる。卽ち恐慌をアフタリ

オン氏の意味するように好況から、不況への轉換過渡期であると考へる場合には別段に不都合ないが恐慌をブニアチン氏の云ふように、經濟生活の有機的攪亂であり、大多數の企業の資產並に所得に大損害を蒙らしめる、完全の經濟的變亂であると解釋するときには、景氣循環の一段階を說明する言葉としては不適當となる。けだし、景氣循環の過程においては、後者の意味のような、恐慌を伴はない、好況期から不況期への推移があるからである。よつて景氣循環の段階としては、單に恐慌期とせずに、反動期又は恐慌期を略した反動恐慌期といふ段階を設けるのがよいといはれる。

第四節　景氣變動の原因

一、基礎的前提條件

景氣變動の原因として次の三つを擧げることができる。（一）基礎的前提條件（二）直接的動因（三）自律運動がそれである。まづ基礎的前提條件から說明しよう。景氣といふもの、從つて景氣現象といふものは、資本主義社會においてのみ存するものであることは、すでに述べた。されば、景氣運動は資本主義經濟組織といふものがあつて、はじめて起こるものである。そして、資本主義經濟組織の特質は、利潤經濟、營利經濟であり、さらに、この利潤乃至營利經濟を可能ならしめる條件は、私有財產制度と、生產の無統制、無政府制とである。かくて私有財產制と生產の自由競爭制が、景氣運動を可能ならしめる基礎條件である。或人は、この點を次のように說明してゐる。

「基礎條件とは、景氣變動の起こりうる可能性を與ふる諸條件であつて、これなくしては景氣變動は現れないが、而もこれだけでは變動を起こすに足りないものである。その根本的のものは、社會組織における經濟活動の自由放任制にある。生產、賣買、消費は今日の社會に於ては個人の自由に放任せられてゐる。就中生產活動の自由放任卽ち生產の無政府制は、今日の景氣を上下せしむる根本的條件の一つである。それ故に各人の經濟活動が國家又は社會の統制を受ける度を加へるに從つて景氣運動はその樣態を變化すべく、個人の自由經營を許さぬ計畫經濟に進めば、今日の意味における景氣變動はその跡を絕つであらう。」と

二、直接的動因

直接的動因とは景氣變動の可能性に現實性を與へる動機を云ふのであつて、前述の基礎條件の存在するところに、この直接的動因が加はつて、はじめて景氣變動は發動するのだといはれる。この動因には經濟以外のものと外部經濟に屬するものとを含み、前者には戰爭騷亂のごとき社會的政治的のものと、天災豐凶の如き自然的物理的のものとあり、後者は、國際貿易の消長による直接影響

と、世界經濟の變動による間接的影響とを含む。いづれにせよこれらの種々な動因が發動しなければ景氣變動は現實には起らないけれども、これらの動因だけで、今日の景氣變動が成立しうるものでないことは、これらの動因が働いた歴史は古いにもかゝわらず、この現象が僅かに百年以來の現象に過ぎないことによつても明かであらうと云はれる。

三、自律運動

自律運動とは運動自身の中に自らの原因を作りながら進むで行く變動である。かうした運動を可能ならしめる基礎が資本主義經濟組織そのものであることは申すまでもない。自律運動をもつと具體的に説明すれば、例へば恢復期における株價の上向、物價の底入、金利の下向は、それだけで自らを繁榮期に推し進める原因となる。(むろん資本主義經濟組織を前提として)また、繁榮期における諸事情は自らを逼迫期に押し上げる力となる。このように一定の方向を與へられた運動は、その同じ方向に自らを推し進める力を有し、その限りでは何等外部からの動因を必要としない。)しかし景氣變動は常に一定の方向に進む運動ではない。(常に一定の方向に進む運動は趨勢變動もしくは進歩變動と呼ばれる)少くとも上昇から下降に轉ずる恐慌期と、下降から上昇に轉ずる恢復期とにおいて、前後二回の方向轉換をしなければならない。この方向轉換を起こさせる原因は即ち前述の直接的動因に外ならない。自律運動を自ら作り出す推進力は常に一定の方向に向ひ、結局その方向への行詰りをもたらすに過ぎないといはれる。例へば逼迫期の進行するとともにその方向への進行を阻害する諸條件が醸成されて、こゝに景氣の進行は行詰りを來す。けれども、それが急激に方向を轉換して恐慌となるためには何らかの動因を必要とする。この意味では自律運動は一つの可能條件をなすとも見られる。いづれにせよ恐慌期において一定の下降運動がはじまると、自律運動の推進力は何等外部の力を借らずして沈衰期から緩和期に沈下する。然るにこの下降運動が方向を轉換して上向するためには、そこにまた何らかの外部的動因を必要とするといふのである。

言葉を換へて説明すれば、直接的動因として擧げられた經濟以外のもの(戰爭騒亂、天災豐凶等)及外部經濟(國際貿易、世界經濟等)は、いはゆる經濟現象の質的變化である。このうちには經濟組織の變化といふことも含まれる。要するに景氣變動は、かうした質的變化に伴ふ量的經濟變動である。しかし、質的變化そのものは必ずしも景氣變動を起こさない。かゝる變化は社會主義國にも起ることだし、社會主義國に起こつても、それは景氣變動を伴はない。質的變化が景氣變動を伴ふためには、それが、資本主義經濟組織によつて制約されるといふことが根本條件である。自律運動も資本主義制度を前提としてはじめて存在するのである。したがつて景氣變動を理解するためには、例へば、戰爭といふ質的變化が生じたとすれば、これが、私有財産制と無政府的生産制を基礎

とする資本主義經濟制度の下において、利潤、物價、生產、賃銀、信用の量に對して、自律運動を通じて、どう發展して行くかを理解しうれば足りる。

筆者は、景氣變動の原因について、こゝで、きわめて斷定的に說明を試みたが、此原因論については、古から、澤山の學說が存してゐて、歸一するところを知らないのである。或は以上述べた說明のうち、基礎條件たる資本主義制度に原因の重點を置く說（社會主義學說）、或は直接的動因たる經濟以外のものまたは外部經濟に重きを置くもの、資本主義制度のうちの一部の變動（例へば貨幣商品のごときに重きを置くもの、自律運動に重點を置くもの等澤山の學說が行はれてゐる。尤も、いろ〳〵の學說があるといつても、それらの學說は一つの原因を絕對的原因として固執してゐるのではなく、他のいろ〳〵の原因も、考察の中に入れてはゐるが、たゞ比較的に一つの原因に重點を置いてゐるといふ點に差異があるに過ぎない。そして、筆者が、この項でいろ〳〵な學說を紹介する前に、右のごとき特定の原因論を述べたのは、右のごとき解釋が原因論としては比較的無難であると考へたからであり、そして、あらかじめ、かうした景氣觀を頭に入れて置くことによつて、以下紹介するところの景氣學說を理解せしめるに役立つであらうと思つたからである。

第二章　景氣變動の學說

第一節　旺んな景氣研究

一、景氣研究はなぜ旺んになつたか？

經濟學の目的は、單なる理論的興味をもてあそぶことにあるのでないことは、云ふまでもない。その目的は、けつきよく、われ〳〵の實際の經濟問題の解決に役立つことにある。ところで、從來の、いはゆる靜態經濟學と稱せられる理論經濟學は、今日の復雜化し、變動の烈しい經濟現象を合理的に說明しえなくなり、その實際的價値を著しく減じた。

一方、經濟變動が、ます〳〵激しくなるにつれて、資本主義國家は、一般國民生活が攪亂され、ひいては、資本主義の基礎の動搖することを防衛するうへから、適當な經濟政策を施さなければならなくなつたし、また、資本家連は利潤を擁護するうへから、この激しく變動する經濟社會を、うまく泳ぎ切る策を樹てる必要に迫られた。この資本主義國家並に資本家連の欲求は、資本主義が末期となり、その經濟變動が、いよ〳〵猛烈をきわめるにつれて、ます〳〵强烈となつた。そして、

その當然の結果として、この變動の激しい經濟現象を合理的に說明し、その動きの有樣と、動く方向とを的確に示して、國家的及び個人的景氣對策を可能ならしめる、動く經濟現象を取扱ふところのいはゆる動態經濟學が要望されるに至つた。

尤も、景氣研究が起こつた歷史を調べて見ると、その初期においては、景氣研究の動機は、今日のそれとは著しく異る。今日の資本主義社會における景氣研究の動機が、資本主義經濟の變動を防ぎ、資本主義制度を擁護し、かつ個人の利潤を確保し增進せしめんとするに反して、初期における景氣研究の動機は、もつぱら、經濟組織を改良もしくは變革しようとする欲求から出たものである。景氣研究の初期は恐慌研究に重點が置かれてゐたが、ではなぜ初期において恐慌研究が旺んになつたかといふに、かういふ風に說明されてゐる。卽ち古典經濟學は自由經濟をもつて、經濟的共同行爲の諧調乃至調和と看做した。從つて古典經濟學の恐慌理論は、その自由發動を妨げる諸方策の批判としてのみ發展した。かくて何よりもまづ、發券銀行政策に關する討論の中から一種の恐慌論が現はれたのである。そしてソーントンとか、ホーナーとか、ハスキッソンなどの學者が、經濟的動搖は、缺陷ある發券制度にその原因を歸すべきだとの結論に到達したのは、リカルドの數量說の影響を受けたものだといはれる。ところが、恐慌理論を發展せしめ、その成立に導いたのは自由經濟諧調の原理に對する懷疑が生じたのによるといはれる。マルサスは、自由經濟の體系に缺陷あ

りと考へ恐慌の原因を、所得分配の不均等である結果、企業者は生產を行つたと同じ割合で消費を行ふ權力をもつてはゐるが、意思を有せず、反對に勞働者はその意思をもつも、權力をもたない點に求めてゐる。オーエン、シスモンデイ、ロードベルトウスといふ人たちも、マルサスと同じように、自由經濟體系の缺陷は、生產と消費の均衡の攪亂にあると見た。かくて自由經濟制度そのものを批判として、その改造乃至改革論として、恐慌現象を研究するに至つたのである。そして、無數の國民經濟的活動は、現實において、決して、すべての經濟力の諧調のうちに遂行されるのではなく、攪亂——部分的には危機的な性質の——の下に遂行されるものであると認識したのである。マルクスの恐慌理論もかゝる認識のうへに立つ。かうして、この認識は恐慌理論を發展せしめ、經濟の攪亂、動搖を第一次的のもの卽ち正常的のものと解する今日の景氣論を生む礎石となつた。

このように、資本主義社會における自由經濟活動の調和に疑ひをもち、その體系の缺陷を指摘しその制度の改革を行はんとする意圖から發展せしめられた恐慌論は、今日においては、資本主義經濟社會の動搖の波に乘つて、いかに資本家たち個人の利潤を確保し、增進せしめるかを敎へんとする景氣科學として繁榮するに至つた。

「景氣研究といふ新たな科學の意識及び目的は、景氣の過程を觀察し、恐慌の時點を正確に識別し、依つて以て、この推移をできるだけ容易ならしむべき力を、資本家たちに與へること、これ

である。少數の愚人共に至つては、景氣研究の途を通じて「景氣變動なき經濟」卽ち資本主義の永久的繁榮に到達しようとさへ、夢みてゐる」と評した人があるが、これによつて、景氣變動現論とか、景氣科學とかいふ學問の性質を識ることができよう。

二、景氣變動學說はなぜ多いか

景氣變動とくに景氣循環變動を說明する學說は一人一說といはれるほど數が多い。その學說を分類するだけで功績の認められてゐる學者もあるくらひである。ベルグマンといふ學者によれば、已に、一八九五年においてさへ、經濟循環に關する異つた學說は三百三十種を數へてゐる。その後經濟活動がもつと複雜化し、變動數が多くなり、變動の波が大きく、その規模が世界的になるに及んで、さらに澤山の景氣循環學說が大量に生產されてゐる。元來學問上の定義や法則には、とかく異說の多いものであるが、「景氣循環學說にとくに著しく異論が多い理由」としては、次の諸點が擧げられてゐる。

一、ミッチエルといふ景氣學者の云ふ通り、經濟界が恢復期。繁榮期、恐慌期及び沈衰期の順序を追ふて、波狀を描いて進展する有樣は、現代產業組織の發現以來如何なる國でも如何なる時でも相違がないのであるが、國の異り時の變るにつれてその有樣は全然同一でない。從つて各觀察者が取扱つてゐる經濟循環現象の內容それ自體が、時と所との差異によつて相違してゐるのであるから、異說の生ずるのは敢て怪しむに足らぬ。

二、假に同じ時同じ所における循環現象を取扱つたとしても、論者の職業、敎育、資力、階級思想、地位等の異るに應じて見解の相違を來すことは免れがたい。

三、景氣研究が從來行つて來たものは、單純な經驗の分析であり、過去及び現在における事實上の景氣過程に關する材料の集積である。そして、これを理論づける場合には、景氣を動かす諸要素の選擇及びこれら要素のウエイトの如何、並びに數學的加工法の種類によつて、その評價に甚だしい相違が現れて來て、學說を區々ならしめる。

四、資本主義の本質に關する理論が、明快にされてゐないか、もしくは、故意に歪曲されること。

五、とくに最近においては、純經濟的要素よりも政治的要素が、景氣を動かす程度が强くなり景氣變動がいちじるしく不規則になつたこと。

「景氣學說の多いことは、自漫にはならない。それは、景氣理論が、まだ、いかに未完成であり、不十分であるかの證據であるに過ぎない。」

第二節　景氣變動學說の歴史

一、景氣學說の進歩

景氣學說の形成されたのは、十九世紀中であるといはれる、その理由は、元來景氣現象は資本主義經濟組織の下における特徴的な現象であり、資本主義組織が或程度に發展した後でなければ現れて來ないものであるが十九世紀中において、資本主義經濟組織は、一應成立されたからである。その後歐洲大戰以後、資本主義が著しい發展を遂げるに至つて、景氣學說も素晴しい發展を示した。

尤も十九世紀もまだ初めのうちは、資本主義の成立の過渡期であり、景氣現象は、たゞ恐慌の反覆といふ形で現れてゐたに過ぎなかつたので、學者の注意もまた專ら恐慌に傾注されて、こゝに多くの恐慌論が發生した。十九世紀初期の景氣研究が、恐慌論を中心としたものに過ぎなかつたとはいへ、十八世紀時代の恐慌論が、恐慌の本質的研究にふれず、たゞ表面的な戯曲的叙述に傾いてゐたのに比すれば、著しい進歩を示してゐた。

この十九世紀、初期の恐慌論が、古典的正統派經濟學者によつて、「自由經濟活動の諧調を破壞する政策への批判」として現れ、次いで、社會機構の批判家、革命家の手によつて、「自由經濟活動諧調

への疑惑、「自由經濟體系そのものゝ批判」を通じて、發展せしめられたことは、已に紹介したが、自由主義經濟制度の批判家の手による恐慌理論は、今日の、景氣變動理論に近い點にまで發展してゐたといはれる。

二、十九世紀の景氣學說

伊太利系瑞西人であるシスモンヂーが、一八一八年に書いた經濟學に關する論文は、景氣變動論の嚆矢であると看做されてゐるくらひだ。シスモンヂーは、當時、歐洲を風靡した經濟界の波亂に、非常に感ずるところあり、商工業者の困窮を見、勞働階級の苦痛を見るにつれて、景氣變動の原理を知らうと欲した。そして、自由放任主義の是否、機械生產の功罪、正統派經濟學の正邪等に關して、すこぶる懷疑的態度をとるに至つたと云ふ。彼の景氣變動原因觀は次のごとくであつてその後の景氣學說は彼に負ふところが多いといはれる。

一、經濟界の波瀾の根因は商業制度の罪である。

二、經濟界波瀾の第二の原因は、產業界活動の時期における市場に賣出される商品の價格の緩和よりも、消費者の財貨に對する購買力の緩和が少ないこと。

三、貯蓄の過剩。

四、所得分配の不平等。

シスモンヂーに續いて、十九世紀中に、恐慌沈滯現象を出發點として、景氣循環現象を取扱つた學者が輩出した。十九世紀中におけるこれらの學說を簡單に紹介すれば、次の通りである。

一、不均衡說――生產過剩又は消費過少をもつて經濟界の波動的變動の原因であると看做す。卽ち現代機械生產の發達に伴ひ、社會の消費力よりも生產力の增加の方が迅速であるから、週期的に一般的生產過剩を來すのである。つまり生產品を有利なる價格をもつて處分しえず、そのために企業家は生產を中止せざるをえぬことになるのであるが、その生產の中止は却つて消費力の減退を一層濃厚にするから、經濟界の不況を一層擴大せしめる。

二、自然現象說――スタンレー・ジエボンズといふ學者は太陽の放射熱の變化が氣候に影響し、氣候は收獲高を左右し、收獲高が景氣を支配すると云ふ學說を一八七五年に發表した。

三、異常現象說――經濟界の循環的變化は、革命的大發明、新交易經路の發達、戰爭、平和の克服、關稅の改革、貨幣制度の變化、凶作、流行の變化等の異常現象が、恐慌沈滯を惹き起こすのであると論ずる說。（ロッシエル）

四、社會主義說――生產量の不調節は要するに資本主義制度に存在する。生產者は其生產品を市場に賣出すまでに數ヶ月を必要とするのみならず、投資家はその企業の生產品が市場に表はれるに、數年先立つて投資を行ふのであるが、この資本主義產業組織は必然的に生產量の不調和を生ぜしめるとの說。（シスモンヂー、シエフレー）ロドベルタス、マルクスは更に明瞭に、景氣變動が、質本主義經濟組織の必然的疾患である點を指摘してゐる。現代社會に於ては賃銀は純生產額の一部を占むるに過ぎないのみならず、その增加は生產力の增加に比して遙に遲い。國民の大多數は賃銀取得者であるが、彼等は市場に提供される消費財を購ふに足るだけの充分な購買力を持つてゐない。然るに他方において資本家的使用主は、より多く分け取りした部分を投資するから、その投資した企業は更に多くの生產品を市場に提供することになる。その終局においては救濟すべからざる程度の生產過剩を生ずることになり、恐慌を起こすと論ずる。

五、心理說――恐慌は經濟制度の特質又は亂用によつて生ずるものであると解するよりも、寧ろ企業判斷に際し陷る心情的錯亂によつて生ずるのである。取引が圓滑に進むときには樂觀を生じ、樂觀は無謀を生み、無謀は不祥事を釀す。反對に恐慌といふ不祥事は悲觀を生み、悲觀は停滯を齎すのである。沈滯期から回復に轉ずるのは、人々が、彼等が懸念せるよりも事情が遙に良化せることに氣付いたときであると論ずる。（一八六七年ジョン・ミル）

十九世紀の景氣學說は大體右のようなものであつたが、十九世紀において最も注目すべき點は、その後半世紀に入つて「恐慌學說」が「景氣循環學說」へと進步したことであると云はれる。これは統計材

料の充實と、經濟界の年代史的記錄の整備と、經濟界の變動に關する實證的並に歷史的考究が發達したことゝ、それから何よりも、景氣變動そのものが循環的運動を起こすに至つたこと等の結果であると見られる。

この傾向に對する最初の烽火は、一八六〇年及び一八八九年においてジュグラーといふ人によつて擧げられ、一九〇〇年の恐慌及びこれに刺戟された學者の研究就中、ウイルトの商業恐慌史及びドイツ社會政策學會の研究、ツガン・バラノウスキーの英國產業恐慌史はこの方面の研究に多大の貢献をなし、また、ジエボンス及びエッヂワース等が統計的研究方法に革新を與へて、統計材料の活用法を一段と高めたことなどが手傳つて、こゝに恐慌及び景氣變動論は一轉機を劃するに至つた。つまり實在主義的、經驗的、經濟學的研究方法と數學的統計的研究方法とが結びついて發展したのである。

景氣・下景氣の循環變動が一定の週期をもつて繰返へされるといふ意見をはじめて發表したのはジョン・ウエードで、彼は一八三三年に、過去七十年間の經驗に徵して、景氣・不景氣は五年乃至七年の週期をもつて、循環的に繰返へすといふ意見を發表した。その後經濟界の循環的波動（週期）を唱へる學者が續出した。

もう一つの進步は景氣の上昇理論が研究されるに至つたことである。即ち經濟界は恢復期、繁榮期、恐慌期及び沈滯期の順序を追つて變轉するものであるが、恐慌を中心とする初期の景氣研究時代には、景氣循環現象を研究の對象とするに至つた後の時代にくらべて、その景氣學說は、景氣の下降理論に集中され、景氣の上昇理論を閑却した傾がある。つまり經濟界の繁榮が行詰りを來し恐慌狀態に陷り、財界の沈滯を招く經路の說明に力を注ぐけれども、この沈滯期から景氣が次第に恢復し、繁榮期に近づく理由の解剖は比較的輕視されたのである。然るに景氣現象に關する歷史的檢討が發達するにつれて、沈滯期から繁榮期に向ふ期間即ち景氣の上昇期が、景氣の下降期に比し、その重要さにおいて何等遜色のないことが認められるに至つた。

三、景氣論の二大學派

十九世紀中に景氣研究は右のような發展を遂げたのであるが、とくにドイツ社會政策學會の研究及びツガン・バラノウスキーの研究の流れを汲むドイツの景氣論は主として抽象的思辨的に研究され、「政策的見地に立つて原因論」を中心とした。この系統に屬する研究は戰後とくに一九二四年以後の通貨安定後における永續的不況に刺戟されて、益々活潑な研究と論議を重ねつゝあるといはれる。

ところが、これとは全く別に、產業合理化運動に刺戟されて、純然たる營利的企業として、私經

濟的見地から、經濟狀態の豫測を行ふ研究が、始めは景氣科學の發展とは非常に緣遠いものとして戰後から、合衆國に發達しつゝあつた。この系統の研究は、別の個所でも述べた通り、戰後一九一九年のハーヴアード研究所の成立以來、單なる商賣としてのみではなく學問的研究の上からも注意を惹くに至り、之に刺戟されて多くの價値ある研究及び景氣研究所がアメリカのみならず世界各國に生まれるに至つた。（第三章第三節世界の景氣研究所參照）

この系統はドイツ理論派が原因論を中心として政策論に及ぼうとするのと異つて、「狀態論を中心として豫測論」に出でようとするものであり、かくて、今日の景氣變動論は大體においてこの二系統によつて代表されてゐるといふ。

第三節　近代景氣學說大觀

一、近代景氣論の特徵

かようにして、近代景氣論が成立したのであるが、この近代景氣論の特徵を要約すれば次のごとくである。

一、方法論――意識的に實在主義的、經驗的根抵及び數學的、統計的、歸納的根底の上に打樹てられてゐる。

二、認識目標――恐慌のみを研究せず、景氣の總體を包括する。

三、認識內容――舊派の恐慌論は經濟的振動を異常と考へ、制度の缺陷に由來する疾病現象と看做した。故に經濟病理學とも稱すべきものだつた。然るに近代景氣論は經濟的振動を恒常的なもの、正常的なものとして考へる。經濟生理學とも稱すべきものである。

四、目的――近代景氣論はアメリカの初期におけるがごとく、之を營利方便として私經濟的に研究する以外に理論經濟學もしくは國民經濟學の一研究部門として研究さるべきであるといはれるが、いづれにしても、それが究極において資本家連の利潤を擁護し、確保し、增進せしめんとする目的をもつものである。この點は景氣論の初期の社會機構批判家たちの恐慌論と異る。

二、近代景氣學說の分類と解說

景氣學說の多いこと及び多い理由については已に說明したが、その分類方法もいろ〳〵に岐れてゐる。筆者は景氣學說を次のごとき分類方法によつて、區別し解說して行きたいと思ふ。

（一）研究方法及び發達系統による形式的分類、（二）景氣變動原因論を中心とする實質的分類。

（一）研究方法及び發達系統による形式的分類

この分類に從へば（一）ドイツの系統に屬する抽象的理論的研究と（二）アメリカの系統に屬する實證的統計的研究とに區分される。（二）に就いては「第三章」に於て述べてあるから略す。（一）の抽象的理論的研究は更に之を動的理論と靜的理論とに區別されてゐる。（一）動的理論とは景氣變動の各段階を平等の價値において認識し、かゝる不斷の波動を繰り返へす狀態をもつて經濟の正常狀態と認め、景氣變動は始めなく終りなき一つの連續なりとして出發するものであり、（ゾンバルト、シユピートホフ）（二）靜的理論とは變動の段階の中、沈滯期をもつて正常の經濟狀態となし、これより出發する上昇期及び之に歸る下降期をすべて不正常の狀態と考へ、此一回の回歸運動をもつて獨立した一つの運動となし、次いで新たなる次の回歸運動に移つて行く、故に景氣變動は沈滯期を始點とし、次の沈滯を終點とし、正常狀態から出でゝ正常狀態に歸る各々獨立の多數の運動の連絡となると看做すのである。（シユンペーター・ブーニアチアン）さらに抽象的靜的景氣理論は、景氣轉換の理論を說くものと景氣推移の理論を說くものとに區別される。（一）轉換の理論といふのは景氣が何故方向を轉換して上向から下向に、下向から上向に向ふかを說明せんとするもの（二）推移の理論とは何故に與へられた方向に推移し且つ推移の途中に行詰りの條件を生ずるかを說明しようとする理論であり、景氣理論としてはこの二つを包含すべきであり、とくに轉換の理論がその中心理論をなすべきであるが、學者の理論はその何れかに偏する場合が多いといはれる。轉換理論は

更に（一）上向から如何にして下向に轉ずるかの理論に重きをおくものと（二）下向から如何にして上向に轉ずるかに重きを置くものとに區別されてゐる。景氣變動論の前身とも見るべき恐慌論が（一）に屬するものであることは前に述べたが、今日でも多くの景氣論は此下向轉換論に中心を置くといはれる。以上の分類を表示すれば次のごとし。

- 形式的分類（方法論）
  - 實證的統計的方法
    - 單一法
      - 單線法
      - 複線法
    - 綜合法
  - 抽象的理論的方法
    - 動的理論
    - 靜的理論
      - 轉換理論
        - 下降理論
        - 上昇理論
      - 推移理論

獨逸のヴオイチンスキー博士はまた方法論の相違によつて景氣理論を次の四つのタイプに分類してゐる。

（イ）技術學的方法――經濟生活を機械的組織として見、これを數學的、計算的、統一的に研究しようとする方法（米國系――ハーヴアードのバブソンなどはこの流儀に屬す）

（ロ）天文學的方法――個々の重大問題を數學的に研究する（ロシア）

（ハ）生物的的方法――この方法は國民經濟を有機的組織と見る。從つてロシア系のように、經

濟現象を個々に研究することは意味をなさないと看る。かくてこの有機體を醫學的に生物學的に研究することの必要を説く。そのためには景氣のバロメーターを作成することが必要でありさらに國民經濟と國際經濟との關係を考慮に容れて、いはゆる制約條件を發見することが肝要なのである。(獨逸系ワーゲマン、シュンペークー)

(ニ)　氣象學的方法――ヴオイチンスキー博士は生物學的な方法をもつて景氣研究に不十分なりとして、氣象學的觀測の方法を新しく提案してゐる。

右研究方法のうち、(ハ)と(ニ)はいづれも財界はかうなると云ふ宿命的因果的見方をなし、それ故にかういふ對策を必要とすると説くもので、實證と政策卽ち消極と積極との兩樣の態度をとることを特徴とする。

(三)　景氣變動原因論を中心とする實質的分類

これにもいろ〳〵の分類の仕方がある。その主なるものについて簡單に説明しよう。

(イ)　一般的には次のごとく分類される。

- 實質的分類（經濟循環原因）
  - 經濟的關係に重きを置く經濟的説明
    - 貨幣に重心を置く金融説
    - 貨幣創に重心を置く
      - 生産過剰説
      - 消費過少説
  - 經濟外の關係に重きを置く經濟外的説明
    - 自然現象説
    - 心理説
- 實質的分類（原因論）
  - 外生的原因
    - 非經濟的
      - 自然的物理的原因ジエヴオンス、ムーアの説
      - 個人的心理的原因ピグー、ヘクスターの説
    - 經濟的
      - 社會的經濟的原因
        - 經濟組織そのもの―社會主義説
        - その一部的作用
          - 貨幣側―金融説
          - 商品側
            - 生産―生産過剰説
            - 消費―消費過少説
  - 內生的原因―經濟的

(ロ)　景氣變動の原因を運動の外部から來る外生的原因に歸するものと、運動それ自身の內部から發生する內生的原因に歸するものとに區別する仕方もある。卽ち次表のごとし。

右の表を説明するに、內生的原因はすべて經濟的原因と稱しうることは云ふまでもないが、外生的原因の中には經濟的原因（例へば貿易好轉、新市場の發見等）の外に、非經濟的原因に屬するものもある。非經濟的原因の中には、更に太陽の黑點、降雨の多少、有機物（天然資源のうち農、畜、林、水産物等）と無機物（天然資源中石炭、鐵、その他金屬等）の區別、（有機物の生産

には制限あるが（無機物の產出は無制限的なるをもつて、兩者の生產に不均衡を生じ、これが景氣變動の原因となす）の如き、自然的物理的原因に屬するものと、營利心、悲觀と樂觀等の如き個人的心理的原因に歸せられるものとに區別することができる。更に外生的原因と內生的原因との双方にまたがる金融作用、商品生產、經濟組織等の社會的經濟的原因に歸せられるものがある。この社會的經濟的原因はまた右表のごとく分類される。但し、前節においても述べたように何れの學說も、これらのいづれか一つの原因のみを明かに主張するのはむしろ稀であつて、二つ以上の原因に歸せしめんとするのが常で、たゞ何れの原因に比較的重點を置くかによつて區別しうるに過ぎないことに注意すべきである。このことは、景氣學說のすべての分類に當てはまることである。

（ハ）ワーレン・パーソンズ氏の分類

（一）景氣循環の原因を經濟制度以外に置く學說

（A）農作における週期的循環が經濟循環を生ぜしめると云ふ說——ムーア、ジエボンス

（B）有機的原料と無機的原料との生產の增加が一樣でないために恐慌を起こすと云ふ說——ゾンバルト。

（C）異常の偶發的現象、例へば異常の收穫、戰爭、發明等が經濟的均衡を攪亂するのであるが、これが繼起するから景氣變動を生ずると云ふ說——ヴエブレン。

（D）實業界における氣持の變化を景氣變動の原因と見る說——ピグウ、ヘクスタア。

（二）景氣變動の原因を經濟制度に置く學說

（A）景氣循環の原因を發展的傾向に歸せしめる說——シユンペーター、カツセル、フオーゲル。

（B）生產の迂回的組織が景氣循環の根因であるとの說——シユピトホフ、ロバアトソン、アフタリオン、トーマス・ミツチエル。

（C）所得の分配が不公平なるために生ずる資本の蓄積過剩が恐慌の原因であると云ふ說——ブウニアチン、ツガンバラノウスキー、ホブソン。

（D）利潤の變動が景氣の變動を生ずるといふ說——ミツチエル、レスキユール。

（E）貨幣信用の變化が景氣變動の原因であると云ふ說——ホオトリー、ダグラス、ハイエク。

（ニ）ミツチエル氏の分類

景氣循環原因
- 物理的關係から說くもの
- 心理的關係から說くもの
- 制度的關係から說くもの
  - 制度の變化　利潤制度機構
  - 制度の機能　企業、個人間の所得關係生產消費割合の均衡關係

右表の分類による諸學説をごく簡單に紹介しよう。

第一、景氣循環を物理的變化に求めたる説

（一）ジエボンスの太陽黑點説（太陽の放射熱が三年間毎に變化するのに伴ひ、農作物の收穫に同樣の變化を生じ、從つて七年乃至十年の週期を有する景氣循環を生ずると云ふ説である。）

（二）ムーアの説（金星の接近が八年毎に繰返へされるのにつれて、氣候農作物並に經濟取引に同週期の變化が生ずると説くもの）

（三）ハンチントンの説（氣候の循環が人々の健康に影響を與へ、その健康が更に、人々の氣持に影響し、その氣持は經濟取引に影響するから、氣候の循環につれて、景氣の循環を生ずるのであるとの説）

物理的關係から景氣變動を説明する説と制度的關係から、それを説明する説との中間に屬するものに、次のごとき説あり。

ゾンバルトの説（有機的原料を使用する産業と無機的原料を使用する産業との波動的變化が

個人的消費と生産力との均衡關係
銀行機能

等しくない、兩者の均衡が破られることゝ、これを回復しようとする力が働くために、景氣循環が生ずると説く）

第二、景氣循環の原因を心理作用に求めるもの

（一）ピグーの説（樂觀的錯誤と悲觀的錯誤との交互作用により、景氣循環が生ずると説く）

（二）ヘクスターの説（出産率及び死亡率の變化が樂觀的氣分又は悲觀的氣分を導き出し、この樂觀的氣分と、悲觀的氣分との交代によつて景氣不景氣が生ずる）

第三、景氣循環の原因を制度の如何に求める説

（一）制度の變化に求めるもの

（イ）ホーゲルの説（社會の進歩は本質上一本調子には行かぬ。その足並及び方向の變化が經濟過程の動的均衡を攪亂するために景氣變動が生ずる）

（ロ）イングランド及びシユムペーターの説（革新が間渴的に波狀をなして行はれるために、景氣循環が生ずるといふ説）

（二）現在制度の機能に景氣循環の根因を求めるもの

（イ）景氣循環の原因を利潤形成の技術的過程に見出すものであつて、これに次のごとき説あり。

ベブレン及びレスキューの說（利益見込みの變化に伴ふて、企業の資本化並に企業信用に變化を生ずるのであるが、企業の資本並に信用の增減は、企業の利益見込みに新しき變化を與へることになり、景氣の循環的波動を生ずる）

デニソン・フランク及びクソネッの說（消費財、半製品、原料品と遡るに從つて需要高が次第に擴大增幅せられる。のみならず、消費財需要の變化が、生產設備の需要に働きかける影響が不正確であることが景氣循環の原因であるとの說）

トーマス・ミッチエルの說（消費財、半製品、原料品と遡るにつれて、需給の變動が、增幅せられる根因は、現代產業組織における競爭制度に基くのであつて競爭による錯覺のために需要高に變化を生じ、次に景氣の循環を來さしめるといふ說）

（ロ）　收入消費の過程と價値生產の過程との間の均衡の破壞が景氣循環の原因であるとの說

マイの說（生產物の價格の騰落よりも、勞働者の收入の增減の方が、常に遲れて生ずるのである。從つて消費者の需要高はその時の財貨の供給高に比して過不足を生じ、景氣變動を生ずるとの說）

レイーデラーの說（諸價格の騰落比率は常に不平等であるが、これが原因となつて好景氣の時には消費者の收入增加が、日用品の生產高の增加よりも遲れ、不景氣の時には消費者の收入の減少が、日用品の生產高の減少よりも先走るために、景氣循環が生ずると說く）

キャッチングス・フオスター、及びヘステングの說（諸企業が生產要素提供者に分配する額は買手を求める商品の價額と必ずしも均衡を保つておらない。この不均衡は個人の貯蓄によつて、ますく〳〵强められるのであるが、これが景氣變動の原因となる）

マーテンの說（好況期には流動資本の增加を必要とするのであるが、その增加は消費財の購入資金から振り向けねば賄ひえないのである。流動資本の增加が賄はれないときには、好景氣は破れる。而して財界の回復は不景氣が流動資本の增加を阻げるから生ずるのである）

アダムスの說（消費者の總收入が生產されたる消費財の總額より多くなるためには資本設備の擴張が必要である。それを賄ふには銀行信用の擴張が必要である。そうすれば好景氣は發生する。しかし、好景氣が發生しても、好景氣を喰ひ止める働きがそれ自身の中に含まれてゐる）

（ハ）　財貨の生產過程と消費過程との均衡の缺乏によつて、景氣循環が生ずるといふ說

ヴエヴアリッヂの說（產業家の競爭が激烈なるために時々生產過剩を來たし景氣變動を生ずる）

ハーデーの說（企業畫策の場合の不確定要素が多いために、交代的に財貨の生產過剩及び

生産不足を生じ景氣循環を生ずる）

アフタリオン、ブウニアチアンの説（好景氣の時には生産設備が急激に擴張せられ、その結果が現れゝば、生産額が著増するのであるが、その究極の結果は消費財の限界需要價格を減少せしめることになる。不景氣の時には、生産設備の擴張も、生産高の増加も妨げられるから結局において消費財の限界需要價格が上昇して、景氣の恢復を齎す）

（二）景氣循環が消費、貯蓄、及び新企業放資といふ三つの過程間の不均衡によつて生ずるとの説

ツガン・バラノウスキーの説（好景氣時代には資本の需要がその時の貯蓄高より多くなり從つて資本が缺乏して恐慌を招く。しかるに不景氣の時には新貯蓄が放資額より多く。浮遊資本が潤澤になるから、投資口を求めることになり、景氣の回復を促すことになる）

ホブソンの説（好景氣時代には大所得者の收入が増加するから貯蓄が過剰になり新企業放資は旺んに行はれ、結局生産過剰を來たす。しかるにそれに續ける不景氣の時には大所得が減じ、蓄積過剰が止まり、生産過剰が一掃せられて、財界の回復に向ふ）

シュピートホフの説（好景氣の時には生産設備の過剰生産が行はれるに拘らず、その生産設備を運轉するに必要なる財貨の生産が過少になる。故に經濟界の破綻を來たす）

フルの説（消費財の需要量及び生産設備費の些少の變化は案外大なる影響を生産設備の建設高に與へることになる。それが原因になつて消費財の需要に變化を來たし、景氣變動を生ぜしめる）

ローテーの説（企業界の好轉により大註文が發せられる時には生産能力に不釣合な購買力が賦與せられることになり、適度の價格上昇を見ることが多い。そのために生産品の賣行きは減じ、しかも購買高は減少してゐるから恐慌が生ずる）

（ホ）銀行業の機能によつて景氣變動を説明するもの

ハンセンの説（財界の前途が好望であるときには銀行は信用の給付により企業家に多量の購買力を與へる。そのために企業家の活動は累積的に増されるのであるが、遂には銀行が警戒して貸出しを手控へるようになる。そこで恐慌沈滯の狀態に陷るのであるが、この期間内において遊資が銀行の手元に増加するから、更に新しい活動を起こさしめる動因となるのである）ハイエクも同じ説。

ホートレーの説（銀行が準備金が多い時には割引歩合を引下げ、銀行資金の需要を奬勵するから、企業活動は擴張せられるのであるが、或程度に達するときには銀行は準備金を充實せしめるために割引歩合を引上げ貸出を回收する結果、企業の活動力が弱められるのであ

る、かようにして、資金需要減退のために、銀行の遊資が增加するときには更に新規に銀行が貸出を旺んにすることになり、また新しき循環過程に入ることになる。

なほ、ローバートソン、ラビングトン、カッセルクラーク及びベレルビー等の學者の說は右の分類の幾つかの說に跨がつてゐると云はれる。さらにこの分類項目中に編入された說と雖も、補充的說明として、外の項目の說明を引用してゐるものが少なくないと云はれる。

第四節　ブルジョア景氣研究に對するブアルガの批判

以上紹介した景氣變動學說は、いはゆるブルジョア景氣學說である。これに對して、オイゲン・ヴアルガは、次のごとき批評を試みてゐる。（ヴアルガ世界經濟年報）

最近數年間景氣研究に捧げられた驚くべき勞作の成果はかうである。卽ち直接觀測によつて知られた一定の經濟現象を、量的に把握することを憶えたこと及び進んでは長期變動と季節變動と景氣變動とを相互に分離し、後者の大きさについて一定の洞見をうるに至つたことこれであるが、しかし、この場合諸要素の選擇及び、これら要素のウエイトの如何並に數學的加工法の種類の如何に從つて、その評價には甚だしい相違が現れてゐる。

質本主義の本質に對する、理論的洞察に至つては、これらすべての文獻は――われ〳〵が概觀しうる限りにおいては――何らの利益をも與へないのだ。反對に、それはむしろ概念を擦り汚ることによつて混亂を生ぜしめるの役目をつとめてゐるのである。しかしながら資本家たちが實際上の目的として眼中に置いてゐる景氣の進路の豫言なるものもまた、未だもつて達成されてゐない。

なほまた、景氣研究が純粹に經驗的に、または間違つたブルジョア理論の助けを籍りて行はれてゐる限り、その成果が何らかの仕方において根本的に改善されるであらうといふ希望はすこしもない。マルクスの理論が景氣研究上の數理統計的方法と結びついてのみ、この研究所が、マルクス主義的指導の下に置かれて初めて、それは實際に有用な成果に到達するのであらう、と。

附　記――本章は、岩波版經濟學辭典中の谷口吉彥氏の景氣變動、景氣變動論、景氣豫測の論文、改造社經濟學全集年六卷中の小林新氏の景氣變動論、野村證券調査部著「經濟界の觀測法」及び「經濟界季節的變動の研究」、アダムスの「景氣循環論」（飜譯）、ワーゲマン「景氣變動論入門書」（飜譯）、ダイヤモンドの「經濟記事の基礎知識」に依つたことを附記して置く。

第三章　景氣指標と景氣研究所

第一節　資料の蒐集と整理

一、經濟資料の蒐集

如何なる立場をとるにせよ、景氣觀測の第一歩は經濟事實の蒐集と整理から始められる。觀察對象は國によつて多少事情を異にするがなるべく經濟の基本的部面の諸現象をもれなく捕へることが肝要である。何が基本的であるかはこの國の經濟發展段階によつて決すべく、歴史的に變遷するものであることは論をまたぬであらう。例へばその國が農業的輸出國から工業國に發展した場合、指標の構成に當然變化を加へねばならない。またもれなく集めるといつて、統計的處理の上から一定の制限が加へらるべく、その上に景氣豫見にはなるべく最近までの事實の推數を知ることが必要であるから、統計の發表せられる時日の遲速は重大な考慮を要する。かくて年一回の精密なる生産統計よりも代表的産業における生産月報、生産週報の方が指標作製上は重大視されるといふ場合が稀ではない。また欲する經濟資料が直接に得難いときに間接にこれを捉へる工夫なども必要である。

たとへば機械工業、加工工業などの生産狀況が直接に得られないことが多いが、若しこれら産業の就業指數でもあれば、これによつて間接に知ることが出來るのである。

一般的に言へば、景氣指標作製に必要なる經濟資料は左の如き方面から蒐集すべきである。

(1) 生産關係。主要生産における生産數量、勞働統計＝就業統計、失業統計

(2) 流通關係。取引所統計＝取引高、有價證券價格、商業統計＝註文數量、販賣數量、貨物出入庫、水陸運輸、外國貿易、手形交換高、物價統計＝卸賣物價指數、小賣物價指數

(3) 金融關係。銀行統計＝通貨發行高と準備、預金と貸出、金利統計＝長期金利、短期金利、資本統計＝計畫資本

資材の統計的處理

蒐集せられたる經濟事實は多くそのまゝでは指標とすることは出來ない。それは第一に種々雜多なる單位で表現されてゐる多數の資料を綜合したり比較したりするには、同質であること、共通なる單位であることが先づ必要であり、そうするために第一次的資料の適當なる統計的處理を施さねばならない。

例へばこゝに生産と貿易を比較しようとして、生産の方は數量で示されて居り、貿易は金額で示されてゐるとする。そのまゝでは比較出來ないのは勿論であつて、かゝる場合は金額で示されて

ゐる數列より物價變動を除いて見る。その方法は物價指數で割るといふ極めて簡單な方法である。若し戰前を基準の物價指數を用ひるならば、割られたる商は戰前の價格で示されたる貿易の實質的價値となつて、生產統計と比較することが出來るのである。資料が金額で示されてある時は、これを使用するに價格變動の有無は常に注意すべく、短期間の比較である場合以外、金額統計同志の比較でも適當の修正が必要である。修正に用ふべき物價指數は必しも一般卸賣指數にかぎらず、その對象に最も適合せるものを擇ぶべきは當然である。

二、經濟資料の整理

異種の資料を比較するときもそうだが、異種の資料を綜合する場合は指數化する以外に方法はない。指數とはある一定時點をとり、その時より現在までの變化をパーヤンテーヂで示せるものである。物價指數が廣く用ひられてゐるから說明は要すまいが、指數化すれば米、棉花、石炭、鐵、如何なる凡百の商品の價格變動でも比較することが出來、この比較騰落によつて貨幣購買力の變化を測定することを得しめるのが物價指數の働きである。綜合するために一應各項の數列を一々基準年度を一〇〇とするパーセンテーヂに改める。その上で各項の指數を加へ、合計を項數で割つて平均を出す方法を算術平均の指數といふ。計算は簡單であるが、最も素朴的な方法であり、適用には注意を要する。その缺點は各項の重要度を無視して平均されてしまふからで、それを補正するには豫め定めおきたる重要性の標準に從つてウエイトを決定し、加重算術平均するか、加重幾何平均するのである。

資料が上記の諸方法によつて指數化され綜合されたとしても、それはまだ完全なる景氣指標の素材たり得ない。蓋しかくの如き指數には未だ景氣變動によらざる變動要素を含んだ有りのまゝの經濟運動の推數形態だからである。有りのまゝの經濟運動には前述のごとく通例次ぎの四種の變化を含んでゐる。

(一)　趨勢的運動＝連續的發展傾向

(二)　不規則運動＝不連續的突發的變化、これには一時的なる場合と、永續的に發展傾向を中斷する場合とがある。

(三)　季節變動＝一定週期的循環運動

(四)　景氣變動＝循環運動なるも一定週期を有せず

卽ち景氣變動とは全變動の一構成分子なのである。そこで、全變動を含む所與の素材を分析して景氣變動要素のみを抽出しようと言ふのであるが、そこへ到達するためには先づ獨立に求められた他の變動要素の大きさを原數より控除し、あとに景氣變動だけを殘すのである。

三、趨勢値の測定

趨勢變動とは例へば年の人口增加の如くほゞ一定比率をもつて永續的に上向又は下向する運動をいふ。これを測定するには先づ相當の長期間について事實を集め、普通は一乃至數循環を含む期間について觀察するのである。方法には移動平均法と最小自乘法の二者がある。移動平均法とは原數列の各項を中心にその前後數項宛の平均値を求め、その値を連ねた線をもつて趨勢線とするもの、また最小自乘法とは原數列をそのまゝ圖表に描けば不規則な經過線となるがそれに單純な一線（直線又は任意な數學的曲線）を數學的にあてはめ、これと原經過線との間に生ずる偏差の自乘値の總和を最小ならしめんとするものである。兩方法とも計算者の手心を加へる餘地があつて客觀的に正確な方法とは言ひかねるが、要は熟練と觀察期間の當否できまるといへよう。算式は一般讀者に不要と思ふから省略した。（參考書としては早大小林新教授の經濟統計概論二冊が良書であらう）。

四、季節變動の測定

經濟運動に季節的循環のあることは毎月の兌換發行高、金利、貿易、爲替相場その他種々なるものに明白に感知することが出來よう。季節的變動値を測定するには矢張り相當年數に當たる數列を觀察する。その期間はなるべく經濟界の平靜なる年を選ぶべきである。普通に用ひられる計算方法は連環指數法と稱せらるゝもの、之は先づ各月毎に對前月比を算出する。n年間とすれば、各月につきn個の比例數が得られる譯で、次ぎにそれが中數値（平均）を求め、一月を一〇〇として各月の連環系列をつくる。すると二月の鏈比は一〇〇に二月平均値をかけたもの、三月は右に更に三月平均値をかけたものとなる。順次に進んで十二月に至り十二月の鏈比が求められるであらう。ところで前に戻つて一月は十二月の鏈比に一月平均をかけたものでなければならないが、實際の計算では合はないことが多い。それは趨勢變動が作用してゐるからであるから、此差產を各月に分布し、更に年平均が一〇〇となるように換算すれば、これが求むる季節變動の指數である。連環指數法以外には移動幾何平均法も用ひられ、更に簡單な方法は所與の月次計數を各月別に平均して見るやり方がある。最後の法は簡單なだけ誤差が大きく嚴密を要求される場合は上記の第一法がいゝ。この方法は有名なるバーソンス教授の案出にかゝるといふことを附記しておかう。

不規則變動の除去は不能。不規則變動を統計的に測定することは現在では不可能である。從つてそのまゝ景氣變動と一緒に觀察するわけであるが、それが却つて景氣變動の機構を明白にする便宜もあるのである。何となれば景氣變動の起動力は財界の構造的變動と關聯すると考へられるからである。不規則變動にしてその影響一時的なると永續的にある發展傾向を中斷し、新たなる要素を附

加するものゝ二種あり、後者について一定期間後にはその大體の値を測定することが不可能ではない。例へば十數年にわたる原數列の觀察により求められた趨勢値と、不規則變動があつたと認められる時期以後の觀察による趨勢値に大差があるならば、その誤差は不規則變動の大きさを示すといふべきである。かくて趨勢運動の除去に當つて何時までも過去に求めて數値を固執すべきではなく經濟の現實的發展と照合して時々計算を新にするといふ必要が生じるのである。その著例に米國における鐵道貨車積載指數は年々上向的趨勢を有すとされてゐたのであるが、二九年恐慌以後自働車運輸の發達により鐵道の分野は蠶食され、水平的趨勢（長期趨勢なし）にあることが認められるに至つてゐる。

五、景氣運動の測定

以上の如くして個別的に測定された諸變動要素を原數列より控除すれば循環運動即ち景氣變動が殘される。尤も前述の如く不規則運動の要素がそれに併存するのであるが、その手續きは、年指數の場合は季節變動が問題とならないから

年指數÷趨勢値－1　でよく、月別指數の場合は

月別指數÷趨勢値×100－季節變動指數

の順序で計算する。何れも趨勢線に對する相對値で景氣變動の大いさが示され、經濟活動が趨勢變動の上位にあるときはその値は正、反對に下位にある不況時には負の値を持つ。又この計算の結果に一〇〇を加へれば趨勢變動を基準一〇〇とする指數で景氣變動が示される。屢々ノルマル＝一〇〇の事業活動指數などと表現されてゐる。

第二節　景氣指標の見方

一、景氣バロメーター

（イ）統計材料の加工方法　景氣變動を指示するバロメーターは、經濟界における統計的數量を材料としてこれから景氣變動以外の變動要素を除去したるうへその諸指數を素材として作成するものなることは前述の通りである。これを統計材料の加工といふ。この加工の仕方に二通りある。

（一）除去せんとする變動數量の變動率または變動指數を、前節において述べたごとき方法によつて算出して、この率または指數を原材料から控除して、後に景氣變動を殘す方法と（二）この率または指數を算出することなくして、直ちに他の變動を除去する方法とである。例へば季節變動を消却しようとする場合に、バーソンスの連鎖比例法によつて、先づ季節變動指數を算出し、次いで之

を原材料から控除する手續をとるのは前者であり、十二ヶ月の移動平均を利用して直ちに之を除去するのが後者である。加工の原理は次の算式によつて説明されてゐる。Mは原統計材料、Sは季節變動、Tは趨勢變動、Cは景氣變動を示す。

$$M=S\times T\times C \quad \therefore \quad C=\frac{M}{S\times T}$$

（ロ）景氣指標の材料　景氣指標の作り方は前述のごとくであるが、それを作る場合の統計材料はいかなるものを選ぶかといふに、多く次の六つが用ひられる。

（一）勞働統計殊に失業統計は、過去より現在に至る景氣の記錄を指示する點において、有益な材料としてよく用ひられる。併し、正確なる失業統計をうるためには、勞働組合、及び失業保險の發達せることを必要とし、吾國においては近き將來に之を期待することはむづかしいといはれる。日本銀行において數年來調査してゐる勞働統計は、吾國において利用しうる唯一のものと云へる。

（二）生産統計ことに銑鐵生産統計は、景氣の變動を或程度に豫示するものとして、從來多く利用されたものである。元來景氣の變動は消費財の生産においてよりも生産財の生産において、より明瞭に且つより早期に現はれるものであり、銑鐵は多くの生産財の原料となるものであるから、景氣の變動は先づ銑鐵生産額の增減に現はるゝことは、理論的にも實證的にも認められてゐる。

（三）金融統計ことに金利の變動は、一般に景氣變動よりも後れて變動するものであり、此點においてまた景氣指標として利用される。銀行準備金の增減・預金貸出高の增減等もまた利用され、ことに計畫資本高の增減は多少先行的性質を有するものとして注意される材料である。

（四）商業統計の中では、註文數量、販賣數量等の變動は、直接に景氣の變動を指示するものではあるが、是等は、私經濟の秘密數量に屬し、正確なる統計をうることはむずかしい。手形交換高は概して取引價額の指標であり、從つて景氣の指標として利用される場合が多い。けれども、ニューヨーク市中の手形交換高はむしろ株式市場の變動を示すように、吾國の手形交換高には銀行間のコール取引量をも少なからず包含してゐるから注意を要する。

（五）取引所統計ことに株價指數は一般に景氣變動に先立つて變動するものであるから、景氣を豫示する指標として廣く利用される。

（六）物價指數のうちとくに卸賣物價指數もまた景氣指標として利用されることが多い。

（八）景氣豫測指數の作り方　景氣指標は右のごとき材料を加工して作成するのであるが、かくして作られた指標はたゞ景氣の過去の實狀を示すに過ぎず、これを基礎として將來の景氣豫測を行

ばんとする場合にはまた別の方法を用ひなければならない。是に二方法があり、單線法と複線法とである。前者は素材より一個の綜合指數に造り上げる。といつても單純算術平均をやる譯にはいかないから、豫め各指數の重要度を決定しこれによるウエイトを定め加重平均によるのである。然しこれにおける問題の一は經濟の異なれる部面の數列を如何にして重要度を決定し得るかである。數種の產業から綜合生產指數を作成する如きは困難が少く、生產額における相對値、使用勞働者數の比例の如き多少客觀的標準がある。それが貿易と生產と手形交換と銀行貸出と失業者數などとなれば相互の重要度をきめようがない。無理に綜合すれば結局設計者の主觀的標準に從ふことになり、現にそういふのが多いのである。第二の問題として構成各要素の間に時間的繼起關係の存在する場合があるのに、それを無視して綜合するならば、先行性の指數の動きが後行性指數の動きと相殺され、結局無變動、又は變動があつても無意味な動きとなりはしないかの非難である。事實、單一景氣指數の作製には無理が多いので、現在では複線法が支配的である。たとひ單線法による場合でも類別指標が顧みられるから複線法に如かずといふことにならう。複線法の創始者はハーヴァド研究所であり、有名なる三線法は永く斯學の模範とされ來つたところである。ハーヴァドの三線法とは、同研究所において米國經濟活動を示す基本指數數十を作成しその各々につき交聯係數を測定したるところ、大體三つの群に分れた。しかも期せずして互に類似の性質の數列であつたから之を單純平均して三個の綜合指數線を得、A線＝投機　B線＝商況　C線＝金融　と命名したのである。更にこの綜合曲線の觀察によつて

（一）ABC三線はほゞ平行して變化すること（二）三線變化の間には各數ケ月の時差（タイムラッグ）あり、その長さはAB間六乃至十ケ月、BC間二乃至八ケ月であること。

（三）曲線の昇降順序は常にA、B、Cの順序であること。

を發見した。そこで先行のA線、又は最後のC線の動きを注視してゐればB線の動く方向を豫見し得るといふのが、ハーヴァド式觀測法の骨子である。指數の構成や範式については後に述ぶるとして、從來の單線法を排し、三線を採用したること、殊に各系列間の時間的繼起に重點をおいたのは全くミッチエル、パーソンスの創見であり、斯學の面目を革新せる觀があつた。然し現在においてはハーヴァドの三線法は餘りに定式化されすぎて居り、重要なる部面の變化を逸してゐるとの非難が起りつゝある。例へばワーゲマンのベルリン研究所の景氣指標の如き、基本的なるはハーヴァードの三線であるが、その他に多くの補助的指標をつくつて、經濟變動を宛も醫者が患者を診斷する如くであれといふ標語の下にやつてゐる。

二、バブソン・チヤート

作られたる景氣指標は、それだけでは尙ほ經濟界の推移のあとを示すだけである。これより現在の地位を判定し更に將來を豫見せんとすれば、別に判定原理がなければならない。しかして判定原理を一つの景氣理論に求めるものと、特定景氣理論を想定せず專ら觀察からの歸納的法則に依據するものとの二派に分れる。前者の代表はバブソンである。彼は「動は反動に等し」との力學的法則をその儘經濟界の變動に適用し、先行する好景氣（又は不況）强烈なればその反動もまた大なりとする。そこで方式化すれば次の方程式が成立する。

動の時間×强度＝反動の時間×强度

彼はこの斷定に立つて方程式の兩側が均衡するように、しかして實際の經濟活動量がその大きさの上にありや下にありやによつて來るべき經濟界の變化を豫想し得べしとする。その爲めに彼は一般經濟活動を示すところの一本の綜合指數と、先見線として手形交換高（ニューヨークを除く全國交換高）指數を組合せ、かの有名なるバブソン・チャートはつくられてゐる。バブソンの景氣豫報は事實的中したことが珍しくなく、ために今日の聲價を得たのであるが、「動は反動に等し」とする原理が經濟運動を支配してゐるとなす彼の理論には反對者が極めて多い。また綜合指數の構成などもいろ〳〵變化して居り、學問的價値は低いとされなければならない。

三、ジンガーのバロメーター

バブソンの如き機械的理論でなく、專門の景氣學者がその景氣理論に立ち豫測を試みたことがあつた。これはスピートホフの理論に基きジンガー（嘗つて東京帝大に招かれた人）がウイルトシャフトデインスト誌のため設計した景氣バロメーターである。スピートホフの理論を要約すれば「景氣の上昇は資本の形成が從來より旺盛となるによつて起る。資本は生產財によつて評價することが出來る。景氣の上昇が沈滯に轉化するのは確信の破綻に基くのであつて、その表現もまた生產財に求めることが出來る」といふにあり、よつてジンガーは資本形成を示すものとして株式發行高を、投下資本消費として鐵消費高の二曲線より成るバロメーターを作成した。然しこの指標は現實の動きと適合せざる場合が多く、一年餘にして發表が中止されたといふことである。

四、ハーヴアド景氣範式

景氣理論において萬人を首肯せしむる名論のない今日、理論にとらはれて判斷するよりは、經驗を集積し經驗法則が妥當する範圍内での豫見に滿足するといふのが最も無難な方法ではあるまいか。前に一言したるハーヴアドの三線式は固定化せる景氣理論を豫定せず、專ら過去の觀察結果た

る各系數列の時間的機起に賴り豫見をなさんとするもので、この派の代表的なるものである。ハーヴアードはABC三線の動きを左の景氣範式にあてはめて判斷を下してゐる。

ハーヴアードの景氣範式

一、沈滯期

A　證券價格低落、投機取引僅少

B　物價低落、商業活動不振

C　金利低下、銀行準備增加

二、回復期

A　投機活動上昇

B　商業活動回復、物價騰起

C　金利上騰、銀行準備減少

三、好況期

A　投機活動抑止

B　商業活動續增、物價更に騰貴

C　金利續騰、銀行準備續減

四、金融緊張期

A　證券價格激落、投機取引激減

B　商業活動及物價の騰勢止まる

C　金利騰貴、金融逼迫

五、產業恐慌

A　證券相場底値、投機市場恐慌

B　商品の投賣り、物價下落、取引減少

C　金利最高、支拂停止

尙ほ三線を構成する各要素を前に說明することなかつたから、これを揭記するならば、ハーヴアードの指數も數次の訂正を經て、現在では頗る簡單なものとなつた。

A線＝投機線　ニューヨーク株取株價指數

B線＝商況線　ニューヨーク市を除く二四一市の銀行借方勘定

C線＝金融線　四—六ヶ月一流手形金利及び三—四ヶ月擔保貸金利

五、ワーゲマンの立場

ハーヴアドの觀測法は斯界に一轉期を劃したものではあつたが、近年はとかく現實の運動と脊馳することがおほい。要するに僅少なる指標列間の時間的繼起關係のみから複雜なる現實の運動を判定せんとするところに無理があるのであらう。この非難に鑑みてワーゲマンはより複雜なる範式を案出し、その成果は諸國の注目をひいてゐる。彼が强調したる點は二つある。一は經濟變動に景氣要素と構造的要素の區別があり、景氣變動が構造要素の變化によりて影響されることの多い點である。二は景氣變動といふも夫々の經濟領域によりて相違してゐるから、ハーヴアドのごとく一組のバロメーターにより景氣の全面的豫測をなすことは斷念し、多數組のバロメーターにより各領域毎の個別的豫測をなすべしと言へることである。彼に從へば今日景氣研究學の任務は各領域における觀察より樣々な景氣の徵候型を發見することだとある。そして景氣診斷は一定の經濟構造の下ではどの徵候型が妥當するかを確め、その妥當する範圍で近似的豫報が可能であらうといふ。また彼は徵候型を把握するために景氣變動を二點より觀察する。第一は經濟變動の方向と高さによつて定まる景氣狀態であり、これに低景氣、上昇、高景氣、下降の四段階がある。第二は諸經濟要素の相互地位によつて定まる經濟緊張であり、消極的緊張、その解消、積極的緊張、その解消の四型態となる。但し分期より見れば第一と第二と殆んど一致する。而し景氣運動の形式的推移の定型は第一では平行運動か繼起運動が多く、第二のものでは放射狀運動か鋏形運動が多いとかくて彼はいくつかの徵候型の發見につさざる努力をなしつゝあるのであるが、その一々を紹介することは固より不可能であり、最も標準的な型についての特徵付けを次に示さう。

A　不景氣

イ、貨幣の側——(一)商品價格は變動少くやゝ低落の傾向あり、株式相場は騰貴す。特に債券において然り、金融は極めて緩慢(二)企業所得、勞働所得およびその支出は共に低落す。

ロ、財の側——(一)生產は最小限となる。消費財の生產においてよりも生產財の生產において特に著し(二)外國貿易、輸入は固定す、但し輸出は急激に增加す。

B　回復期

イ、貨幣の側——(一)諸市場物價は騰貴し株式相場はこの期間の終期において上向運動に入る。金融はなほ緩慢なれどこの期間の終りにおいて利子步合は騰貴す(二)所得、企業の所得は急增し初める。勞働所得は緩慢にこれに從ふ。伸縮的支出は增加し初める。

ロ、財の側——(一)生產は全領域にわたつて增加す(二)外國貿易輸入は增加し輸出は到達した る最高限を保ちつゝ動搖す。

C　好景氣

イ、諸市場、金融市場は急に引締る。資本調達は困難となり、株式相場は下落す。物價は固定的

となり部分的には生産財と消費財との價格に著しい相違がある。

ロ、外國貿易、輸入の增加は停止す。輸出は前項と同じく到達最高限を上下する。

D　恐　慌

イ、貨幣の側――(一)諸市場、物價は下落し株式市場は低調を續ける。資金調達の困難より生ずる破産は續出し金融は漸次緩慢となる　(二)所得、企業所得は急激に減少し勞働所得並にその伸縮性支出は共に減少す。

ロ、財の側――(一)生産財生産の急激なる減少に續いて消費財生産の減少が來る　(二)外國貿易輸入は急に減少す。

然らば彼はこれが爲め如何なる指標を利用するかといふに、大きく分つて八個のバロメーターがある。

(イ)　生産のバロメーター　(一)　注文受入高の指數――鐵、機械、建築、纖維および紙工業の中より九個の工業を選定し、その各指數を合成して成る。基礎數字は各その生産費をとり、販賣價格を以て現はれる統計はこれを生産費に換算す。季節的變動はこれを除去す。一九二四―一九二七の平均を百とす。(二)　原料および粗製品輸入高―「ドイツ貿易月報」による。(三)　生産指數―、石炭、褐炭、銑鐵、石材、板金、加里、石灰およびセメントの基本原料ならびに綿糸、リネン、麻、紙原料、パルプおよび紙の粗製原料等合計十四個の指數を合成して成る。月別生産高は先づ就業日數に換算せられ、これに對して各産業の評量を附して計算し、各指數の算術平均を以てこれを合成す。(四)　就業指數――勞働組合の失業及び不完全就業者の統計、一九二五年七月十五日の職業調査を基本統計とす、全就業者より、失業者および不完全就業者を失業者に換算したる數を除いて、殘りを就業者としその指數を作る。(五)　精製品の輸出高―「ドイツ外國貿易月報」による。

(ロ)　生産財および消費財産業における就業指數　前項における各産業の就業率を生産財と消費財産業の二つに分類してゐる。(一)　生産財生産に屬する産業――鑛山、鐵鋼業、化學工業、紙工業、皮革工業、木材工業、機械船舶工業および電氣工業　(二)　消費財生産に屬する産業――纖維工業、木材加工業、皮革加工業、製陶業。

(ハ)　在荷增減のバロメーター　(一)　增加の要素としては、生産指數、原料および精製品の輸入高、勞働組合の完全就業者數、十大銀行の債務。(二)　減少の要素としては、小賣商業の賣上高、消費組合の賣上高、原料および精製品の輸出高、月末貨幣流通高。

【各個の數列の算術平均より成る合成指數に更に三ケ月の移動平均をとり偶然事情の影響を除去す】

(ニ)　内地市場のバロメーターとしての外國貿易　(一)　原料および粗製品については輸入より輸出を控除し、原料に對する需要數量を見出す　(二)　精製品については輸出より輸入を減じドイツ

より流出する商品の分量を見出す。

（ホ）商勢のバロメーター　これは次の三個の指數から成る。（一）長期信用の曲線――ドイツ經濟が內外の資金によつて調達する長期信用の總額（二）注文受入高指數（三）就業指數。

（ヘ）信用のバロメーター　次の六個の指數から成る。（一）手形交換高（二）ライヒスバンクおよび四發券銀行の資產（三）十大銀行の債務（四）十大銀行の預金高（五）債券發行高（六）株券發行高。

（ト）三市場のバロメーター　三市場とは（一）株式市場（二）商品市場（三）金融市場を指すものであるが、この三市場の價格變動を通じて景氣を觀測するバロメーターの構成には二種の區別がある。

第一は各市場にそれ〴〵一個の代表的曲線を選ぶもので、所謂單純三曲線バロメーターである。この場合の代表的指數としては（一）株式市場には株式相場（二）商品市場には景氣に敏感なる商品價格の指數（三）金融市場には短期資金の利子歩合を用ひる。

第二は各市場を多數の指數を以て現はすものでこの場合には（一）證券市場には（イ）ベルリン取引所場上の二二九株式の平均相場（ロ）5% Goldpfandbrief の相場を用ひ（二）商品市場には（イ）景氣に敏感なる十種の商品（ロ）卸賣物價指數（ハ）卸賣物價指數中の原料および粗製品の指數（ニ）卸賣物價指數中精製品の指數を用ひ（三）金融市場には（イ）ベルリン取引所における割引歩合によつて計算したる荷爲替割引歩合（ロ）金利平均を用ひる。

（チ）商品價格のバロメーター　價格變動のバロメーターは次の四個の價格指數より成る。

（一）景氣に敏感なる十種の商品の個別指數の幾何平均。

（二）卸賣物價指數中原料および粗製品の指數。

（三）卸賣物價指數中の消費財一〇五商品の指數

（四）衣服小賣相場。

バブソン、ハーヴアドを經、ベルリン研究所の方式となり。觀測の方法はいよ〴〵精致を極めるに至つたが、尙ほ之でも我々は將來の經濟界を完全に豫見し得るとはいへないのである。それどころか、いづれの研究所も屢々重大なるミステークを演じ、斯學の價値がとかく疑はれ勝ちなのである。ワーゲマンも嘗つて、目下の處豫測の範圍は三ヶ月を出でないと心細い告白をしてゐる。それは畢竟するに、現代の經濟が歷史的に重大なる變革期に入り込んでゐること、從つて國內的にも國際的にも多面的に政治的摩擦が多い。卽ち經濟に對する政治の優位が强く現はれてゐるからではないであらうか。ワーゲマンに從つて將來、我々は資本主義の變革期にふさわしい景氣變動の徵候型のいくつかを知り得るかも知れない。然しその頃世界經濟とその中に生活する人類は、また未知の

變革の大浪にまき込まれてゐないと誰か保證しよう。結局、歴史は一回的なるものであつて、統計的方法により把え難いのではあるまいか。そこへ來ると景氣觀測に對する根底的懐疑論となつてしまふ。だが、現在程度の景氣學的知識と雖も決して實益なしとはしまい。たゞ統計的方法の限界を知り、且つ現代資本主義が戰前資本主義と多くの諸點において根本的に相違するものがあるといふ認識を忘れなければ好いのである。

第三節　世界の景氣研究所

一、營利的研究所

今日世界各地に存在する景氣研究所の數は百にも達するであらうが、最も古く且つ著名なるのは米のバブソン統計協會であらう。景氣研究といへば誰しもバブソン・チャートを想起するほどにその名は親まれてゐる。バブソン以前に景氣變動を統計的に研究した學者がなかつたのではない。既に十九世紀末にノイマン等の詳細なる研究があり、米國については著名なムーアの研究（八年週期説）があつた。然しそれらは恐慌理論を實證的に説明しようといふ學者の書齋裡の研究であつた。之に反しバブソンは自已の研究結果を、「景氣豫測」に利用し、「豫測」を賣るところの全然新しい企業を成立せしめたのである。これが實にバブソンをして近代景氣研究學の始祖たらしめた所以なのであり、近年の如く公共的景氣研究機關が輩出するに至る迄、景氣研究といへば概ねバブソンの流れを汲む營利機關によつて行はれて來た。バブソンに次いで古いものにブルックマイヤアがあり、その他米國にはスタンダード統計會社、ムーディ・インヴエスターズ・サーヴイス社とか專業會社多數を數へた。これらの營利的專業景氣研究所と次に述べる公共的研究所の中間に位するものとして經濟新聞、經濟雜誌社に附屬されたる研究所、大銀行が顧客へのサーヴイスとして行ふところの附屬研究施設などがあげられるであらう。前者に屬するもので著名なもの米國ではアナリスト誌、（ニューヨーク・タイムス出版會社）ブラッドスツリート誌、英國ではエコノミスト誌、スチチスト誌、獨逸にヴイルトシヤフト・デインスト誌等がある。後者では我國にあつて普通に入手し得るものをあげれば米國系銀行ではナショナル・シチー銀行、ガランチー・トラストあたりから出るもの、英國系ではバークレー銀行、ミッドランド銀行等である。それらの月執乃至週報より察するにいづれも相當完備せる組織をもつて專門に研究に從事してゐるものであることがわかる。

二、ハーヴアド研究所

一九一七年米國マサチユーセッツのケムブリッヂ大學内に設けられたハーヴアド研究所が公共的

研究所としては最初のものであらう。ハーヴアド研究所の發明である三線法がその後の景氣學に深大な影響を與へたといふ以外にも、當研究所の出現は多くの特記すべき諸點をもつてゐる。第一の功績は經濟學界と景氣豫測學とを握手させて斯學に絶大の進歩をもたらし、且つ斯學の學界的地位を大いに高めたることであらう。景氣理論を研究することは經濟學の領域であるが、これを實地に應用し景氣豫見をなすことには當時の經濟學界は甚しく懐疑的であつた。端的に言へばバブソンやブルックマイアのやる事業を投機指導として輕蔑したのである。然るところコロンビアの教授W・ミッチエルが景氣變動論（一九一三年）を著し、經濟學の一分野として景氣の統計的研究及び豫測可能性を認め、彼及び彼の協力者バーソンスによつてこのハーヴアド研究所は創始されたのである。バブソンを斯學の父とよぶならば、ミッチエル、バーソンスは正に景氣研究の母ともいふべき功勞者であらう。ミッチエルは後に自ら主宰して全國經濟調査局を造り、今に至る迄同國景氣研究の最高峰である。

ハーヴアド研究所に刺戟され一九二三年英國では劒橋ロンドン、兩大學を主體とし、ロンドン・ケンブリッヂ・エコノミック・サーヴイスと稱する機關が生れた。また同年パリ大學の統計協會が活動を始め米英佛三國共に連絡して研究を進めるに至つたのは大なる躍進である。

三、ベルリン研究所

一九二五年ワーゲマン主宰の下のベルリンに國立景氣研究所の設立を見たることは更に斯學の第二段の躍進であつた。ワーゲマンはドイツ政府統計局長官として令名高き人、景氣理論に關する數種の名著があり、獨自の觀測法を創始した。その説明は後段にゆづるとするも、こゝに注目すべきはワーゲマンの研究所において景氣豫測と實際政治との融合が爲されたる點である。國立といふ形式をとれる景氣研究所はこのベルリンとモスコー以外にはない。ベルリン研究所が設立された一九二六年といへば、ドイツ財界合理化運動の最も盛んに行はれた頃である。國立景氣研究所はいはゞ合理化運動の總本部として設立せられ、政府の經濟政策に干與すること密なるものがあつた。またその故にナチス獨裁が完成せられた日、彼は即時職を奪はれる運命を甘受せざるを得なかつたのである。（今また復歸したと傳へられるが）

四、モスコー研究所

ベルリンの景氣研究所が經濟政策を指導した以上に、行政機構の一齒車として活潑に活動してゐ

るものにモスコー國立景氣研究所がある。創立はベルリンに先立つ六年、一九二〇年でゴスプラン委員會の附屬機關である。周知の如くゴスプランは資本主義國の豫算に比すべく更にこれより一層廣般な經濟全領域に出たる計劃經濟の指針である。モスコー研究所は、このゴスプラン作製の基礎たるべき資料を蒐集し、計劃の樹立に參與するのであるから資本主義國の研究所とは自ら趣きを異にする。觀測方法は大體ハーヴアドの複線式によつてゐるが、何といつても社會主義經濟だから投機活動や價格運動は大なる意義を持たぬ。バーソンスの方法では指標から長期趨勢（セキユラートレンド）を除去し純粋の景氣變動値を求めるのが眼目であつたが、モスコーではトレンドを除去しない指數を用ひる。何故ならこの國では經濟の發展テムポが中心問題だからである。嚴密に言へば現在のソ聯經濟には景氣變動はない。從つて景氣豫測もない譯なのである。然し完全なる計劃經濟から見れば過渡期であり、經濟法則が死滅してしまつたと言ふことは出來ず、特殊な景氣的混亂は不可避である。研究所はこの擾亂の有無を注視し、政治的方法によつて克復すべきことを政府に進言しなければならぬ。一言以つて掩へば經濟社會狀態の觀測と豫見と命令を兼ねたるのがモスコー研究所の使命といふことが出來よう。

五、日本の景氣研究機關

最後にわが國における研究所について一言しよう。この國に景氣研究學の移植されたのは大正末期であり、十數年の歷史しかないので自然諸國に比し見劣りするのは免れない。完備せる研究所としてあげ得るものは財團法人三菱經濟研究所を第一とする。それは三菱合資の調査機關の一部であつたが先年獨立したのである。その他ではエコノミスト、ダイヤモンド、東洋經濟新報等の經濟專門雜誌における研究があげられるであらう。この國の景氣研究に共通せる惱みは、資料の不完備といふことと、日本經濟が短期間に急激なる發達を遂げてゐるために理論的にノルマルな時期と決定したり、趨勢的變化を測定する上に技術的困難を伴ふことである。統計技術的基礎が確立しない惱みである。それに加へて最近は政治的モメントにより經濟獨自の發展が歪曲され勝ちである。

第二部　世界景氣篇

第一章　世界景氣變動史

第一節　序說

一、景氣變動史の取扱ひ方

世界の景氣變動の歴史をくはしく述べれば際限がない。數卷の本をもつてしても、なほ足りないだらう。だが、歴史を識るといふことは、故きを溫ねて新しきを知るといふ言葉のある通り「現在」がなぜ發生したかを正しく理解して、「將來」の見透しの助けにするといふ意味から、はじめて有用となるのである。よつて、こゝでは遠い過去の景氣變動については、骨董的趣味を排してくだ〳〵しく述べない。最近の景氣變動とのちがひに注意を喚起する程度に止める。とくに歐洲大戰前とその後との景氣變動との間には、景氣變動の根抵をなす資本主義經濟機構そのもの及び世界經濟の構成（大戰後は資本主義國と社會主義國とを含むに至る）に大きな變化が生じてゐるのであるから、

大戰前の景氣變動の歴史及びその原理を詳しく述べても、現景氣の段階を理解し、將來の見透しを行ふうへには大して役に立たないと思ふ。要は、大戰前の景氣變動と大戰後の景氣變動との間の本質的なちがひが判ればよいのである。

そこでかういふ順序で筆を進めて行き度い。

一、景氣變動略史

一、大戰後の景氣變動を次の四期に分つ。

（一）大　戰　後――一九二二年……恐慌期

（二）一九二三年――一九二七年……相對的安定期

（三）一九二八年――一九三二年……恐慌期

（四）一九三三年――一九三五年……不況期

二、資本主義前期の景氣變動

近代的意味における景氣變動――卽ち週期的に恐慌を伴ふところの景氣變動は、十九世紀の二十年代に入つて、産業革命が一應の完成を遂げ、資本主義組織が確立してから以後に起こつた經濟現象であるといはれる。普通に景氣變動とは、この資本主義時代に入つてからの、好況と恐慌とを循環的に、週期的に繰返へすところの經濟變動を指すものであることは、第一部において既に述べた。したがつて、社會主義國や、資本主義發生前の中世紀の封建的經濟組織の下にあつては景氣變動なるものは存在しないし、しなかつたのである。

つまり今日の景氣變動は産業革命以後の産物であり、近世資本主義の成立と共に發展したのである。

その以前における經濟變動は恐慌の不規則な發生によつて特長づけられた。不規則といふ意味は單に一つの恐慌から他の恐慌までの時間的長さが不規則であるといふだけではなく、恐慌から恐慌までに經過する經濟變動の内容も不規則であつたことを意味する。資本主義下の景氣變動においては恐慌と恐慌との間の景氣變動の經過は、恢復→繁榮（好況）→恐　慌→沈滯（不況）といふコースを辿るが、資本主義前期の經濟變動は、かうしたコースを規則的に辿らずに、恢復から一足とびに恐慌になつたり、沈滯から再び恐慌が勃發したりしたのである。されば中世紀における經濟變動史は突發的な恐慌の歴史であるといへる。そしてまた、近世的景氣變動史は、規則的、週期的な恐慌の歴史であるといへるであらう。恐慌を中心として、中世以後の經濟變動の時期を示せば次の如くである。（次の表は景氣變動學說を述べるに當つても用ひたが、說明の便宜上、再び載せた）

イギリスを中心とする恐慌年代

中世紀恐慌	1640
	1667
	1672
	1695
	1708
	1720
	1745
	1762
	1772
	1778
	1783
近世的恐慌	1825
	1836
	1839
	1845
	1857
	1866
	1873
	1882
	1900
	1907
	1914
	1920
過渡的恐慌	1793
	1796
	1810
	1815
	1819

三、近代的の景氣循環

近世資本主義が、イギリスを中心として發展した當然の結果として、近世的恐慌もまたイギリスを中心として、典型的に發展した。イギリスにおいては、已に、一八一一、一八一五、一八一八年に恐慌が襲來したが、典型的な資本主義恐慌は、エンゲルスの述べるところによれば、一八二五年にはじめて起こつたのであると云ふ。一八二五年から終半世紀の間はざつと十年の間隔を置いて比較的規則的に恐慌が發生した。この頃から恐慌の週期性が、したがつて近代的意味の景氣變動が、注目されるに至つたのである。一九〇〇年以後は約七年の週期をもつて循環した。恐慌の週期性そのものは、景氣研究上、その原因、動機、經過に比して重要ではないとしても、一八二五年以降の恐慌が比較的規則的な週期をもつて起こつたことに氣がついたことは、景氣變動が資本主義經濟組織の下における獨特の經濟變動であることを認識せしめるうへには大いに役立つたであらう。

近代的恐慌は一八二五年に續いて、一八三六年と一八三九年とに起こつたが、次いで發生した

一八四七年の恐慌は、アメリカに始まりプロシヤ、イギリスに及び、始めての世界的恐慌を記錄した、一八六四——六六年の恐慌は、イギリスにおける貨幣信用恐慌であり、一八七三年にオーストリアに發した恐慌は、イタリー、ロシア、北アメリカ、ドイツに及んだ。一八七九——一八八二年の可成の繁榮期は、フランスの取引所恐慌をもつて終つた。一八八九——九〇年代はイギリスの著しい不況時代であり。一八九〇——一八九三年及び一九〇七年はアメリカの恐慌時代であつた。それから、世界大戰時代に入り、戰後のいはゆる一般的危機の時代に於ては不規則頻繁に恐慌狀態が起こつた。次いで、いはゆる相對的安定期（一九二三——一九二七年）を經て、その動搖期に入り、一九二九年の後半アメリカに起こつた取引所恐慌は遂に全世界を恐慌の渦中に卷き込むだ。この恐慌は一九三二年まで深化の一路を辿つたが一九三三年ごろから不安定ながら不景氣局面へ移行した。しかしその後不景氣局面から活況への進展を見ずに、停滯狀態のまゝ現在に至る。而してこゝに注目すべきは、產業革命以後歐洲大戰前までは、景氣運動は、比較的規則的周期的であるのを特徵としたのであるが、大戰後、所謂、資本主義の一般的危機の時代に入るに及んで、景氣變動は、再び非常に不規則、非周期的となり、ために從來の周期的景氣循環理論が破產に瀕し、景氣豫測も的を外れ、かくて新しい景氣研究方法が生れたことである。パブソンの機械的物理的景氣觀測方法がすたれ、ハーヴアドの時順法（複線法）やベルリン景氣研究所の有機

的觀測法が生れたのは、かゝる情勢の所産である。だが、景氣理論にはまだ定說がない。

第二節　資本主義の一般的危機

一、資本主義と社會主義の對立

大戰後の景氣變動の歷史を正しく理解するためには、大戰後の景氣變動が、大戰を契機として醸成された、世界資本主義の一般的危機――アルゲマイネ・クリーゼの下に、生起してゐるのだといふことを常に頭に入れて置かなくてはならない。戰前と戰後の景氣變動を本質的に異らしめてゐるものは、この資本主義の一般的危機である。されば、大戰後の景氣變動史を述べるに當つて、この一般的危機について、一應の說明を試みて置くことは是非とも必要である。

大戰後の資本主義の一般的危機とは、最も抽象的に說明すれば、大戰前における資本主義の危機は、危機に陷る前の資本主義體制の均衡を回復し、たとへ强烈な痙攣をやりながら、もともかく矛盾の解決を資本主義體制の枠の內部でやつたが、大戰後の一般的危機は世界最大の國の一つ（ソヴエート）に、資本主義體制の變革を生じ、資本主義體制は世界を支配する體制でなくなり、世界は資本主義體制と社會主義體制とに分裂して、危機は資本主義體制の枠內だけでは解決されず、したがつて、慢性的、恒常的となり、從前の資本主義體制の均衡を回復しえないといふ點に、その特質をもつてゐる。こゝで資本主義といふのは資本主義一般卽ち資本主義世界を指すのであつて、個々の資本主義國を意味するのではない。個々の資本主義國に就いて見れば、最近における英國のごとく或程度まで均衡を回復しうる國もあるであらうが、世界の資本主義國全體を通じての均衡回復は一般的危機の下においては不可能であるといふのである。

二、資本主義の一般的危機の內容

戰後における資本主義の一般的危機を特色づける要素は、しかし前陳の社會主義體制の誕生だけではない。これに次ぐ他の要素を列記せば左の通りである。

イ、植民地革命――これは帝國主義支配の基礎を危からしめる度合ひを强めてゐる。

ロ、世界の資本主義部分の體制內に次のごとき變化が現れたこと。

(a)　合衆國の飛躍的發展

(b)　イギリスの顚落

(c)　いくつかの農業國における工業の急速な義展――戰爭中には、ヨーロッパの工業國は農業商品に工業商品を供給してやる力がなかつた。だから大多數の農業國には少くも輕工業が急速

に發展した。戰爭が終つて以後は、新工業は保護關稅によつて舊大工業國の猛烈な競爭から守られてゐた。これによつて、資本主義世界は、以前よりも遙かに著しく、互に排他的な二三の國土群に割れて了つた。なほそのうへに軍備力養成の目的で二三の工業が人爲的に發展させられた。このことは生產力の發展の障害を意味してゐる。なぜならば世界經濟的分業の利益が減るからである。かうして、國內市場の消化力は、著しく減退した。

ハ、ドイツの賠償負擔とヨーロッパ聯合國側の對米戰債及び戰爭によつて經濟秩序を攪亂された國と儲けた國（米、日の如し）とができたこと――このことは、世界資本主義構成諸國の發展を著しく不均衡ならしめた。この發展の不均衡は戰後の資本主義國の景氣變動を跛行的ならしめ、景氣の世界的恢復を妨げる重要な要因となつた。

ニ、資本主義の獨占的性質（企業の集中化即カルテル・トラスト・コンツエルの形式）を最高の段階にまで押し進めたこと――このことは、生產力に對して消費力が平行的に增加しなくなつたゝめに、企業が、その生產及び販賣を消費力に過應せしめようとして採つた方法であり、戰後、インフレーションやデフレーションによつて大衆の生活が、從つてその消費力が慢性的に弱まつたことを物語るものである。

ホ、技術の進步、合理化は、大多數の資本主義諸國の生產設備を飛躍的に擴張せしめた。但しこの現象は、相對的安定以後現れた。

へ、農業においても、工業においても、利用され盡されない生產手段と利用し盡されない勞働力の存在。即ち生產設備の恒常的過剩從つてその休止と好況になつても吸收されない恒常的失業群の存在。ヴアルガは、この現象をもつて、資本主義の一般的危機の最も重要な經濟的特色であると見てゐる。そして、かゝる現象の發生する原因を次のごとく說明してゐる。

「一般的危機の時期に最も鋭く現はれてくる矛盾は、資本が競爭に强制されて――獨占的腐朽にも拘らず――生產の無限の擴張をやらうとする努力と、資本主義生產樣式の內部運動法則によつて相對的に常に狹く限られてゐる資本主義社會の消費力との間の矛盾である。この矛盾は、資本主義以前の時期には、たゞ周期的に再來する經濟恐慌においてだけはつきりと爆發したものだが、資本主義の一般的危機の時期には慢性的に鋭くなる傾向を示してゐる。資本主義的販賣市場の消化力は、高景氣局面においてさへ、生產裝置の全幅的利用を可能ならしめるに足りない。生產裝置の大部分は恒常的に休止してゐる。」

三、一般的危機と戰後の景氣

以上のごとき要素を包含してゐる大戰後の世界の資本主義の狀態を指して、資本主義の一般的危

機と呼ぶのである。（一般的と云ふ言葉は世界的といふ意味に解した方がわかり易いと思ふ）但し右のごとき、一般的危機を構成してゐる諸要因は大戰後直ちに全部現れたものではない。その中には大戰前から已に存在してゐて、大戰後急速に發展したもの（獨占の高度化のごとし）や相對的安定期に入つてから現れたもの（技術的進歩や合理化）もある。しかし、これらの、諸要素は相對的安定期（一九二二—一九二七年）においてことごとく出揃ひ、かくて、一九二八年ごろから始まり一九二九の後半に入つて爆發したる今次の恐慌をして、その規模において、その深刻さにおいてその長さにおいて、その回復力の弱さにおいて、有史以來例を見ないほどに烈しい、大恐慌たらしめる素地をつくつたのである。

この資本主義の一般的危機を念頭に置いて次の戰後の景氣變動の各時期の解說を讀まれたら、理解を助けることゝ信ずる。

第三節　大戰直後の恐慌

一、有史以來の恐慌

大戰直後から一九二二年に至るまでの資本主義世界の景氣變動は、未曾有のインフレーション恐慌をもつてその特色とする。この當時のドイツ、フランス等の破局的インフレーションについては、多くの文獻があり、我國の金本位停止後のインフレに關聯して、これらの文獻は、新聞に雜誌に單行本に、幾度となく、已に紹介されて居り、讀者諸君はよく承知しておられることゝ思ふから、その特徵的な點を記すに止める。

この期間は、人類の歷史あつて以來の大破壞の行はれた直後のことゝて、その當然の結果として生產消費とも萎縮し、外國貿易は振はず、爲替相場は底なしに低落し、遂に一九二〇—二一年に至つて、資本主義經濟組織は根抵から震撼され、破局的な危機に直面した。しかし、その過程を通じて、インフレーションによつて經濟的基礎を回復し、資本家の勞働者に對する一步後退的妥協政策によつて政治的危機を脫したのであつた。この期間の破局的な經濟的混亂をドイツ景氣研究所の世界工業生產指數（一九一三年＝百）に徵すると一九二〇年の九七點から一九二一年は八二點に下りその後は反騰して一九二二年一〇〇點一九二三年一〇八點に上つてゐる。

またこの期間における主要國の物價變動をみるに、一九一三年を百として次のやうな足どりを示してゐる。

未曾有の大規模の戰爭によつて、生產手段が大破壞を蒙つたことは云ふまでもあるまい。かくて世界の生產指數は一九一三年の一〇〇から一九二一年には八二と一割八分の減退を示した。これは

各國卸賣物價指數

	一九一八年	一九一九年	一九二〇年	一九二一年	一九二二年	一九二三年
イギリス	二二七	二四二	二九五	一八二	一五九	一五九
フランス	三四〇	三五七	五一〇	三四五	三二七	四一一
イタリー	四〇九	三六四	六二四	五七七	五六二	五八二
ドイツ	二一七	四一五	一、四八六	一、九一一	三四・八三	七六五・〇〇〇
合衆國	一九四	二〇六	二二六	一四七	一四九	一五七
カナダ	二〇五	二一六	二五〇	一八二	一六五	一六七
日本	一九六	二三九	二六〇	二〇〇	一九六	一九二
スエーデン	三三九	三三〇	三四七	二一一	一六二	一六六
インド	一八〇	一九八	二〇四	一八一	一八〇	一七九

映せるものである。爲替の混亂の結果世界貿易が激減したことも當然の歸結である。要するに、物價は暴騰したが、世界景氣の實體は、生産指數の示せるごとく、後退したのである。

二、この期の特色

この期間を通じて、最も注目すべき現象は第二表の各國物價指數においても見られる通り、(物價のみならず、すべての經濟指標についても同樣のことがいへる)、世界大戰を轉期として資本主義諸世界全體の指數だが大戰に直接參加した國の指數の低下はさらに著しく激しいであらう。上の表に示す卸賣物價の暴騰は、他面において、爲替の大暴落、通貨の大膨脹の事實を反

國の經濟的發展の不均衡が著しく深められたといふこと及び世界には資本主義體制の外に、それと原理的に全く相容れないソヴエート社會主義體制が出現したといふことゝである。卽ち、戰後の資本主義の一般的危機を構成する最も重要なる要因が、この期間に釀成されたのである。

これをもうすこし具體的に說明すれば、この期間においては「一方には、生産力の非常な破壞を招き、莫大な負債の累積を殘した歐洲交戰諸國があり、他方には、生産の膨脹、金保有量の增大、貿易の進出を來たした、アメリカ合衆國、日本及び二三の中立國を生むだ。生産額における不均衡は、一九一三年と一九二〇年の比較において、アメリカの銑鐵三〇%增加、日本の約倍增等に對して、獨・佛・白・英・スエーデン・ルクセンブルグ等は、約四七%の激減、石炭は、アメリカの一六%增加に對し、全歐洲は二五%減となつてゐる。この生産部面における不均衡は、更に貨幣價値物價等の上にも、それ〳〵不均衡なる發展現象を示した。さらに對外貿易を見るに、歐洲諸國の萎縮に引き換へ、アメリカ合衆國にあつては、戰前一九一三年の輸出超過六億七千三百萬弗は一九一六年以降一九一九年までに、三十億乃至四十億弗に激增し、一九二一年においてなほ十八億餘弗であつた。しかも歐洲諸國が貨幣制度未曾有の紊亂に惱みつゝある間に、アメリカ合衆國は一九一九年六月早くも金本位制度を再建し、世界貨幣としての弗の制覇を基礎づけた。合衆國がかく金本位制再確立の先驅をなしえた所以は云ふまでもなく、大戰時における金の洪水的流入に負ふものであ

つて、一九一四年乃至二〇年間において、その對歐輸出超過額二百萬弗を實現し、對歐債權（戰債並に復興債）實に百二十二億弗をかく得したのである。かくして、大戰後の資本主義世界經濟は、多額の債務を負ふ歐洲諸國（ドイツは三百五十億馬克といふ巨大なる賠償支拂義務を負ひ、イギリスその他、歐洲諸國はいづれも獨逸賠償金の受領國ではあるが、對米債務と差引いての殘留分は極めて僅少である）と、債權國アメリカとの、二大分野に決裂した。また資本主義世界の基本たる生產秩序においても「相對的過剩生產のところと絕對的過少生產のところ」なる二つの分野に決裂した。しかもこの資本主義世界經濟の圈外には、地球表面の六分の一を占めるソヴエート社會主義聯邦の新なる出現あり、各大陸にわたつては、植民地域乃至半植民地域の存立するあつて、こゝに世界は、均衡を失し、もしくは本質を異にする諸力の全き對立となり、後來の世界經濟情勢を支配すべき根源をなしたのである。そして、この期間において、資本主義は政治的危機にまで追つひめられた。

第四節　相對的安定期

一、相對的安定とは

相對的安定期とは一九二〇—二一年に頂點に達した戰爭直後のインフレ恐慌期を經過し、この恐慌期に築かれた回復力を土臺として一九二七年頃まで景氣の立ち直りを見せた時期を指す。この期間における特徵は、金本位制度が再建され、技術的進步、合理化が行はれ、企業の集中、金融資本の制覇、生產設備及び生產の增大が著しく進行し、世界經濟の一時的安定を現出したことと、同時に、その安定の內部において安定を破壞し、來るべき大恐慌の素因をなしたところの諸矛盾—資本主義の一般的危機の追加的要因を育みつゝあつたことゝである。この期間の安定が、大恐慌襲來までの、一時的なそして根抵の動搖せる安定であつたゝめに「相對的」といふ形容詞が冠せられてゐるのである。

二、重要指標のうごき

相對的安定期の經濟指標として、物價、生產、貿易の表を掲げよう。

主要國卸賣物價（一九一三年＝一〇〇）

イギリス	一九二三年	一九二四年	一九二五年	一九二六年	一九二七年	一九二八年
	一五八・九	一六六・二	一五九・一	一四八・一	一四一・六	一四〇・三
イタリー	五一二	五一二	五九六	六〇三	四九五	四六二
ドイツ	一六・六二〇	一三七・三	一四一・八	一三四・四	一三七・六	一四〇・〇

此三表を簡單に說明するに、物價は、この期間中漸落傾向を辿つて、

合衆國	一四四・一	一四〇・五	一四八・三	一四三・三	一三六・七	一三八・五
カナダ	一五三・〇	一五五・二	一六〇・三	一五六・二	一五二・六	一五〇・六
日本	一九九・一	二〇六・四	二〇一・六	一七八・八	一六九・八	一七〇・八
スエーデン	一六三	一六二	一六一	一四九	一四六	一四八
インド（一九一四＝一〇〇）	一七二	一七三	一五九	一四八	一四八	一四五

世界工業生産指數

	一九一三年＝一〇〇 a	一九一三年＝一〇〇 b	一九二八年＝一〇〇 a	一九二八年＝一〇〇 b
一九二三年	一〇八	一一二	七九	八二
一九二四年	一一二	一一五	八二	八四
一九二五年	一二一	一二三	八八	九〇
一九二六年	一二三	一二五	九〇	九一
一九二七年	一三二	一三三	九六	九七
一九二八年	一三七	一三七	一〇〇	一〇〇

（註）獨逸景氣研究所調、aは世界合計、bはソ聯邦を除く世界合計

年まで上昇の一路を辿つてゐるが、此期間においては、ソ聯邦の生産增加のテムポよりも、ソ聯を除く、資本主義諸國の生産增加のテムポの方が速いことを示してゐる。但し一九二八年において、一九二三年に比して、著しく均衡的となり資本主義世界經濟の一般的安定を示してゐる。但し、この均衡的となつたと云ふことは一九二三年に比較して云ふことであつて、一九二八年といへども各國間の物價が不均衡である事實には變りはない。これは、戰爭の結果强められた、資本主義諸國の發展の不均齊を反映するものである。生産指數は一九二八年インフレ時代の暴騰を清算すると同時に、各國間の物價の開きは、一九二七—二八年には

世界貿易金額・價格及數量指數（國際聯盟調）

	一九二五—二九年	一九二五年	一九二六年	一九二七年	一九二八年
輸入					
價格（金）	一〇〇	一〇七・五	一〇一	九八・五	九七・五
價額	一〇〇	九八	九五	一〇〇	一〇二・五
數量	一〇〇	九一	九四	一〇一・五	一〇五
輸出					
價格（金）	一〇〇	一〇八	一〇〇・五	九八	九八・五
價額	一〇〇	九九・五	九四	九九	一〇三・五
數量	一〇〇	九二	九四	一〇一	一〇五
貿易合計					
價格（金）	一〇〇	一〇八	一〇一	九八・五	九八
價額	一〇〇	九八	九四・五	九九・五	一〇三
數量	一〇〇	九一・五	九三・五	一〇一	一〇五

兩者が同率となつたことは注目に値する。これ以後ソ聯の生産力は飛躍的增加を告げ、一九二九年以後の恐慌に拍車をかけた。（このことは後述する）貿易は、價額、數量ともに增加したが、價格（金）は物價漸落の當然の結果として低落した。

以上の三指標だけを見てもこの期間に資本主義國の景氣が恐慌から脱し上昇に轉じ、一般的安定狀態を呈せることは、推測するに難くない。

三、相對的安定の原因

しからば、かゝる相對的安定を齎した原因は何か？

これを政治的に見れば、資本家たちの、勞働者に對する一歩後退政策による政治的危機の切拔けであつた。即ち、ヴアルガは云ふ。●

「ヨーロッパ大陸のブルジョアジーは、戰後に成立した直接に革命的な形勢に際し、改良主義者の指導した勞働者の諸要求、即ち資本主義社會秩序の枠の内部で滿しうるようなあり來りの諸要求——普通選擧權、集會の自由、八時間勞働日等々——を滿してやつて、この革命的形勢をまんまと切り拔け、また、政府に坐つた社會裏切者の助けを借りて、彼等のばら〳〵に壞れた權力裝置を再組織し、勞働大衆の叛亂や、また二三の國——ハンガリー、フインランド、バイエルン——に成立したプロレタリアートの獨裁を社會民主々義指導者の積極的なお助けにすがつて彈壓するだけの時間の餘裕を持つてゐた。ブルジョアジーのこの勝利は、相對的な部分的な安定化を可能にした」と。

これを經濟的に見れば次のごとき、諸要因に歸することができるであらう。

イ、インフレーションの二重の效果——インフレーションは遂に政治的危機をも醸成せしめたのであるが前述のごとく、資本家たちの巧妙な——或は止むをえざる——一歩後退策によつて、この破局的危機が切拔けられ、インフレが整理さるゝに及んで、いまゝでのインフレーションは、こんどは逆に產業資本に對して、二重の利益を與へるに至つた。その一つはインフレーションによつて勞働賃銀を自動的に低下せしめたことであり、その第二は「金利の相對的低下を來すことによつて、もしくはまた、既存債權債務の實質價値を減ずることによつて、所謂金利生活者の利益を奪ふとゝもに產業資本家の金融的負擔を輕減せしめる。」ヴアルガの計算によると戰前ドイツにおける利子負擔資本總額六百九十億馬克利潤における貸附資本の分け前年々三四十億馬克であつたが、インフレーションによつて、この利付資本の所得は殆ど完全に消し飛んだ。そしてポーランド、オーストリア、ハンガリーの如きも同樣であり、フランスおよびイタリーでもその減額二〇乃至二五％に及び、かくて產業資本はそれだけ金融上の負擔を輕減され、資本の增殖を可能ならしめられたと云ふ。かうして、產業資本家は、二重に生產費を切り下げることに成功した。

ロ、アメリカ資本のヨーロッパへの流出——政治的危機の切り拔けに安心したアメリカ資本は當時採用されたヨーロッパの高金利政策にひきつけられて、とくにドイツに向つて急速に流出しはじめ、戰後疲弊した、ヨーロッパの復興、生產力の回復に、大いに獻じた。

ハ、金本位の再建によつて、爲替、物價が安定化して、企業の採算の基礎が確立され、對外貿易が促進されたこと。

ニ、技術の進步、產業の合理化、企業の集中化によつて、生產費が切り下げられ、利潤を增加せしめることができたこと。等。

とにかく、政治的危機を切り拔けえたといふことが、相對的安定期を招來せしめる最も根本的な要因となつたことは否定できない。

相對的安定が、以上のごとき要因によつて齎されたといふことは、その反面において、やがて、相對的安定を覆すところの矛盾的要素を育むでゐたことに外ならなかつた。

卽ち、合理化、企業の集中化が進み生產費を切り下げたといふことは、成るほど、企業利潤を高めはしたが、他面において、二つの矛盾した事態を生むだ。それは、合理化によつて勞銀を絕對的にまたは相對的（勞働强化により）に切り下げ、また、インフレ整理、金本位再建に伴ふ、デフレ策に基く勞銀の低下は、社會大衆の購買力を減殺し、販賣市場を狹隘ならしめるとともに、他力において、一時的な利潤の增大は、企業の集中、獨占の强化にもからゝわらず生產設備を擴張せしめ、生產を增加せしめた。このことはやがて、消費不足、生產過剩を招來せずには置かない。

さらに、戰時中及び戰爭直後の工業國の生產力減退は、農業國たる植民地、半植民地諸國の工業製品の需要を滿すに足りなかつたのでこれら諸國の工業化を誘致した。このことは工業國における大衆購買力の減退、生產設備の擴張とともに、三重に、販賣市場の狹隘化を齎した。

加ふるに、ソ聯邦の出現によつて、資本主義體制は弱められてゐたし、また、相對的安定期を通じて、大戰の結果釀成せしめられた、資本主義世界の枠內の發展の不均衡はます〳〵深められてゐた。

かうして、前項に述べたところの、資本主義の一般的危機を構成するところの諸要因は、相對的安定期において、すつかり準備されて、潛在してゐたのである。そして、相對的安定期の終り頃には何か或一つのキッカケさへあれば、直ちに、その諸矛盾を顯現せしめ、恐慌を爆發せしめる許りの情勢がかもされてゐた。そして、景氣は一九二八年頃から已に相對的安定から、下向へと轉じつゝあつた。

第五節　世界恐慌期

一、指標からみた恐慌期

世界工業生產指數（一九八二年＝一〇〇）

	a	b
一九二八年	一〇〇	一〇〇
一九二九年	一〇七	一〇七
一九三〇年	九六	九三

資本主義の一般的危機の諸要素を包藏しつゝ一九二八年に入つて、やゝ下降の徵候を現はしはじめた、相對的安定期の景氣は、一九二九年下期に入り、アメリカの取引所恐慌に導火線を與へられて、遂に、世界的大恐慌にまで發展した。この恐慌局面を、生產、物價、貿易の三指標によつて示せば上のご

一九三一年	八七	八一
一九三二年	七三	六一
一九三三年	八三	七六

（註）獨逸景氣研究所調、aは世界合計、bはソ聯を除く世界合計、一九三三年は九月迄の平均

とくである。

上の表に短評を加へるに、工業生産指數は、一九二九年以降一九三二年の夏頃まで低下の一本道を辿つてゐるが、一九三二年秋から上昇傾向に轉じてゐる。かくて、恐慌は一九三二年夏をもつて底をつき、景氣は同年秋から上昇に轉じつゝあるとの樂觀論を生むに至つた。國際聯盟の生産指數においては一九三三年から工業生産指數は上昇に轉じてゐる。この事は、二三の國については、卸賣物價についてもいへる。この樂觀論の批判については後に述べるこゝとしてこゝで、注意を喚起して置きたいことは、ドイツ景氣研究所の世界工業生産指數において一九三〇年以後はソヴエートを含めた指數の方が、ソヴエートを除いた指數よりも高位にあるといふ事實である。このことは、一九三〇年以後ソ聯邦の工業生産の發展のテムポが、資本主義國のそれよりも、急速であることを示すものであり、かつ、ソ聯の生産活動の旺盛によつて、資本主義國家は、從來のソ聯の販路を喪失したばかりでなく、逆にソ聯邦によつて彼等の販路を侵蝕され、二重に打擊を蒙つたことを物語るものである。この傾向は小麥のごとき農産品についてとくに著しい。ソ聯の出現が、資本主義の一般的危機形成の重要な一要因となり、今次の世界恐慌の深化に拍車をかけたことは、この一點からも察知しうるであらう。

世界の食料品、原料品及工産品の生産指數　（一九二五―二九年平均＝一〇〇）

	一九二五年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年
食料品	九八	一〇三	一〇四	一〇二	一〇四	一〇三
原料品	九二	一一一	一〇二	九一	八一	八八
農産原料	九七	一〇五	一〇三	一〇三	九六	一〇〇
其他原料	九〇	一一四	一〇一	八六	七三	八二
工業品	九一	一一二	九八	八七	七七	八六

（註）國際聯盟調

一九二九年基準の世界貿易指數

	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年
金額	八七	六七・五	五三	四七
數量	九三	八六	七四	七五

世界主要國卸賣物價指數　（一九一三年＝一〇〇）

	一九二八年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年
日本	一七〇	一六五	一三四	一一四	一二〇	一三三
英國	一四〇	一三六	一一九	一〇四	一〇一	一〇〇
米國	一三八	一三六	一二三	一〇四	九二	九四
獨逸	一四〇	一三七	一二四	一一〇	九六	九三
佛國	一三一	一二七	一一二	一〇一	八六	八〇
伊太利	四九一	四八一	四一一	三四二	三一〇	二八三
和蘭	一四九	一四二	一一七	九七	七九	七四
白國	一二一	一二三	一二八	九〇	七七	七二
瑞西	一四四	一四一	一二六	一〇九	九六	九一

二、恐慌に關するヴアルガの解釋

さて、一九二九年秋から、米國に現れた今回の恐慌が獨逸を襲つて、まづ金融恐慌への口火を切り、次いで、英國の金本位停止、それに續いて日本をも含めて、世界の二十數ヶ國の金本位離脱を惹起せしめて、本位貨恐慌を招來せしめたことは、已に一般の餘りにもよく知るところである。卽ち、一九二九年以來强行されつゝあつたデフレーション政策とそれに伴ふ深刻な不況とに耐へられずして、世界の多くの國は、金本位を離脱したのであつた。しかるに、生產指數や、物價を眺めると一九三二年の秋ごろから、上向き加減になつて來たので、恐慌は底を突き、景氣は上昇しだしたといふ樂觀論を生むだが、間もなく、一九三三年春に、巨額の金を擁し、貿易は出超を續け、しかもその資本は世界を征服してゐたところの、アメリカが、金本位を停止したので世界を驚駭せしめ、景氣は再び混亂狀態に陷つた。今度の恐慌の特殊性は、ヴアルガの指摘するところによれば、次の諸點にあるといはれる。

イ、現在の經濟恐慌は——以前の恐慌とはちがつて——絕對的に一般的である。この經濟恐慌はすべての生產部門及ブルジョア世界のすべての國をつかんでゐる。但し、恐慌の襲ふ强度は一樣でなく、すべての以前の恐慌及び、個々の資本主義國のすべての現象と同じで、この恐慌もやはり不均衡發展の法則に從つてゐる。

ロ、この恐慌は——工業生產の減退で測るとき殊に深いこと。以前の恐慌のどれよりも深刻であること。（この點は國際聯盟の調査でも認めてゐる——筆者註）

ハ、この恐慌は長く續いてゐる。この點では今度の恐慌はすべての以前の恐慌を凌駕してゐる。

ニ、いくつかの國（イギリスはじめヨーロッパ諸國）では、恐慌は景氣亢進のあとに來たのではなく慢性的不景氣の時期のあとに來た。（筆者註——從來の景氣循環とくに典型的な資本主義景氣循環を出現したイギリスにおいては恐慌は繁榮期の後に襲來し、不景氣の後には好景氣が續いたものであるが、今回の恐慌においては、逆に不景氣の後に恐慌が訪れた。この點從來の恐慌と今回の恐慌とは大いに趣を異にする。）

ホ、いくつかの生產部門（石炭、造船、纖維）では恐慌は景氣亢進のあとに來たのでなくして何年も前から續いてゐた不景氣のあとに來た。

以上のごとき諸特性は何によつて說明されるかといふに、それはこの恐慌が、資本主義の一般的危機（この說明の項參照）の下に起こつたものであつて、かゝる危機の下においては、資本主義に固有な生產力と消費力との矛盾が總ての方面で慢性的に鋭い形をとる傾向があり、

このことから恐慌の一般性、特別の深さ、長續き及び恐慌が大多數の國においてそれに先立つ高景氣なしにやつて來るといふ事實が生ずるのである。恐慌は本來どの恐慌でも強力的に前述のごとき矛盾を一時的に解決するのを機能としてゐるのであるが、これらの矛盾は資本主義の一般的危機の時期には多少とも鋭い形で恒常的に存してゐる。

へ、途法もない失業――いづれの恐慌も失業者を生ぜしめたが、今回の恐慌ほど多くの失業者を街頭に擲り出した記錄はまだ存しない。また、失業は資本主義の一般的危機の下では、高景氣局面でも、從のごとく吸收されることなく、何百萬の失業軍が、恒常的にあるといふ事實の一結果である。

さらにまたすでに戰前から見られた獨占の戰術の一結果でもある。獨占は、過剰生產を克服するには、價格の引下げによるよりも生產の制限により、つまり資本の犧牲によるよりも勞働者の損害によつており、恐慌の負擔を誰よりもまづ、勞働者に負はせようといふ戰術を用ひてゐる。

ト、非常に猛烈な、しかも、極度に不揃ひの物價低落。農產品と工產品、獨占物價と非獨占物價小賣物價と卸賣物價とのシエーレが擴大された許りでなく、それら商品全體の低落も烈しかつた。これは、戰爭直後に起つたインフレーション價格が、まだ完全に清算しきれないでゐたのによると信ぜられる。

チ、信用恐慌がないこと、貸付資本の過剰及び恐慌の初めに利率が安いこと。

（貸付資本の大過剰及び恐慌の初めに利率が安いことは、ヴアルガの云ふ通り恐慌の古典型に矛盾するものであり、同樣に資本主義の一般的危機と獨占による退化との結果である。併し、「信用恐慌が無いこと」といふ一句は「信用恐慌もまた、恐慌の古典型とは逆に恐慌の後に來た」といふ言葉に書き改められなければならない。ヴアルガは、この今回の恐慌の特殊性理論を、信用恐慌乃至本位貨恐慌のまだ發生しなかつた一九三一年の第一四半期中に書いたので、かような過失といふよりもむしろ見透しの不足を犯したのであつた。）

リ、外國貿易の異常に强度な萎縮。これは恐慌の一般性と個々の國のブルジョアジーが國內市場を自分のために固めようとする努力との結果である。（筆者註―このことは最近では戰爭準備のためにとくに强められた）從つて關稅は急速なテムポで引上げられ、輸入割り當てを決めたり、爲替管理を行つたり、輸入禁止をしたりして、外國貿易の高を互に減少せしめてゐるのである。

要するにすべてのことは、資本主義の一般的危機のなかにその根を持つてゐる。

以上ヴアルガの指摘した、今回の恐慌が、從來の古典的な恐慌と異るところの特殊性は「信

用恐慌を伴はない」と云ふ見透しの誤りを除いては、きはめて正しく、今回の恐慌を説明してゐると思ふ。

三、國際聯盟の恐慌觀

國際聯盟もまた今回の恐慌（聯盟では恐慌と云はずに不況と呼んでゐる）と、以前の恐慌との相違點を研究した。これはわが國の國際聯盟經濟委員會で飜譯出版した「世界經濟不況の過程並に樣相に關する報告書」にも詳述してゐる。

これによれば國際聯盟は「現下の世界的不況の本質的特徴は機構上の變化及び不調整が經濟的狀勢を極めて不安定ならしめてゐた時に景氣循環の下降が起つたことである」と觀てゐる。そして、この機構上の變化とは次の六つを意味すると說く。

A　第一次的食料品產業……技術的發達及保護政策によるストックの增大。
B　原料品工業……過剩生產。
C　製造工業……新興國出現及關稅障壁設定による餘剩生產力。
D　價格及賃銀の比較……各國間の物價、賃銀間に不均衡生ず。
E　不調整の特殊原因としての一般物價水準の動き……金本位復歸後デフレーション徹底せず、國內物價を國際物價に調整しえない國が多くできたこと、及び卸賣物價と小賣物價との不均衡……これは戰後のインフレの遺產。
F　一九二八年前後の經濟狀態の不安定……生產技術、商業政策、政治經濟組織の大變化。

右のごとき、聯盟の機構上の變化に關する見解は、ヴアルガの指摘した、資本主義の一般的危機構成の要因を殆んど完全に認めてゐる。ブルジョア的見解とマルクス的見解がかくも見事にかゝる複雜な問題に關し一致してゐる例はめづらしい。併し、兩者の見解は次の點においては、一致してゐない。即ち、ヴアルガは機構上の變化（資本主義の一般的危機）に重點を置いて、今回の恐慌の深化したこと、長かつたこと、その他前述の特性を說明するが、聯盟側では、機構上の變化と、景氣循環とを區別し、この二つが重なり合つたことに、今回の恐慌の特殊性を見出してゐることである。聯盟の見解は、景氣變動と構造變動（進步變動）とを區別する、いはゆるブルジョア的景氣研究方法に基いたものである。即ち「生產技術、商業政策又は政治經濟組織における大變化は普通吾々は景氣循環と稱するものとは違つた種類に屬するものと認められてゐる。即ち繁榮と不況の時期が交互的に且相當規則正しく現はれるのが、所謂景氣循環であつた。前記の大變化に對し商工業を之に順應せしめえないといふことは「機構上の不調整」とも云ふべきもので、景氣循環より生ずる不調整とは區別さるゝ。一九二九年までの二三年間はこの機構上の不調整の傾向が現れた—

―もつと前から現れた場合もある――たゞこの傾向が或程度において陰蔽され又は閑却されてゐたゞけであり、且つその影響が米國その他における循環景氣によつて一部分現はれなかつたゞけである。從つて景氣循環の轉向及び循環的不況の開始によつて、已に存在してゐた「機構上の不調整」の影響が現はれだしたことは當然である。これは一九二九年及び一九三〇年に現はれたのである。」

さらに聯盟は、今回の恐慌の樣相と戰前のそれとの相違點を次のごとく指摘してゐる。ヴァルガの說明と對比して見られたい。

イ、物價の體系は近年において殆ど彈力性をもたなくなつた。獨占的統制の下にある物價ですら今回の不況においては著しく下つてゐることは明かであるが、統制への努力はこの動きをかなり遲延せしめた。同樣、賃銀も一九二九年から一九三一年夏迄の間において、戰前の主な不況における程下つてゐないことも事實であらう。

ロ、戰前不況期には物價に現れた反應は生產及び貿易の量におけるよりも大であつた。然るに戰後發達した獨占傾向が或程度までこれを逆行せしめる樣になつたことは鐵及び鋼鐵にかんして云へる。

ハ、其他多くの點について、勿論、戰後の經濟機構は十九世紀の終り又は二十世紀の初頭と異つてゐる。過去二十年に亘る社會保險制度の發達は多くの製造國の勞働市場に影響を及ぼした。

ニ、今一つの相違は農業の資本主義的方法が益々廣く多數の國に採用されて來たことである。農業は機械的設備を廣く利用し、又資本市場の狀勢に左右されるやうになつて來た。そのために戰前より景氣循環の影響を蒙ることも亦益々大となつて來た樣である。

ホ、從前の不況と比較して現在の不況の持つ劃一的な特質は、一部分は、世界が一つの經濟單位になり來つたといふ事實に歸しうるようである。又從前の循環との比較に當つては、最近二ケ年間の政治的困難及び政治的不安定の影響を强調すべき必要があらう。この要因は一九三一年夏の回復への傾向における弱さに關聯し特に重要視すべきである。

ヘ、現在の不況を特に深刻化した要因は、農業恐慌が原料品及び製品の恐慌と殆ど同時に重なり合つて起りそして一般金融の不安定のために第一次生產品生產國の不利な狀態が受ける影響の極めて大きかつたことである。不況を長びかせた要因は、現在の不況は一八七三年のごとく、實際投資の長期且つ例外的な活動時期の直後を受け、景氣轉換の時には各方面に亘り一時的飽和點に已に達してゐた。この故に新投資に對する需要は今日比較的少く、又價格及び原價構成要素例へば長期利率の如きものゝ彈力性を缺いてゐるため、この分野の回復を困難ならしめてゐることである。

第六節　不況期の展開

一、恐慌期より不況期へ

一九三二年の秋頃から世界の生産指數は上昇しはじめ、物價もやゝ騰勢に轉じたので、恐慌は底をつき、景氣は上向しはじめたとの樂觀論を生ぜしめたことは前に述べたが、この樂觀論は一九三三年の米國の金本位離脱及び世界經濟會議の失敗等によつて消し飛んで了つた。しかし米國金融動亂が安定し、ニューディールに基くインフレーションが米國に起こり、米國物價を奔騰せしめるに及んで、世界の物價は上昇に轉じ、また、世界經濟會議の失敗により拍車をかけられた、各國の帝國主義的經濟政策の强化は、戰爭準備の軍需工業生産を刺戟し、このことが、財政インフレを通じて更に各國物價の上向を助け、さらに食料、原料の自給政策は農産鑛産品の價格騰貴をもたらした。そのうへ、一九三五年に入るに及んでヨーロッパの國際政局が緊張し、かくて、ベルギー其他の平價切下げ、金ブロックの危機等の不安材料が現れたにもかゝわらず、軍事財政インフレ、軍需工業の躍進を通じて、物價、生産指數は、上昇を續けるに至つた。そしてまた英國のごときは、世界資本主義諸國中で、最も堅實な景氣回復を示した。かくて、かゝる指標から見て、世界經

濟恐慌は、一九三二年に底を突き、その後不景氣（デプレッション）局面へ移行したといふとこが、定說となるに至つた。

二、不況期へ移行の理由

そこで、當面の問題は、いかなる事情から恐慌は不景氣局面へ移行したかといふことゝ、この不景氣局面は、從來の景氣循環のコース通りに、やがて繁榮局面へ進展するものであるかどうかといふことである。

こんどの不景氣局面への移行が、生産手段の需要に基く、自然的景氣循環の一環として生じたものでなく、救濟並びに軍事インフレ、關稅引上割當その他の他國商品の防遏策、ニラのごとき經濟統制策等の排外的、軍事的、人爲的政策から出たものであることは、已に一般の認むるところである。このことは、生産活動が旺んになり物價が上昇しつゝあるにかゝわらず、世界の貿易は殆ど停滯狀態に置かれてゐるといふ事實によつて證明される。即ち增加した生産物は大部分國內消費に當てられてゐることが判る。

しからば、かゝる人爲的景氣が果して自然的景氣に轉ずる可能性があるか？　そして、この不景氣は繁榮に轉ずるであらうか？

世界的に見て、この不景氣は、一般的好景氣に轉じえないであらうといはれる。その主なる理由は

イ、今回の不景氣が人爲的な各國個別的な景氣であること。

ロ、資本主義の一般的危機の下にあつては、景氣好轉の波は非常に短期であることを特色とすること。

が、擧げられる。資本主義の一般的危機の要因のうちで現在最も支配的なものは、國際的政治不安と各國經濟發展の不均衡と帝國主義的排外的經濟政策とであらう。景氣の自然的發展を促す要因は生產財生產が旺んになりそのための資本の需要が喚起されることにあるが、國際的な政治不安はかかる生產を躊躇せしめるであらう。

また、世界經濟體制の中にあつて、ソヴエート聯邦のごとき生產の飛躍的增大を現出しつゝある社會主義國家があると思へば、資本主義國內においても、英、米、獨、佛、伊、日のごとき諸國の景氣狀態に相違がある。デフレーションの金ブロックとインフレの日米のごとき著しき對照である。またイギリスのごとく廣大な植民地を領有して、恐慌を、比較的樂に切拔けえた國と、植民地分割競爭に遲れたゝめに、恐慌の打擊を深刻に蒙り政治的危機にさへ直面してる國が存在してゐる。また支那のごとき、本位貨恐慌に沈湎してゐる半植民地國もある。かうした資本主義諸國間の景氣の不均衡な發展は、相互に牽制し合つて、景氣を世界的に上昇せしめる力を減殺せしめる許りでなく、これら不均衡發展の諸國間の政治的經濟的フリクションはやゝもすれば、景氣を逆轉せしめる危險をもつ。

景氣好轉の世界化は貿易を通じて實現されるにもかゝわらず、各國が排外的經濟政策をとり、貿易が萎縮して了つては、景氣の世界的繁榮への進展は到底望みえないであらう。

かうして見るときは、今後の世界景氣の變動は循環運動を行ふにしても古典的景氣變動と著しく異つた樣相を呈するに至るであらう。そして、景氣變動の波をごく短期間にちゞめることをもつて、その特色とするのではないかと考へられる。

第二章　主要諸國の最近景氣狀態

第一節　アメリカ

一、好景氣來の聲

一九三五年の米國財界は全く夏枯れを知らず、そのまゝ秋景氣の上り阪にかゝるといふ稀らしいコースを辿つた。夏枯れといへば米國財界がまだ繁榮の時代にあつても夏期數ケ月の重苦しさを免れなかつたのであるが、それが恐慌期に轉落してからは全く慘めであつた。三一年、三二年の夏はいふも愚かである。ニューディールの御世となつても、ルーズベルト景氣の崩れ初めたのが三三年の七月であつたし、三四年夏の閑散ぶりは未だ記憶に新なるものがある。それが一九三五年にかぎつて全然夏枯れを味はなかつた。例へばニューヨークの株價を見ると次の如き足取りを示してゐる。

	工業株三十種	鐵道株二十種	ユーユースチール株
	ドル	ドル	ドル
四月二日	一〇一・二三	二八・七〇	二八7/8
五月〃	一〇八・七一	三〇・二一	三一3/8
六月〃	一〇九・七四	三〇・四八	三一3/8
七月〃	一一八・八二	三二・九二	三三1/2
八月〃	一二五・八五	三五・〇四	四三1/4
九月〃	一二七・二七	三五・〇七	四三1/4
十月〃	一三一・五一	三四・一六	四四3/8

熱狂的なところはないが、それだけに地味で堅實なあげぶりである。そして七月から八月にかけて次第にモメンタムを加へ、相場のみならず取引數量もとき〴〵は繁榮時を想起させるような巨額に達したのである。なほ十月に入つてから日本では伊エ戰爭が株式熱の最高潮を招來したが、彼地では却つて相場を反省しようといふような氣配を見せた。然し氣配は依然强調であるのは投機株たるスチールが足踏みをして雜株が續騰してゐるのを見ればわかる。

アナリスト景氣指數（ノルマル＝一〇〇）

	三三年	三四年	三五年
一月	六三・〇	七三・一	八三・六
二月	六一・六	七六・七	八三・三
三月	五八・四	七八・九	八一・五
四月	六四・〇	八〇・〇	八〇・六
五月	七二・四	八〇・二	七九・三
六月	八三・三	七七・二	七九・五
七月	八九・三	七三・二	八〇・七
八月	八三・五	七一・二	八二・七
九月	七六・四	六六・五	八三・六
十月	七二・三	七〇・五	八七・三
十一月	六八・四	七一・五	
十二月	六九・五	七七・四	

二、九ケ月週期の異例

財界の基調を、株價ではなく、より實體的指標で示さうならば、こゝにアナリストの綜合景氣指數がある。十月の指標はノルマルを百として八七を示す。同指標の八七といへば三三年七月卽ちルーズベルトブームの最高潮に出た八九・三を除けばこゝ五年間にない

數字である。三四年同月の六六と比較すれば實に一二%も高いし、例年なら夏枯れの初まらうとする四月にくらべて逆に七ポイントも高位にあるのである。

アナリスト景氣指標をあげた序でに、近年米國景氣學者間にいはれてゐる九ヶ月週期説を紹介しよう。それはかうである。二九年秋に恐慌が初つて三〇年三一年は全くつるべ落しの惡化だけでそこには何等景氣的波動は認められなかつた。ところが三二年頃になると大勢はなほ惡化を指してゐたが、その内部において小さな景氣的循環運動が生じ、恐慌から不況局面に移るやそれはもつとはつきりして來た。そしてこの小波動の平均週期を調べて見ると大概八、九ヶ月に當るといふのである。第一次の三一年四月から三二年十月に終る循環は期間十八ヶ月となるが、これは元來二週期となるべきものが當時進行中の金融恐慌によつて抑へられたと考へればよいであらう。次表はアナリスト指標により筆者の計算、指數の最高と最高の間をもつて一週期とす。

恐慌後の米國景氣循環

第一次	一九三一年四月—三二年十月	一八ヶ月	
第二次	三二年十月—三三年七月	九ヶ月	
第三次	三三年七月—三四年五月	一〇ヶ月	
第四次	三四年五月—三五年一月	八ヶ月	
第五次	三五年一月		

かように考へて見ると、今の米國財界は恐慌後の第五次循環にある譯で、それがもし九ヶ月週期を持つものとすれば、九月は丁度阪の絶頂に當り、これから先は第六次循環の下り阪にかゝるべき順番である。しかし實際はどうであらうか。夏枯閑散季に逆行しつゝ上昇して來た經濟活動が秋にかゝつて挫折するとするなら、そこに特別の事情を要する。然るに特別の事情はなさゝうに見えるから、景氣指數は例年の如く秋景氣を反映してなほ上昇すると見るのが妥當であらう。今回の對伊制裁では非聯盟國たる米國はかなり聯盟側に近づいてをり、ある種の商品の對伊輸出は打撃を蒙るであらう。だがそれは米國財界の全體として見ればほんの九牛の一毛にしかすぎない上に、戰爭氣分が高潮して來ればアメリカの主要産業にして好影響を受くるものはかなり多い。

では、前述の九ヶ月週期説はどうなるのであらうか。九ヶ月の短期波動が不況期を特色づける産物であつたと理解すればいゝのである。

三、生産財部門の活況

そのことは最近の景氣昂進を内容的に見ることによつて一層確められる。我々の知つてゐる不況期の短期波動の型は消費財の生産增加が先行し、そのあとから生産財生産がつく。そして後者の緊張度合は前者のそれにおよばず、前者が二三ヶ月で再び下降すると生産財も衰へてやがて全般的な谷を造る。景氣がかように三四ヶ月で交替する理由は結局消費財の季節的更新需要が不況期小波動の原動力であり、生産手段生産部門が萎縮のまゝでゐるからなのである。然し今度はこの關係が顔

る違つてゐる。詳しくは次表を見られたい。

一九三五年のアナリスト景氣指數（ノルマル＝一〇〇）

	一月	五月	一—五月騰落	八月	平—八月騰落
棉花消費	九七・〇	八一・七	△一五・三	七八・一	△三・六
羊毛消費	一二六・八	一五四・四	二七・六	一四〇・〇	△一四・四
生糸消費	六七・一	六六・七	△〇・四	六四・九	△一・八
靴生産	一二四・二	一一六・五	△七・七	九五・一	△二一・四
銑鐵生産	五二・三	五一・五	△〇・六	五七・八	六・三
鋼鐵生産	七〇・〇	五八・六	△一一・四	七二・九	一四・三
洋灰生産	三七・九	四九・四	一一・五	四五・九	△三・五
木材生産	五六・三	四五・八	△一〇・五	七三・九	二八・一
自動車生産	一〇四・三	七五・八	△二八・五	六一・九	△一三・九
亞鉛生産	六四・六	六五・〇	〇・四	七一・三	六・三
電力生産	九八・五	九九・三	〇・八	一〇五・一	五・八
鐵道荷動	六六・二	六一・五	△四・七	六〇・八	△〇・七

先づ一月と五月を比較する。五月は前示の如く本年中綜合指數が最も低下した時で、一月をこの循環の始期とすれば前半の終りで谷をつくつてゐる。もしこの循環の性質が消費財景氣とするならば、五月においては早く活躍した消費財指數が最も低下し、生産財指數は遲れて上昇しただけ比較的低落は少かるべきはずである。二三例外はあるが事實本年一—五月の推移はやゝこれに近いと心へよう。ところで次は五—八月だ。これは後半の上り阪で前の逆が出る。即ち消費財指數が最も強く騰貴し、生産財は漸く上向を開始したところであるべきである。然るに表示の如く事實はこの反對を示してゐる。上向を示すべき消費指數（棉花、羊毛、生糸、靴）が却つて五月より下廻つてゐて、鐵、鋼、木材、亞鉛、電力の活躍が著しい。これで見れば五月以降の景氣昂進は全く資本財部門の活況によつて支持されてゐるのである。なかんづく景氣指標として最も注目すべき鋼鐵生産、電力生産（これはすでに一〇五とノルマルを突破してゐる）の好轉か著しい。例外は自動車生産であるが、これは今秋の新車賣出を控へ主力工場が殆んど改造のため工場閉鎖を示してゐるからである。通例は自動車生産が急減すれば鐵鋼指數も影響を受けるのであるが、三五年夏の鐵鋼工場は不景氣知らずであつた。增産を前にした自動車工場の注文を握つてゐるほか、建築業、（特に住宅建築）および一般産業の設備更新が急激に鐵需要を增加せしめつゝあるからだと報告されてゐる。

四、低金利の浸潤

米國財界最近の活況について基本指標がそれを語つてゐるばかりでなく、空氣全體が著しく樂觀的となつた。たとへば新聞にあらはれる文字もレカヴアリーの代りに久しくお目にかゝらなかつたプロスペリチーといふ文字が使はれ始めた。米財界の現段階は勿論プロスペリチーと形容されるに遠いが、中間景氣とか回復とかの言葉では盛り切れない力强さを持つてゐると見るからであら

う。一部には早くもブーム化するのを警戒する論調さへ見られるのである（F・C・クロニクル九月二十八日號）。

この好轉原因は經濟的政治的にいろ〳〵あげられるのであるが、經濟的原因として第一に低金利の浸潤が指摘されねばなるまい。再禁止の日本財界の好轉が先づ金融の緩和にたすけられて起つた と同樣である。それが米國にあつては、政府の救濟インフレに放出した資金が日本の數百倍も多く、その上なほ歐洲方面からの金流入が巨額に上つたとの相違である。ニューヨーク金融市場の超緩慢ぶりは改めて說明するまでもなく、最近の全加盟銀行が過剩準備として準銀に寢かせてあるものが三十億ドルに達するほどである。銀行預金はこの三年間に恰度四十億ドルを增加した。しかも貸出は九億ドルの收縮を見てゐるので銀行はだぶつく金を政府證券の買入に向け、その額は殆んど百億ドルに近い。證券投資の總額は百六十八億ドルを超え、貸出額百四億ドルを拔くこと實に六十四億ドルにも達する。かくて銀行の採算は極度に苦しく、ニューヨーク諸銀行がさきに要求拂預金の手數料徵收を決定したことは記憶に新たなところであらう。

然し、銀行におけるこの遊資累積がアメリカ事業界をどれほど潤ほしたかといふと、三三年中は殆んど見るべき金利低下はなく、漸く昨年後半あたりから低金利の惠みに浴し始めたといつてよからう。一例としてニューヨーク諸銀行の實際貸附利率を見れば、昨年上半期においてまだ三分四、五厘であり、下半期に三分一、二厘と下り、本年に入つて始めて三分臺を割るに至つたのである。

またニューヨーク以外の東部都市では今年の三月から漸く四分臺を切つたところである。普通には短資レートだけが注意されて事業金利の水準がどれ位かは顧みられないようであるから上に示しておく。

銀行實際貸出利率

	三三年七月	三四年七月	三五年七月
ニューヨーク	四・一〇%	三・三〇%	二・六一%
東部諸都市	四・八二	四・一五	三・八七
南部西部都市	五・四三	五・〇七	四・五八

銀行金利の低落と相まつて注目すべきは資本市場の活況である。事業會社自體の信用の缺除と嚴格な證券取締法の存在は、短資レートが底拔けに低落しても一向起債市場は盛んにならなかつた。しかるに一九三五年に入つて漸く本格的な活動に入つたらしく、一—八月の發行累計は十三億ドルに達した。その中新規發行は二億に滿たず大部分が借換發行である。

起債高が增加してゐるばかりではない。發行條件が次第に起債者側に有利に動いてゐる點も看過されてはならない。三四年あたりは一流會社で五年四年といふ短期債で、利廻り五分六分

米國資本發行高一—八月（百萬ドル）

	新規	借換	合計
一九三五年	一八五	一、一三五	一、三二一
一九三四年	一二七	二三七	三六五
一九三三年	一二六	二〇二	三二九
一九三二年	二四九	二四五	四九五
一九三一年	一、四七二	七六五	二、二三八

も珍しくなかつたが、今では二―三十年の長期社債が四分以下で發行されてゐる。

金利の負擔の輕減は產業界が不況期から回復期への轉換に一度必ず通過する過程である。この負擔輕減があつて初めて事業會社は設備の更新とか擴張とかに着手する餘裕を得る。從つてこの最近に初まつた低利借換運動がどこまで徹底するかに、今後のアメリカ景氣の將來がかけられてゐるとも見られる。

五、勞働賃銀の低落

金利低落については勞働不安の解消が產業界に確信を與へ、回復の原動力となつたのではあるまいか。日本の再禁止景氣にあつてソシアルダンピングとしてやかましく論ぜられたところの、景氣回復期における賃銀騰貴のラッグである。米國ではニラ政策のために賃銀と物價との差は甚しく開かなかつた。のみならず勞働者側に組合組織加入權を認め團體交渉權を公認した。そこから起つた勞働不安は過去二年間企業家をして安心する暇を與へなかつた。賃銀高によつて賣上げ數量を增加せしめ得た產業にあつても、純益計算では利益はあがらなかつた。卽ちこの二年間といふものは企業家にとつて單なる數量上の景氣にとどまつたのである。然しル大統領の勞働政策はその後次第に右傾し、最後にニラ違憲判決は彼のプロ・レーバー政策へ止めをさしたといへよう。ニラ勞働條項の形骸はワグナア勞働法に存してはゐるが、對資本家鬪爭において勞働側の形勢は甚だ不利である。賃銀はすでに低落を開始し、勞働時間の延長される傾向も見えてゐる。これを一般的數字に見れば次の如し。

一ヶ年間の變化	生產指數	就業指數	賃銀支拂高
三四年八月	七三	八〇	六二
三五年一月	八八	七九	六四
四月	八九	八二	七一
八月	八六	八二	七〇
	一八%	二%	一三%

最近一ヶ年の變化をとると生產は一八%も增加したのに就業者の增加は二%にすぎない。この大きな資本家が勞働時間の延長を强行したか、新しい勞力節約の機械設備を用ひるに至つたか、單純に勞働能率の强化を計つたかのいづれかであり、恐らくそのどれもが當つてゐるであらう。賃銀支拂高の一三%增加はそれを語つてゐるのであり、製品單位當りの賃銀費は明かに低下した。これに加へて物價の動きは資本家に有利に勞働者側に不利に動いてゐる。卽ち資本家は製品單位當り賃銀費を低下させるに成功してゐる上に卸賣價格の平均八%は騰貴で、著しく利潤率を高めることが出來た。ところが勞働者にあつては生計費の暴騰は賃銀の增加を完全に抹殺してゐるのである。最も騰貴したものは肉類價格で、一年前の一〇四（戰前基準）は今や一六四を示し、勞働者家計は正に恐慌狀態だ。

すでに示した如く生產活動が回復しても產業界へよび戻された失業者數は極めて僅かである。現

在の全米失業數は一千萬人（AFLの推計）に達するが、これは殆んど恒常的失業群と見なければならない。かゝる尨大な永久失業の存在は當然に賃銀水準を壓迫するのであるが、最近さらにそれへ拍車をかけるごとき決定が政府によつてなされた。それは政府の失救事業へ使用する勞働者賃率の件で、勞働組合側が主張した全國同一の組合レートは一蹴され、地方的差別賃率が採用されることゝなつた。アメリカ的賃銀水準も結局一千萬の大失業群の前には崩れざるを得ないのである。

六、農家收入の増加

勞働者階級ひいて都市生活者に較べて遙かに惠まれてゐるのは農民である。政府當局の發表によれば三五年一—八月の農家總所得は四十億二千萬ドルに達し、前年同期に比較すれば二億五千萬ドルの増加であるといふ。この内譯は農産品賣上げ收入が三十六億七千萬ドルで政府の各種補助金が三億五千萬ドルである。前年との比較では前者で一億七千萬ドル、後者で一億ドルの増加に當る。この農民の所得増加は直接都市生活者の犧牲において得られたものであるが、しかもこの農民購買力の向上から最大の利益を得てゐるのは資本家階級であらう。アメリカ資本主義にとつて外國市場より何倍も大きい市場は農村である。農村がアメリカ的繁榮の最大支柱であればこそ、ニューデイル諸立法總倒れの今日、獨り救農法（AAA）の補强工作が議會の支持を得ることが出來たのである。

然しAAAの効果にも勝つて農産品の高價をもたらしたものは自然の暴威であつた。農家收入は前述の如く増加したが、それは凶作相場が出てゐるためで、農家の販賣數量は著しく減つてゐる。だから潤ほされたものは全農民の一部中農以上で、小農の狀態はます〳〵貧困化したものと想像される。小農經營の破壞はまた何百萬人かの失業者を製造する。最近注目される事實に都市の被救濟窮民中黑人の増加があるが、これも南部棉作農園から投げ出されたものだといふ。今日の農村景氣が凶作景氣であるために生じた矛盾の一つに鐵道の赤字がある。七月までの統計によれば農産物出廻りは上の如き慘憺たる狀態を示してゐる。

鐵道輸送高

	三五年七月迄	三四年七月迄
小麥粉（千ブッシェル）	一〇、四六九	一〇、四〇六
小麥（〃）	六四、七九九	一二八、三〇五
玉蜀黍（〃）	五六、九四一	九一、六〇六
オーツ（〃）	一七、八五八	二六、三九六
大麥（〃）	一八、九四八	二七、二五九
ライ麥（〃）	四、八〇〇	七、九八〇
棉花（千俵）	八六八	二、〇二四

いふまでもなくアメリカの鐵道は殆んど全部が農産品運輸で立つてゐるのである。從つて三五年の主要鐵道業績は軒並み赤字の増大に惱んでゐる。

今日のアメリカ景氣が跛行景氣たるべきは最早や說明を要すまい。

第二節　イギリス

一、ボールドウイン内閣の勝利

歐洲大陸で金ブロックの運命がきづかはれ、フランスに内閣の相次ぐ倒壞、スイスの一般投票騷ぎ、オランダではコライン内閣の苦境……といつたように、一向香ばしからぬ事件が續發してゐた三五年六月、イギリスでは、靜かに、部屋借りの引越ほどの雜音も交じえずに、マクドナルドからボールドウインへの内閣引繼ぎが行はれてゐた。たゞ單に、マクドナルドの「宿痾の眼疾」がさうさせたといふだけが、表立つた理由の唯一のものであつた。

「余は過去六年間、國の内外にわたる危險なる事態に直面して非常な心勞を重ねたため、過去數回休養を必要としたが、政府陣容の變改による擧國一致の戰線を弱化せしめることを最も憂慮せるため、その機會を得なかつた。余はかゝる變改は、わが國を導いてよくその難局を切り拔けしめ今日の好況に對する確信を與へしめた政策を急速度をもつて破壞するであらうと信じた。國家の進歩を持續しわれ〳〵を圍繞する内外の諸問題を克服するためには、現内閣の如き形態の内閣が依然必要である。今日余が首相の椅子を去り、ボールドウイン氏が其後を襲ふことは、何等意見の相違、政策の相違の結果ではない。余の同僚諸氏は余に對しともに政務に從ひ彼等に助力を與へんことを切望したが、余もまた彼等の熱望を應諾するものである。余は余の主宰せる擧國一致内閣に對して國民の與へられたる支持が新首相の下における同じ擧國一致内閣に對しても、新たに同じように與へられんことを希望しかつ確信するものである。」

これがマクドナルドの辭任直後におけるラヂオ放送であつた。ボールドウインは、六月七日大命を拜し同日夕刻には完全に新首相の椅子についてゐた。人々は、今さらながらイギリス政局の安定をフランス政局との比較において注意に上ぼせ、それの基礎をなすであらうところの「堅實なる經濟回復」に信を置いたのであつた。

このことは、三五年十一月十四日に行はれた總選擧においても、同樣に現はれた。ボールドウイン内閣の唯一ともいふべき有力なる反對派勞働黨は、この總選擧において相當著しく進出はしたがしかしボ内閣の主流基礎たる保守黨の絕對多數は破れず、政府與黨の壓倒的勝利であつた。このことは、伊エ戰爭に關聯して起つたボ政府の國際聯盟擁護方針が、擧國的な支持を得たゝめの結果でもあるが、またイギリスの財界が、現内閣の經濟政策に贊成し、かつそれによつて經濟安定が或る程度まで招來されてゐることを確認せる結果であると、見做されたのである。

二、まづ「貿易回復」

しからばイギリスの經濟界は、どの程度まで回復したであらうか？　金禁以來、次第に回復への途を辿つて來たことは、たとへ條件づきであれ、事實であつた。ストラコッシュに從ふならば、「スターリング諸國が、過去三年間に相互間の貿易において、はたまた國内工業および商業において、非常に大きい改善をなし得た」ことに、疑を容れる餘地はなかつた。

その一つの實例として　貿易價額の增加を次に示さう。

イギリスの貿易發展（百萬ポンド）

	輸入	輸出 自國品	輸出 再輸出	輸出 計	輸出入合計	入超
一九二八年	一、一九五・六	七二三・六	一二〇・三	八四三・九	二、〇三九・五	三五一・七
一九二九年	一、二二〇・八	七二九・三	一〇九・七	八三九・〇	二、〇五九・八	三八一・八
一九三〇年	一、〇四四・八	五七〇・六	八七・〇	六五七・五	一、七〇二・三	三八七・三
一九三一年	八六一・三	三九〇・六	六三・九	四五四・五	一、三一五・八	四〇四・八
一九三二年	七〇一・七	三六五・〇	五一・〇	四一六・〇	一、一一七・七	二八五・七
一九三三年	六七五・〇	三六七・九	四九・一	四一七・〇	一、〇九二・〇	二五八・〇
一九三四年	七三二・三	三九六・一	五一・三	四四七・四	一、一七九・〇	二八四・九

に對し十一億七千九百七十萬ポンドを示し、一九二九年以來初めて增加を記錄したのであつた。これを輸出入別に見るも、三　年はいづれも增加して一九三二年を凌駕する成績であつた。これを前年の三三年に比較するならば、輸入は五千七百三十萬ポンド、八・五%の增加、自國品輸出二千八百二十萬ポンド、七・七%の增加であつた。

即ちこれによると、三四年の輸出入總計額は一九三二年の十一億千七百七十萬ポンド、一九三三年の十億九千二百萬ポンド

貿易回復は、なほ三五年へも續けられた。即ち次の如く、上六ヶ月間の貿易總價額は、前年の同期に比し千五百萬ポンド、二・六%の增加であつた。輸出入內容でいへば、輸入が二百萬ポンド、〇・六%減である一方、輸出において千七百萬ポンド、七・八%增加したゝめの總額增加であつた。

三、利潤はどうなつたか

三五年上期の英國貿易（百萬ポンド）

	三五年上期	前年同期比（△減）	同上率
輸出	二三五	一七	七・八
輸入	三六〇	△　二	〇・六
總額	五九六	一五	二・六
入超	一二五	△　一九	一三・三

イギリスは、貿易に對する依存度の非常に高い國柄である。貿易が右の如く回復したとすれば、事業利潤は增加し株價は上昇せざるを得ない。三四年の事業收益調査を次表で見よう。

これはロンドン・タイムスが百十七の大會社について調べ上げた結果であるが、拂込資本に對する收益率は一九三二年の三・六五%から三三年は四・〇四%へ、さらに三四年は四・五九%へと漸增を示してゐる。從つて配當率も向上し、三三年四・〇二%であつたものが三四年は四・四一%の平均に增率した。むろん事業別に見れば良化したものばか

英國事業會社收益

	會社數	拂込資本（百萬ポンド）		利益（千ポンド）		對資本利益率（%）		同上配當率（%）	
		三三年	三四年	三三年	三四年	三三年	三四年	三三年	三四年
重工業	一二	二八	二八	四四二	一、〇八六	一・六	三・八	二・五	三・四
電燈電力	七	三四	三六	二、九八八	三、〇五四	八・九	八・六	七・二	七・〇
自動車航空機	一三	一二	一二	一、一四〇	一、七四九	九・七	一四・七	六・五	八・〇
自動車附屬品	九	三	五	三一四	四七六	八・八	一〇・三	一〇・五	八・六
轉車				一九〇	一四〇	〇・九	〇・七	〇・九	〇・九
綿紡仕上	一一	二一	二一	三、四五七	三、三四四	六・〇	五・七	四・五	五・一
其他紡績	一七	五八	五八	一六、六一八	一九、五一九	二・一	二・五	二・三	二・六
鐵道	四	七八六	七六八	三六六	四〇一	四・八	五・二	四・五	四・五
船舶	四	八	八	九六四	七五二	五・八	四・五	五・〇	五・三
商船	四	一七	一七	六一二	六四一	七・四	七・七	七・六	七・六
製靴	九	八	八	二、一七九	二、四二八	七・五	八・三	八・四	八・三
石油	四	二九	二九	六一	一六八	一・八	四・九	一・九	四・〇
ゴム	一〇	三	三	一四、一〇三	一、五六八	一五・〇	一六・六	一五・一	一六・一
煙草	三	九四	九四	一、五六八	一、八九六	一二・二	一四・六	一〇・三	一一・七
釀造	一〇	一三	一三	四五、〇〇二	五一、二八二	四・〇四	四・五九	四・〇三	四・一一
計	一一七	一、一一三	一、一一七						

りでなく惡化したのもある、たとへば紡績とか商船とかイギリスの名と離るべからざる事業の依然たる萎縮があるのであるが、平均的に見れば利潤增加は爭はれぬところであつた。

この趨勢は、三五年に入つても依然として繼續されたこと右表の示す如くで、三五年六月に終る一ヶ年間における二千七十二社の純益金一九三百萬ポンドは前年同期に比し一九・五%增加に相當する（ロンドン・エコノミストの所報）。

	會社數	純益金（千ポンド）		增加額（千ポンド）	百分率
第三・四半期	三一八	一九三三年	一三、四二五	三、七一四	二七・七
第四・四半期	四六八		二一、五二〇	七、〇九〇	三二・九
	一九三五年	一九三四年	一九三五年		
第一・四半期	五九二	一九三四年	五八、五七七	八、五五九	一四・六
第二・四半期	六九四		六七、九七五	一二、一〇一	一七・八
合計	二、〇七二	一六一、四九八	一九二、九六五	三一、四六六	一九・五
			八〇、〇七六		

三百萬ポンドは前年同期に比し一九・五%增加に相當する（ロンドン・ケンブリッヂ經濟研究所の株價調べを聯盟月報から拾ひ上げて見ると上表の如く、三五年は月を逐うての上昇であるばかりでなく、前年の同月に比し各月とも高い。

英國株價指數（一九二四年＝百）

	三五年	三四年		三五年	三四年
一月	一三七	一一八	二月	一三三	一一六
三月	一三〇	一二二	四月	一三一	一二四
五月	一三七	一二七	六月	一四一	一二四
七月	一四一	一二四	八月	一四八	一二五
九月	一四一	一二七			

かういつたわけで、イギリス人一般は、英國は世界一の「堅實な回復國だ」と信ずる。日本人が、食ふに食へない連中があつても「躍進日本經濟」を信じてゐ

るように。そしてマクドナルドは、前引用したように「難局を切り拔け今日の好況を確信せしめた政策」をとつたと自畫自讃しつゝ、首相の椅子から樞相の椅子へ腰を据ゑかへたのでもあつた。

四、「回復」の程度

しかしおよそ數字といふものは相對立する見解のいづれにも、味方の出來る、調法なものである。以上の數字は虛構の數字ではない、またそれに立脚した見解も强辨とはいへない。しかし比較の標準を少しでも變へて見ると、イギリスの經濟界また樂觀尙早といふ見解が、同時に樹て得られる。

例へば前掲の貿易累年表を見直して見よう。これは貿易回復の論據に擧げられた數字であるが、しかしそれは、非常に惡化してゐた年と最近の狀態を比較した場合にいへる話であつた。もし標準の時期をもつと溯及せしめて一九二九年と三四年を比較すればどうなるか？　三四年の貿易總價額は一九二九年のわづか五七%に過ぎない。卽ちいまだ半減の狀態をいくばくも出ないのである。また內容別に比較すれば、輸入價額は四〇%、自國品輸出價額は四五・七%、再輸出價額は五三・三%といふそれ〴〵の大減退となつてゐる。「堅實な回復」步調をとつて來たこと事實としても、今日到達してゐるところは「相當な回復」といふにも、未だ値しないのでなからうか？　それ故にこそ、ストラコッシュの如く、金停後におけるイギリス經濟の回復顯著なるを主張するものでさへ、今一段の經濟發展を招來するためには、通貨安定策を講じて何よりも貿易を回復せねばならぬことを强調したのである（「回復への途」を見よ）。

三五年に入つてからの狀態についても、同じような觀測を樹てることが出來る。ロンドン・エコノミストの六月景氣報は、次のような觀測を掲げざるを得なかつた。

「本月の經濟活躍は一段と昂進した。過去二ケ月間における事業活躍線の上向運動は、一九三三年のどの時期よりも顯著であつた。最近の改善は、大部分は資本財工業の昂進—特に建築、鐵鋼機械類の昂進に基いてゐる。……しかしながら回復は、依然として非常なマチ〳〵である。消費財部門は殆んど前進せず、自國品輸出の量はいまだ一九二九年のわづか三分の二に過ぎない」と。

イギリス經濟の「堅實なる回復」は認めるが「回復の程度」たるやかくの如きものであることも同時に認めて置かねばならぬ。

第三節　ドイツ

一、再軍備へ

三五年春、ドイツは突如として再軍備計畫を發表して世界を聳動せしめた。それがドイツの經濟にどんな影響を與へるであらうかは、常識的に大體の豫想をつけ得られたところであるが、實施後における現實の情勢は、果然悲觀の度を高めて來た。

「ドイツ政府は、再軍備宣言以來陸海空三軍とも急テンポの軍備擴張に乘出したが、その結果國債は加速度的に激增し、產業界もナチス政權の經濟政策に漸く不滿を示すにいたつた。ことに最近果實、バター、ラード等食用品類必需品が極度に不足を告げるにいたつた結果、民心不安の兆があり、パン、肉類等は潤澤であるが、價格は日々昂騰をつゞけ、勞働階級は生活必需品の買入れにも困る實情であつて、ナチス政權が最近再びカトリック敎徒ならびにユダヤ人に對する迫害彈壓を開始したのは、人心を他方面に轉向せしめて國內の窮狀を隱蔽しようとする糊塗策だとさへ傳へられてゐる」

軍擴は他の角度の理由よりして不可避の必要事であるとしても、それが經濟發展と相摩擦し、國民生活を不安ならしめるといふ問題は、ドイツにおいて特に重大である。ロンドン・エコノミストは軍備をもつて經濟回復をさまたげるものだと立論したが、それは次のような根據からであつた。

二、軍備と經濟

卽ち軍需生產は、勞働需要を產み出すであらう。しかしそれは國家の眞の富に對してなんら貢獻するものではない。蓋しそれは、失業救濟費と同じように結局は納稅者の負擔に歸着する。それは國民の生活程度を高めるものではなくして、反對にそれを抑壓するに過ぎない。ドイツは軍需品原料を輸入するが、それからは輸出さるべき何物も生れて來ない。のみならず今日のバター制のもとにあつては、ドイツは、その國民生活のために、或ひは一般事業經營のために必要とされるものを軍需品を輸入しただけ少なく輸入することに甘んぜねばならぬ。もし軍事費の支出によつて安全感が增大するといふならそれが一般事業を刺戟し、軍事費も有利な投資といへるかも知れないが、現在の情勢では軍費の支出は却つて安全感を傷つけ、その効果は反對的といはねばならぬ。

かくてエコノミストは、軍需生產の旺盛は經濟的に見て不健全を意味するとなしたのであるが、これは單なる机上の思辨たるに過ぎないであらうか。然らざることは前引用文の報道せる如くである。

ロンドン・エコノミストの三五年六月末景氣月報を見ると、ドイツの景氣情勢を叙して次の如く述べてゐた。

「ドイツにおける工業生產は、冬枯れ期を經過した後再び上昇運動を開始した。景氣研究所の計算によると、生產指數は三月四月とも急激に上がつてゐる。この改善狀態は五月にも引續いてを

り、たとへば官廳統計における失業者數は、五月中に二百二十三萬三千三百人から二百一萬九千九百人に減少した。貨車運轉も五月第一週の一日平均十二萬一千臺から先週には十三萬一千七百臺に增加してゐる。五月の銑鐵生產高百萬二千二百トンで、四月の九十三萬三千百トンに比較される。機械に對する內外の注文も增加傾向にあり、物價および工業證券市價もいづれも騰勢を示しつゝある。」

少し飛んで、九月の景氣月報に現はれた觀測は次の如くであつた。

「產業狀態の改善はなほ維持されてゐる。景氣研究所計算の工業生產指數は、六月の九三・七から七月には九六・九を示し、一年前の八二・四と比較される。官廳統計における失業者數もさらに減少し、七月末の一、七五四、一〇〇人から八月末に一、七〇六、〇〇〇人となつた。貿易は、輸出增加、輸入減少の結果、七月の出超二八百萬マークから八月には五〇百萬マークの出超を見た。」

これで見ると、ドイツの景氣はいかにも好調らしく、前記の所見とは非常の距離があるかに見える。しかしこのエコノミストのいふところは、たゞ單に表面に現れたところそのまゝの叙事に過ぎない。

少しく數字についてこれを見よう。一般工業生產指數は次の如き經過をとつてゐる。

ドイツ工業生產指數

一九二八年	一〇〇・〇	一九二九年	一〇一・四	
一九三〇年	八七・一	一九三一年	六八・五	
一九三二年	五四・〇	一九三三年	六一・五	
一九三四年	八〇・九	一九三五年	八五・〇	
同　二月	八六・〇	同　三月	七一・〇	
同　四月	七五・〇	同　五月	八〇・〇	
同　六月	九四・七	同　七月	九〇・五	
同　八月	七九・四		八一・六	
	八三・七		九二・〇	
	九一・二		八五・二	
	八五・一		九二・四	

（備考）括弧內は前年同月分。

三四年から三五年夏へかけて、ドイツの工業生產がいかに活氣を帶びてゐるかを語つてゐる。しかしこれは、固定資本の更新乃至擴張に基く生產財部門の生產增加を反映したものでもなければ、あるひは勤勞人口の購買力增加による消費財部門の生產增加を示すものでもない。ではその生產活躍は何を原因としてゐるのか。

（1）直接間接軍備を意味する軍用道路および自動車道路の建設による生產財の生產增加。

（2）消耗せる固定資本の更新、工場および卸賣商の在庫品補給のための生產。

（3）物價の續落期において低下してゐた商人手許在荷の補塡のための消費財の生產增加。

（4）外國原料品輸入の缺乏を見越して行はれる富裕階級の豫備的買入れに基く消費財の生產增加。

だいたいかくの如きを原因の主たるものとされるのであるが、就中軍需生產にその大部分を負うであらうことは直に認められる。軍需品部門における生產增加の經濟的結果については、前にエコ

ノミストの所論を引用したが、固定資本の更新乃至擴張を伴はぬ生産增加は、正常的な景氣好轉になんらの基礎を與へないものと見られるのである。

三、失業は減退したか

前述の如くロンドン・エコノミストは、ドイツ財界最近の特色の一つとして生産增加と〻もに失業の減少を擧げたが、ナチス政權のもとに失業者數の減退したのは事實であつた。

三五年一月	二、九七三千人	二月	二、七六四
三月	二、〇〇一	四月	二、二三三
五月	二、〇一九	六月	一、八七七
七月	一、七五四	八月	一、七〇六
九月	一、七一三	前年九月	二、二八一

しかしこれらの數字は、種々の條件を前提に置いて見られねばならない。第一に失業者の減少は、勞働奉仕と失業救濟機關の行ふ勞働への從事によつて減少せしめられ、か〻る勞働者の賃銀は非常に低いものであつた。第二に勞働賃銀は、軍備のための徵稅その他の寄附金等を强制的に控除されるのみでなく、第三に賃銀の購買力は、生計費の騰貴によつて自働的に低下せしめられた。

かくしてこれらの諸現象は、「ヨリ少ない賃銀總額をもつてヨリ多くの勞働者が働かされてゐる」ことを說明するのであるが、さらに一方には、勞働强度性の增加が强ひられた。それは同一期間內における生産指數と就業指數との上昇率の開きによつて說明され得る。

失業減が勞働者階級にもたらしつ〻ある實質上の恩惠はかくのごときものである。しかも失業者の減退といふそれ自體すら、官廳統計の示す數字に間違ひないかどうか、これも一つの前提條件の中に入れて置かねばならぬ。强制的に家庭に追ひ込まれた婦人勞働者はもはや失業者ではない、勞働奉仕制勞働に從事するものも、もはや失業者ではなくなつた。常備軍增加のための兵籍編入者もこれまた失業者の數を構成しない。失業數を故意に少く記錄することは、なんらの困難を伴はないのである。

四、貿易の破產

外國貿易はドイツの經濟機構から見て重要なばかりでなく、金缺乏の今日においては特にさうなのであるが、ナチス政府は外國貿易の振興において完全に失敗した。

	三五年上期	前年同期比(△減)	同上率
輸出	一、九六二	△一二三	五%九
輸入	二、一二七	△一八五	八・〇
總額	四、〇八九	△三〇八	七・〇
入超	一六五	△六二	二七・三

(百萬マーク)

經濟相シャハト氏は手を代へ品を代へ貿易振興のため大童になつてゐるが、三五年上期の貿易には未だなんらの成果をもたらし得なかつた。その貿易は輸出入とも前年同期に比して一段と萎縮した。

これが原因はどこから來たか、ライヒスバンクのブ

リンクマン博士は、（一）國内景氣のための原料輸入（二）世界的貿易不振に關聯する輸出の減少（三）多數競爭相手國における通貨の低落（四）保護關税をはじめとする一般的輸入制限（五）原料國における工業の發達（五）ドイツ商品に對する心理的排斥傾向（六）原料國およびデフレーション國における購買力の低下（七）清算乃至相殺協定（八）國際的信用および金融機關の缺陷等を擧示してゐる。またヴアルガは、もつと具體的に次の諸原因を數へてゐる。（一）地主のために、ドイツの農産物輸入市場の孤立化を增加させたことに對して農産物輸出國が採用した報復、（二）反ユダヤ人迫害の理由から外國に發展しつゝあるボイコット運動、（三）ソヴエート同盟に對するドイツ輸出の激減、（四）ドイツ工業の輸出倦怠（國内における物價の騰貴と販賣の增加）、（五）外國のクレヂット・ボイコットによつて惹起されたドイツがその輸出を長期クレヂットで支へることの不可能等。

貿易尻が逆調となり外國からのクレヂットが得られないために、對外支拂のための金準備はヒトラー政權のもとに完全に枯渴して行つた。ライヒスバンクの發表してゐるところによると、ナチス政權の出來上がつたころには、金と外國爲替を合はせてなほ九億マーク以上の殘存があつたが、その後メキメキ減少して三五年九月末にはわづか九千五百萬マークしか殘つてゐない。

五、シヤハトの新計畫

そこでナチスの經濟獨裁官シヤハト博士は、輸出の減退と信用の缺乏に對處するため、外國貿易の嚴重な國家統制を行つた。換言すれば、輸入ことに原料品の輸入を管理し、貿易尻の惡化を食ひとめようと計畫した。しかしドイツの工業は殆んど全く外國原料品に依存してゐるのであるから、原料品の輸入抑壓は重工業部門における重大な混亂と輸出可能性の一層の減縮を招來せざるを得ない。

そこで今度は、新たに「輸出振興計畫」が樹てられた。「新計畫」の詳細な内容はドイツ國内でも祕密に附せられてをり、その正體は判明しない。が方針の大綱は、十億マークの輸出振興基金を設定しこれをもつて輸出業者に對し輸出價格に應ずる補償金を交附するのであつて、よつてもつて、三四年度における月平均輸出額を基準とし、月々五千萬マークの追加輸出を生み出さうとするにある。しかしてその財源は、三億マークを金割引銀行の「外債換算制」による利益金に負擔せしめ、七億マークは各部門の産業に負擔せしめる。卽ち從來行つてゐた「追加輸出奬勵制度」に一層拍車をかけようといふのが、この「新計畫」である。

が、果してその効果は得られるであらうか。假りに輸出振興において効果を擧げ得るとしても、

その一方で、產業資本の負擔が重くなるであらうことを否定出來ない。それは新投資を阻害し、また產業からの獨立的な景氣回復の生み出ることを妨げるであらう。もちろん產業資本が、負擔の增加を甘受して默してゐようとは思はれない。その負擔の一部は勞働の强化や賃銀の引下げによつて勞働者階級に轉嫁せられ、他の一部は製品の國內價格における引上げによつて消費者階級に轉嫁されるであらう。だから「新計畫」は、假りに輸出振興に役立つとしても、それは國內的搾取を結果し、「飢餓輸出」の强化たるに終らざるを得ないこと明かである。

かくて再軍備下のドイツ經濟はいよ〳〵ます〳〵窮乏化する。ベルリン景氣研究所週報（三五年十月二日）は、シャハトの貿易計畫が漸次奏効し、三五年三月以來漸く輸出入の均衡を獲得し得るようになつたと述べてゐるが、しかもそれは、（一）貿易數量を犧牲とすることによつて貿易尻を均衡化し得たものであること（二）增出增加よりも輸入を抑壓することによつて得られた均衡であることを、同時に認めざるを得なかつた。

第四節　フランス

一、ラヴアル內閣と金本位

解體過程を辿りつゝある金ブロック中にあつて、盟主フランスだけは、まだ〳〵頑張り得るだらうと觀測されて來た。これは、他の金ブロック諸國と比較されたその經濟力より見て、當然のことゝいへる。

しかるにそのフランスの金本位制にも、ベルガの破綻（三五年三月末）後間もなく、狂嵐怒濤の場面が訪づれた。五月下旬から六月初旬へかけての金本位死守のための戰は、文字通りに悲愴なるものであつた。時のフランダン內閣は、五月二十三日以來の數日間に三回に及ぶ利上げを行ひもつて金本位の防塞たらしめたが、もはやこの正統的政策のみでは、金を引留めフランの落潮を支へることは、不可能だつた。病首相フランダンは、改めて財政獨裁案なる新政策をひつさげ、卒倒するをも辭せずフラン擁護のため議會に叫んだが、これまた容れられずして、內閣を明け渡した。次のヴイッソン內閣は、「怪物」と稱せられる手腕家カイヨー氏を藏相に據え、フランダン讓りの財政獨裁案を武器として起ち上がつたが、これまた否決せられて僅か四日間の短命に終つた。勿論下院は、かくの如く次々に內閣を倒したとはいへ、フラン擁護に反對なのではなかつた。フランは擁護せねばならぬが、その手段として政府に獨裁權なる武器を與へ、議會の權限が縮少されるのがいけない、といふのであつた。政府に議會解散權がないわけではないが、それはないに等しい死物であるから、是が非でも獨裁案を必要とする限り、議會とならんかの條件で妥協する外途はない。ヴ

イッソンのあとを襲ふたラヴアル内閣は、獨裁權の權限範圍をフランの擁護――主として投機抑壓に限るものとし、議會政治制度の尊重を誓ふことによつて、漸く獨裁權の獲得に成功したのであつた。これによつて、フランダン内閣倒壞後の旬日にわたる政界不安も颱風一過、ラヴアル新内閣は財政の均衡化に向つて一路邁進し、もつて喪はれたるフランの信用奪回に努力するであらうとされた。しかし果してフランの基礎確立が可能であり、輝かしき金本位の孤壘を守持出來るかどうか。まづわれ〳〵は、財政均衡の眞の基礎たるべき經濟部面の動きをふりかへつて見よう。

第一に生產活動についていふと、三三年七月が山で、それ以來、三四年中は例外なしに一本調子の減退を續け、三五年に入つても非常に低い水準において保合狀態にあるといふ有樣だ。卽ち三五年一月――八月は大體七三・二に固定し、三四年中の平均水準七八・〇に比し非常に低い地位での停滯である。上表の如し。

フランスの生產指數

一九二八年	一〇〇・〇	一九二九年	一〇九・四
一九三〇年	一一〇・二	一九三一年	九七・六
一九三二年	七五・六	一九三三年	八四・三
一九三四年	七八・〇	一九三五年一月	七三・二
同　二月	七三・二	同　三月	七三・二
同　四月	七三・二	同　五月	七二・四
同　六月	七三・二	同　七月	七三・二
同　八月	七三・二		

生產活動におけるかような萎縮から失業者は增加し、賃銀もその壓迫を受けて減じて來た。失業手當の受領者として公表されてゐる失業者數は、實際の一部分に過ぎないのだが、それによつて見ても、一九二九年月平均の九百二十八人から三三年の二十七萬六千人へ、さらに三四年の三十四萬五千人へ、しかして三五年三月には四十八萬四千人であつた。その後減退して九月に三十七萬三千人となつたが、これは多分に季節關係を含むものでなからうか。賃銀に關する最近の數字を引用出來ぬが、政府要路の人が、國營事業における賃銀を、二十年後にゼロになるよう年々價値の減じて行く紙幣をもつて支拂ふべしと、大眞面目に主張してゐるくらゐだから、惡化の程度推して知るべきだらう。

勞働者階級における統一運動の發展や、政界における一國社會主義黨の誕生乃至ファッショ黨の簇出などは、かような經濟狀態の惡化を土臺とするものであるが、さらに農民の側にあつても、不滿の聲は高められてゐる。

二、農業保護の成果

フランスは、工業化の發展に拘らず、依然としてその人口の半ばが農業で支持されてゐるので、恐慌以來、この方面への保護を强化して來た。農業關稅の引上げ、外國農產物の輸入制限、國內產物の使用――輸出奬勵乃至は價格の公定等。がそれにも拘らず、農民救濟の目的が達せられたとはいへず、他面それの惡影響をも免れ得なかつた。

たとへば、フランス政府は、農民救濟の目的で、小麥に對して公定價格を制定したが、農民は公

定價格の百八フランで實際に賣ることは出來ず、せい〳〵七八十フランでしか賣り得なかつた。パンの小賣價格の中で、農民の手に歸するところは、以前の七五%から五五%に過ぎなくなつたといふ。かくて公定價格と農民の實際賣價との開きを利得するものは、中間商人といふことになつたが、そればかりでなく、公定價格のためにフランス農産品價を國際的に割高ならしめ、それの輸出を困難ならしめる點で、貿易進出を妨げる結果にもなつた。或は食糧品價の低落を阻止する點で、勞働者階級の不滿を購ふこととともなつた。

ラヴァル内閣は、かうした農業保護政策の餘弊を除かんがため、農産物の引下げ策をとるにいたつたが、農民はこれを不滿とし、租税不拂運動を惹き起すにいたつてゐる。

三、物價變動の特殊性

一般物價水準の割高であること、卸賣物價と小賣物價との變動の不均衡なること等は、デフレーション下におけるフランス物價變動の特性であつた。

フランス政府は、その金本位制維持のため、デフレーション政策をもつて一貫して來たのだから物價は當然に下落して來た。卸賣物價指數についていふと、三四年から三五年へかけ、各月とも殆んど例外なく低落歩調を一貫し、三四年一月四〇五、三五年八月三三〇、その間一八%の下落であつた。

しかしこれを國産品物價と輸入品物價に類別して見ると、國産品價の方は相對的に高い。即ち國産品價は一九二九年の六三五から三四年八月の四一七まで低落した（三四%）に對し、輸入品は六〇二から二九六への低落（五〇%）であつた。その金物價を英國と比較しても、三四年十月の地位はフランス七一、イギリス六〇であつた。フランスの物價が割高である事實を覆へないのであつてこれは、フランスにおける金本位維持・保護政策强調の結果を示すものであらう。

次に卸賣物價の變動と小賣物價・生計費の變動を比較するに、後者の低落率は前者のそれにおよばない。卸賣物價は前述の如く一八%の下落を見た間に、生計費指數の低落率は僅か四%でしかなかつた。生計費・小賣物價の低落が、かくの如く卸賣物價のそれにおよばないのは、消費税の高率や中間商人の搾取の結果であらう。

四、生産費の低下難

物價變動に見られるかような情勢は、各方面に大きな影響をもつことになる。第一に小賣物價・生計費の低落が緩慢なことは、賃銀引下げ＝生産費引下げを困難ならしめ、産業資本家をして、物價と生産費との背反による困難を感ぜしめる。ストラコッシュの「回復への途」によると、スター

リング・ブロックにおいては、物價と生產の背反は次第に回復されて來たに引代へ、金ブロックでは反對に增大されつゝありといひ、フランスについて次のような觀測を下してゐる。即ち

「金本位諸國中の或る國は、農民を援助しようとつとめ、農業生產物の輸入に禁止的關稅を課したばかりでなく、かゝる生產物の最低價格を定めてゐるのであつて、これらの最低價格は、世界市場で行はれてゐる價格よりも實質的に非常に高い。かゝる手段は、一部の社會の負擔を輕くするけれども、生計費が不當に高い水準となるため、殘りの社會に不釣合に一層重い負擔を負はすことになる。かゝる自己破滅的の方法の影響は、フランスの生計費指數の傾向に極めて明らかに現はれてゐる。フランスにおいては、一般物價の物すごい下落に拘らず、現在における生計費は一九二八年の時と殆んど同じ水準にある。もしデフレーションによつて、價格と生產費間の均衡を回復することが不可能ならば——金本位諸國の經驗はこの點に關する雄辯な證明を提供してゐる——かれらに開かれた唯一の手段は、國內物價水準を、高い水準の生產費と調和するだけ引上げることであり、これを達成する唯一の直接簡單かつ統制可能なる方法は、通貨の平價切下げといふ大膽なる手段によることである」

と。フランスの物價情勢は、かように、政策轉換を必要とするまでに追ひ詰められてゐるのだが、それは、フランス商品の對外競爭力の低下＝貿易の惡化といふ現象を生ずるを得ない。

五　、貿易萎縮の內容

フランスの貿易は、一九三二年以來著しく惡化して來た。三四年の貿易は輸出百七十億フラン、輸入二百三十億フランで、入超額は前年の九十九億フランから約半減して五十億フランとなつた。がこれは、貿易の全面的萎縮が結果したのだから、一概に貿易好轉などゝ樂觀するわけに行かぬものであつた。即ち三四年の貿易は、前年に比し、輸出三・五%減、輸入一九%減で、輸入減の甚だしかつたことが、入超減の主原因だつた。ところがこの輸入激減は、通商貿易上における人爲的障壁の高化にもよるが、また國內消費力の減退を意味するものであつた。

輸出の方は、率においてこそ大したものでなかつたが、それを內容的に見れば、精製加工品の激減によつてゐた。從來におけるフランス輸出品の大宗たる精製品の輸出減が顯著になつて來たことは、フランス品の對外競爭力がまず〳〵後退して來たことを意味する。

三五年の貿易成績も依然として惡い。一—九月累計では、輸入一五、五五一、七〇〇千フラン（前年同期は一七、六七七、七〇〇千フラン）、輸出一一、四七〇、〇〇〇千フラン（前年同期は一二、八一二、五〇〇千フラン）であつた。輸入減が輸出減より大きい結果として、入超が前年の四、八六五百萬フランから四、〇八一百萬フランに減じたに過ぎない。

かくて入超減を來たしたとはいへ、輸出入ともに樂觀すべからざる形勢にあるは明らかで、これは貿易外收支の惡化傾向と相まち、一層の悲觀材料となる。貿易外收支勘定は、商品貿易の萎縮による海運收入減、觀光客消費の激減などを原因として、最近めつきり惡化しつゝあり、金本位維持のための犧牲は、貿易および貿易外收支勘定において、最も具體的に現はれてゐる。

六、金蓄積の豐富

これに對して、金蓄積の狀態は依然豐富であつて、これのみは、最も樂觀さるべき材料たるかに見える。既述の如き事情からして、三五年五月以來巨額の金を喪失したけれども、九月末においてなほ七百十九億五千二百萬フランを擁してゐる。

かつてフランス銀行のラクー、ダムージョペロンの兩氏は、金の流出が五百億フランに達するといふのは、現實には不可能であるが、しかしかりに五百億フランの流出を見ることありとするも、なほ金準備率は法定最低率の三五%をはるか上廻り、五六%であり得るといつたことがある。これはやはり金蓄積が七百億フラン臺の時代における計算であつたから、今日はおいても、なほ事情に大した懸隔はないであらう。

しかしこの金蓄積量の豐富については、金蓄積の豐富のみが、金本位を守り得る絶對的な條件でないといふことを考へ合はさねばならぬ。金蓄積の擁護のために他の經濟部面を弱體化するならばその方面から金本位の脅かされることは、すでに他の諸國において實證されたところである。

七、財政回復の展望

最後に、過去數年間しば〳〵內閣の瓦解を餘儀なくし、フランス金本位制の癌とさへいはれて來た財政難はどうか。

三四年ヅーメルグを首班とするいはゆる擧國一致內閣が成立し、經濟難を加重する如き增稅によらず、專ら極度の節約を斷行することによつて、財政均衡が回復されたと稱せられた。それによつて「豫算の劇」は三四年末をもつて終局したともいはれて來た。しかしながら、ヅーメルグ內閣のかような「成功」にも拘らず、なほ三五年度豫算に於る歲入不足は十五億フランと見積られ、豫想される租稅の收入減を計算に入れゝば、二十億乃至三十億フランにも達すべしと、されたのであつた。

しかも三五年に入つてヨリ强化され具體化されて來た軍擴計畫によつて、かような歲計不足は一層增加されざるを得ない運命となつた。ヅーメルグ財政改革の効果は認め得られるにしても、それが過大評價は到底許されざるところであつた。

のみならず、ヅーメルグのなしたごとき節約による財政難の切り拔けには、それ自身さらに財政

難の一根源を發生せしめるものであつたことをも、忘れてはならない。即ち前に述べた如き失業の增加はその一因を行財政の整理にもつたに相違ないが、それは轉じて社會政策費を增加せしめねばならなくなる點において、財政を壓迫するにいたるのである。

既述の如くラヴアル内閣は、財政獨裁權をひつさげて金本位を維持せんとの方針をとり來つたのであるが、財政均衡が果して實を結ぶかどうか、組閣數ヶ月後の三五年秋にいたつても、依然として疑問とされた。組閣後の實績によると、軍事費の增額、歳入減の傾向等々、財政回復への展望は非常に惡い。

以上の如く觀察して來ると、フランスの經濟實勢は、依然として危機を脱せず、むしろなほ危機深化への過程をとりつゝあるといふのが、その眞實の姿だと思ふ。三四年六月二十八日の議會に提案された元の藏相ポール・レイノーのフラン切下げ案は、政府およびジャーナリストの主流によつていたく排擊されたが、それにも拘らず、フランスの金本位制が、今日の國内經濟情勢ならびに國際經濟情勢下において、そのまゝ不動であり得るとは、考へ得ざるところである。

第五節　イタリー

一、デフレーション政策の强行

最近の一兩年間におけるイタリーの經濟情勢は、世界的な本位貨恐慌下における金本位制の固守によつて特徴づけられるものであり、さらに三五年の後半にいたつては、戰時經濟の色彩が加へられていはゆる戰時統制經濟狀態に置かれることゝなつた。

一九三三年の世界經濟會議以後、イタリーがフランス、オランダ、ベルギー、スイス等と共にいはゆる歐洲金ブロックを結成し、少なくとも一九三四年中期まで純粹な金本位國として立つて來たことは、周知の通りである。從つてその間、イタリー政府は終始嚴格なデフレーション政策をとつて來た。一九三四年初期の事態を回顧するに、政府はその四月、財政支出の切下げを行ひ、同時に一般的な賃銀カット、物價切下げの政策を實施した。一般官吏の俸給はこの時約五億リラを引下げられたのであり、一般賃銀は三四年中に約六%をカットされ、生活費指數も家賃の强制的引下げや組合販賣價格の强制的引下げやによつて、終七%を低下したのであつた。これはいふまでもなく、よつてもつて財政狀態を補强し、或ひはその商品の對外競爭力を培養することによつて輸出貿易を振作し、兩々相俟つて金本位制を維持せんとしたものである。

しかしかうした政策は、全體としては、なんら十分の効果を現はさなかつた。第一に財政狀態は

官吏の減俸こそ敢行したけれども、いはゆる匡救的支出は容易に減少せしめ得られない。政府は、支出節約の手段として、五分利債を三分半利債に借替えるなど、極力努力はしたが、赤字の抹殺は不可能であつた。三四年度に六十三億リラ、三五年度に二十三億リラといつた巨大な歳計不定を餘儀なくされたのである。

第二に、物價の下落方針も殆んど達せられなかつた。といふよりも、寧しろ反對に騰貴したのであつて、三四年二月に六十二ポイント（一九二八年一〇〇）であつた卸賣物價指數は、年末には六十二ポイント二に上昇してゐた。そこで政府は、同年十一月にさらに信用の收縮政策をとり、物價を引下げようと試みた。十一月二十六日におけるイタリー銀行公定割引歩合の三分から四分への引上げ、國債二十億リラの發行による中央銀行に對する政府債務の償却等がそれである。しかし物價は、さうした政策に逆行して三四年末葉から三五年へかけ、一段と騰貴して行つた。

物價のかような動きからして、イタリー商品の對外競爭力は弱まるかといつて强まりはせず、從つて外國貿易は益々萎縮せざるを得なかつた。三三年と三四年とを比較すると、輸入は七十四億三千二百萬リラから七十六億六千五百萬リラに增加した一方、輸出は五十九億九千百萬リラから五十二億三千百萬リラに減少し、勢ひ入超は十四億四千百萬リラから二十四億三千四百萬リラに增大したのである。

かうした商品貿易上の入超を償ふべき貿易外收支勘定はどうなつてゐるか、それの最近の數字は詳らかでないが、ロンドン・エコノミストのいふところによると、受取勘定項目の主要なものとしては海外移民の送金と旅客の消費だけしかないといふことである。これらが恐慌以來激減して來たであらうことは容易に見得るところであるから、從來の受取勘定年額とされてゐた十億リラは迚も維持されてゐないであらう。入超を賄ふなどハいふことは、到底考へ得られざるところである。

その保有金は勢ひ減少せざるを得ない。三三年末と三四年末とを比較すると、國内保有金は七十億九千二百萬リラから五十八億千百萬リラに減じ、外國爲替の保有量も三億五百萬リラから七千二百萬リラに減じてしまつた。

保有金の減少はつひに三四年十二月八日の爲替管理令を生むにいたらしめた。もつとも、イタリー政府が爲替管理をはじめたのは、すでに三四年五月二十六日の法令からであつた。この五月の法令は、外國證券所有者の國内所有分のスタンプ、その國外所有分の爲替管理局への申告、商取引以外の爲替取引の禁止、海外債權の申告等を内容とせるものであつたから。そして十二月の法令は爲替管理をさらに一層嚴重化したものであつた。卽ちそれによつて、銀行、會社ならびに國民は、その所有する爲替、海外債權、有價證券を十日以内に爲替管理局に申告せねばならない。そして管理局の要求があれば、その日の相場をもつて所有爲替を引渡さねばならぬといふのであ

る。かくて、イタリーの金本位制度は、この日をもつて、實質上、本來的意味の金本位制でなくなつたのであつた。

以上の如くにして、世界的本位貨恐慌下におけるイタリーの金本位死守＝デフレーション政策は明らかに失敗に終つたのであるが、三五年に入るとともに、さうした情勢は一層顯著になつて來た。それは、三四年末からのエチオピアとの紛爭が惡化傾向を示すにいたり、軍需的支出が增大して來たことによつて拍車をかけられたものであつた。ベルリン景氣研究所週報の記述によると、一九三三－三四年度の植民地、陸海空軍の支出は約五十億リラであつたが、一九三四－三五年度にいたつては、三五年夏までに判明してゐた分だけですでに六十五億リラに達したといふことである。

二、生産、物價、貿易の動向

かうした軍事的支出の增大は、その經濟部面にどんな影響を及ぼしたかといふに、まづ第一に工業生産は飛躍的に增大した。比較のために最近數年間の生産指數（一九二八年一〇〇）を引用して見ると、一九三二年—七三・〇、一九三三年—八〇・五、一九三四年—八八・三、しかして三四年五月の八九・五は三五年五月に一一三・六に躍進してゐる。もつともこの五月を頂點として爾後やゝ頽勢を示すにいたつたが、八月においてもなほ九五・二を維持し、前年同期の九三・五と對照される。

かような生産の增大が、國家の軍事的支出に負ふところ大であるのは、生産の最も飛躍せる部門が冶金、化學工業などであつた點に見てうなづけるのである。

卸賣物價も、三五年に入つて急速に騰貴するにいたつた。一月以來各月とも上げ續け、八月には六九・一を示したのであつて、三四年中の平均が六二・〇であり、三四年八月が六一・七であつたのと對照すれば、騰貴ぶりの顯著であつたこと一目瞭然である。（一九二八年を一〇〇とする指數）

同時に、これまでイタリーの經濟情勢を特徵づけてゐた跛行狀態も、益々甚だしくなつて來た。輸入は原料品需要の增加のために增加するのに、輸出の方は增加しないで寧しろ減退して行つた。三五年一—七月の貿易數字によると、輸入が四十四億千二百萬リラであるに對し、輸出は二十八億千六百萬リラに過ぎない。入超は十五億九千六百萬リラといふ巨額であつて、三三年の一年中における入超額（十四億四千百萬リラ）を凌駕するのであるから、文字通りの貿易受難である。勢ひ金は流出し、リラの相場は、金本位を公式に拋棄してゐないに拘らず、三五年夏平價の約九三％に落ちてしまつた。

イタリー政府が、かうした情勢の惡化を傍觀してゐたのかといふと、無論さうではない。三五年二月、政府は三五年度の輸入額を三四年度分の三五％に制限するといふ、極端な輸入制限令を布告した。それにも拘らず輸入の減少しなかつたこと、前述の通りであるが、恐らくそれは、對エチオ

ピア紛爭の激化から、原料品の豐富なストックを作らざるを得なかつたことに由來する。がそれにも拘らず、輸入制限政策は、理論上、物價や輸出貿易に及ぼすべき筈の影響を、如實に實現して行つた。前述した物價の騰貴、輸出の減退がそれである。ロンドン・エコノミストは、三五年七月までの一ヶ年間におけるリラの購買力は、大戰前を一〇〇として、三六・六四から三一・三四に低下したと計算してゐるが、官吏の減俸や勞働者賃銀は三四年にカットされたまゝであるから、大衆の生活苦は益々激化せざるを得なかつたものと、いはねばならぬ。

三、政府の諸對策

輸入の增大につれ、さらに對外支拂に充てるべき新たなる財源が必要になつて來た。五月二十一日に發せられた外國有價證券管理令はこの目的に副はんとしたもので、（一）諸銀行、會社、個人の所有する外國株式、同債券、外國において發行されたイタリー債券等を二十日以內に中央銀行に引渡し、爲替管理局勘定に振込むこと、（二）前記諸證券のうち外國銀行に預託されてゐるものは、その證券の所有者名義をイタリー中央銀行の名義に書換へること、（三）イタリー中央銀行は右證券の預託者に代つて利札の支拂を受け、これを當時の爲替相場によつてリラ貨をもつて相當額を支拂ふものとする、といふのであつた。卽ち國內所有の對外債權を政府の管理下に集中し、政府の利用に委ねしめるわけである。これがためにイタリー銀行の爲替手持高は、五月末の五千四百萬リラから六月の二億九千五百萬リラ、七月の三億五千五百萬リラ、八月の四億三千八百萬リラ、九月の三億九千八百萬リラに激增したのであつた。

次いで七月二十二日、政府は勅令をもつて、イタリー銀行の金準備規定（銀行券流通高および要求拂債務に對する四〇％以上の金準備を要す）を「一時的に」抹殺してしまつた。蓋し準備金の一部を、差當り必要な外國への支拂に充てねばならなかつたから。イタリーの保有金は、七月末から八月末までに五億五千四百萬リラを失ひ、さらに八月末から九月末へかけ四億五千三百萬リラを喪失してしまつた。

デフレーション政策の行詰りは、かくして三五年に入つて以來益々甚だしくなり、インフレーションへの方向は決定的になつて行つた。國家の資金需要を賄ふことの困難の增大は、一層顯著となつて來た。三四年末までは國家財政の赤字は、國債によつて賄ひをつけるにさまで困難ではなかつた。蓋し國家の支配下にある貯金の增加は、國債の發行資源として十分であつたから。ところが三五年初から貯金の減退が目立つて來た。前述中央銀行準備規定の抹殺は、かうした事態の下において、準備規定に束縛されない銀行券の增發が不可避となつたからでもあつたのである。

四、エチオピア進略の背後

かような狀勢下において展開された伊エ戰爭であつた。戰爭の原因としては種々の事情が數へ得られるが、結局のところ、以上の如き經濟難の深刻化が、イタリーの態度を決せしめる根本的なものであつたことを否定出來ない。

周知の如くイタリーは、極めて天然資源に乏しく主要なる原料品ならびに食料品は、多くこれを海外に仰がざるを得ない立場にある。主要輸入品を見ると、生活資料の方では小麥、玉蜀黍、コヒー、肉類、魚類等、工業原料品の方面では棉花、羊毛、石炭、礦油、鐵鋼、油脂、木材、パルプ、亞鉛、ニッケル、クローム等々いづれも然りであつて、歐洲諸國中、これほど生活および產業の資源を海外に仰がねばならぬ國は、恐らく少ないであらう。殊に工業の原動力たる石炭の產出は極めて乏しく、年々國外から輸入する石炭の價額は、商品輸入總價額の一〇%近くにも及ぶ狀態である。食料品と原料品との輸入を合算すれば、總輸入價額の五〇%までがそれに充てられてゐる。

このことは、イタリーをして、否が應でも新植民地の獲得に目を向けしめるのであるが、イタリーは、世界大戰後の植民地分割競爭において著しく立ち後れてしまつた。英國と本國人口をほゞ同じくしながら、その植民地の面積は英國の十七分の一に過ぎない。またフランスに比較すれば、イタリーはフランスよりも狹小な本國內にそれよりも多い人口を抱擁し、植民地域はそれの五分の一である。

それ故にイタリーの植民地欲は、大戰以後常に抱懷されてゐたところであるが、恐慌の激化はかゝる意欲を一層切實ならしめるにいたつた。といふよりも、寧しろ植民地域の獲得に向ふ以外策の施すべきところがないまでに恐慌に追ひ詰められて來たのであつた。我等のすでに見た如く、金本位制を維持しつゝ輸出貿易を振興せんがためにはデフレーション政策に出ねばならなかつたが、それを施行すれば失業は增加し、生活難は高まり、ムソリニ政權への非難が增大して來る。されば、インフレーション政策をとるとすれば、物價は益々騰貴し、商品輸出は困難となり、金本位制は否應なく廢棄されざるを得ない。かうしたヂレンマを克服する一つの途は、新たなる植民地域を獲得し、それによつて商品市場と原料資源とを確保することである。新植民地域の獲得が必ずしもかような結果を具現するかどうか確實でないにせよ、さうしなければイタリーの現實のヂレンマを克服し得ないといふのが、少なくとも理論的結論なのであつた。

獲得すべき新植民地域として、アフリカがまづ選ばれるであらうことは、その地理的地位から見て明らかなことである。しかしアフリカの北部諸地はすでに英佛の占めるところであるから、イタリーの進出すべき土地としては、アフリカ大陸中未だ分割されず唯一の獨立國として存在するエチ

オピアに向はざるを得ない。エチオピアは、伊領ソマリランドおよびエリトリアと接觸し、今これを獲得するにおいては、イタリーが北部アフリカにおいて極めて有利な地位に立つべきは明らかである。

伊領ソマリランドおよびエリトリアが赤熱不毛の地であるに反して、エチオピアは氣候も比較的よく天然資源にも惠まれてゐる。のみならず歴史的にこれを見れば、一八八九年のウチエリ條約によつては、すでにイタリーの保護領域でもあつたのである。それが一八九六年のアドワ戰爭以來イタリーと離隔されてゐるのであるから、イタリーとしては、これと一戰を交へてアドワの雪辱を行ひ、その天然資源を獲得して恐慌の克服に資し、ともすれば擡頭せんとする反ムソリニ熱にも備へる——實に一石二、三鳥的意義をもつエチオピア攻略であつたのである。

五、戰爭の經濟影響

イタリーのかゝる意圖がどの程度まで成功するか、今日のところ未だ豫斷を許さない。それは茲には直接の關係なき問題であるが、伊エ戰爭がイタリーにすでに與へ、また現に與へつゝ影響としては、從來の經濟上の困難・矛盾を一層深めつゝあるのみだといつてよい。イタリーの財政狀態は世界恐慌下においてすでに非常な困難に遭遇してゐたのであるから、エチオピア戰費が新たに加はるにおいて、さらに困難を增すにいたるは當然のことである。イタリー政府としては、非常時的手段をもつて、この戰時經濟を賄つて行く外はなく、既述の三四年十二月の爲替管理令、三五年五月の外國有價證券管理令、同七月の金準備規定の停止等、いづれも戰時非常經濟政策の一部を構成するものでもあつたのである。

これら諸政策の外、イタリー政府は三五年五月十四日ならびに六月十五日、銀の輸出禁止令と銀貨の收容令を布いた。即ち前者によつては銀塊、棒銀、屑銀、粉銀、銀貨の輸出を禁止し、後者によつては國内に流通するすべての銀貨を政府に收容することゝしたのである。この銀貨收容令は、銀貨を市場から引揚げて小額紙幣に代らしめ、銀貨を東河戰線で軍費として使用せんがためであつた。しかしこの銀貨の總額は約十六億リラに過ぎず、戰費の一部を賄ふといふに過ぎなかつた。

そこでイタリー政府は、戰費の調達を國債發行にもとめねばならない。しかるに國債は、恐慌下の財政難で逐年激增し、一九二七年末の八百五十五億リラから三四年末には千五十一億リラとなり、さらに三五年七月末には千六十二億リラとなつて僅か半年間に十一億リラを激增してゐた。この上伊エ戰費の財源を國債にもとめて行くとすれば、それを如何にして消化すべきかゞ緊急問題とならざるを得ない。そこで政府は、家主に對して敷金（借家料の二ヶ月分）を强制的に國債に投資せしめることゝし、また全國會社の配當が年六%を超える場合は、その超過部分を國債買入れに充當せ

しめることゝした。

以上は戰費調達のための非常政策であるが、一般經濟分野においても、戰時的統制政策をとるにいたつたことはいふまでもない。第一は原料ストックの補充策である。すでに述べた如く、イタリー政府は三五年早々嚴重な輸入制限令を布いたのであつたが、その場合にも軍事的原料品の輸入は別格扱ひであつた。そして鐵、石炭、石油、銅、小麥、棉花、ゴム、トラック、船舶等を多量に買付け、國内の工場を動員して軍需品の生産に當らしめた。既述の如き三五年に入つて以後の飛躍的な生産增大は、かような政府の軍需品充實政策によつたのである。この軍事的目的を帶びる原料品の輸入統制は、七月に入つてさらに擴大强化せられ、さらに八月以後は重要原料品の輸入を、國家の獨占下に置くにいたつた。

然し原料ストックを豐富にするといつても、それが資金には限度がある。輸入を管理する一方、原料の節約をはからねばならない。九月一日實施の戰時經濟管理令によつて、「原料自給方針を確立するため、各種の國產品使用を奬勵し、就中石油の供給難を救ふため、全國公私乘合自動車のガソリン使用エンヂンを一九三七年末までに木炭、瓦斯使用エンヂンに改造すること」を命令した如きそれがためであつた。さらにまた政府は、建築材料としての鋼鐵使用の禁止、自動車の使用制限、値上げによるガソリン使用の節約策等を實施した。食料品の補充その他に手を伸ばしてゐるであらうことも、容易に見得るところである。

が、かうした統制策に拘らず、その背後に迫るものが資金難であり、物資難であらうことは、聯盟の經濟制裁が不徹底に終るにせよ、免れ得ざるところであらう。伊エ戰爭が急速に片づかぬ限り、困難な經濟狀勢は益々加重されて行く。當分の間、國際支拂にはその保有金をなし崩しに充當し、國内的には銀行券の增發によつて賄つて行くであらうが、しかしそれの大部分は砲彈として消し飛んで行く性質のものである。エチオピアを假りに自國領とした上の遠き將來はいざ知らず、目さきのところイタリーの經濟は、いよ〳〵困難を加へざるを得ない立場にある。

第三部　日本景氣篇

第一章　本邦景氣變動史

第一節　我が國景氣變動史を貫くもの

一、景氣・不景氣の正體

景氣變動に關する理論學說は、第一篇で述べてあるから、再びこゝで繰返す必要はない。此處ではたゞ明治初年から、大正の末期頃までの景氣變動史を書けばよいのである。詳細な點は追々述べるとして、何よりもまづ大切なことは、いわゆる景氣變動と云ふことを資本主義經濟に特有なものであり且つ不可避の現象であるとみる點である。云ひかへれば、資本主義經濟があつて始めて景氣變動が起きるのであつて、しかもそれは何か一寸した拍子や經濟外の理由に根本事情があつて起きるのではなくて、資本主義經濟それ自體の運動に基因して、不可避に起きる現象であるとみるのである。かういふと資本主義經濟が無いところには景氣變動がみられないのだから、わが國の景氣變

動史を述べるに當つては、資本主義經濟確立後をとればいゝぢあないか、と云ふことになる。けれどもこれは明かに間違つてゐる。なぜならば、資本主義經濟は何も突然出來あがつたり、ある場所から他の場所へそつくり移り變つたりするのではないからだ。封建的經濟組織から除々に發達し、次第にこれと取つて代るに至るのである。表面の政治的な動きは一度に變革するが、土臺の方はかう云ふ樣に除々に出來あがつてゆく。だから嚴密に云へば、未だ確立した資本主義經濟でなくてもそれに移りゆく過度期に早くも、景氣變動らしきものが表面化することが考へられる。明治初年から二十年代にかけて起つた景氣變動を取扱つたのはかう云ふ理由からであつて、單に字句に拘泥することなく、その眞意をみていたゞきたいと思ふ。それから好景氣、不景氣と云ふことが、決して勞働者農民の生活が樂になつたとか苦しくなつたとかを意味するものでない、と云ふことも書きそへておく必要がある。資本主義經濟社會のうへで景氣がいゝのは、いつも資本家階級に屬する人々のことでそれ以外の人々には掛り合ひがないものか、或ひはほんの少しばかりのおこぼれを頂戴するに過ぎない。不景氣と云ふのは丁度その反對で、資本家階級に屬する人々が勞働者農民に負擔を轉嫁させたことを云ふ。これでは好景氣と云ひ不景氣と云ひ、どつち途資本主義經濟社會では勞働者農民の生活は一層惡くするに役立つのみと云ふことになる。そうは云ふものゝある僅かな期間とか、ある部門とかでは一時これらの層の生活を良くする樣なことがむろんあるにはある。けれども

もそれは全く一時的局部的の現象にすぎない。景氣變動史イクオール勞働者農民層の窮乏史といつても決して過言ではないのである。

二、景氣變動史＝勞働者農民の窮乏史

これはいつたいどう云ふわけのものであるかと云ふ說明のためには、一應ざつと日本の資本主義の生ひ立ち記を述べておく必要がある。日本の資本主義は、一口に云つて了へば人工的早產兒にしてまた早熟兒であつた。封建社會の胎內から月滿ちて生れ落ちたのではない。强大な外部からの壓力によつて月足らずで生まれ出でざるを得なかつた。しかしてこの外部の壓力とは、歐米先進資本主義國の壓力である。わが國はグズ〳〵してゐれば先進諸國のために植民地化されてしまふおそれがある。月たらずでも何でもよいから、早く資本主義日本のうぶ聲をあげ、早急に育てあげなければならぬ。そこでこれにはどうしても國家權力にたよつて擁護保育してゆくより仕樣がないと云ふことになつた。そこで問題なのは金だ。資本主義日本の成育を早め、强くせしめるには、それ相應の巨額な金が必要である。ところが明治政府は未だやつと形だけ出來た丈であり、また政治的動搖變革で混亂しきつた經濟界からは到底それだけのみつぎものを引出すわけにはゆかぬ。とゞのつまりは、農村を土臺として、そこから巨額な資金を吸ひあげるより外に仕方がないと云ふことになつ

た。即ち日本の産業が古今比類稀な速度で發展し得たのは、農村の犠牲があつたればこそだと云ふことになる。明治の初年各地に澎湃として起こつた農民騒動がその生きた證據だ。一方勞働者はどうかと云ふに、これまた同じ境遇にあつた。と云ふのは、既に資本主義日本の誕生が、諸外國先進資本主義に比しておくれてゐたことから當然さうならざるを得なかつたのだ。前にも云つた通り、植民地化を避けるためには速かに資本主義産業の發育を助長しなければならぬ。それに國内産業を何とかして先進資本主義諸國に負けない樣にするのが先決條件である。ところが未だ資本主義的技術は幼稚極まるものであつたから、生産費を引下げる唯一の源泉は勢ひ勞働賃銀の切下げに向かはざるを得なかつたわけである。よく印度以下的勞賃と云はれるが、資本主義日本も賃銀では實質に於て黒ん坊以下であつた。かくて資本主義日本の發展がスピードを増せば増すほど、勞働者農民の實生活は苦しくなる一方であつたのである。

勞働者農民の犠牲で資本主義日本が躍進し得たと云つても、決してそれは永くは續かなかつた。即ち資本主義の發展、生産力の増大となつてもかんじんの消費の方が、つまりその大なる割合を占める勞働者農民の購買力がそれにつれて増大しないばかりか、かへつて縮減しつゝあつたからである。こゝに於て資本主義日本は、自分で自分の首を締めあげるかつこうとなつた。明治二十三年來周期的に襲しよせて來る恐慌の波は、かう云つた樣な資本主義自體の矛盾が暴力的に解決するあらはれであつたのである。しかも遂には日清、日露の戰爭をさへ仕出かさずにはゐられなくなりつゝも、一向解決點を見出し得ないばかりか、かへつて矛盾を擴大した樣なものであつた。

資本主義日本の土臺をゆり動かしたのは戰後の反動以來であつた。大戰が勃發するや、その利益を壟斷するのは此時とばかりに、生産部門は目茶苦茶に擴張された。大戰中は素晴しい好景氣時代を現出したこと周知の如くである。ところが、この時でさへ、勞働者農民の方へは景氣のケの字も廻つて來ず、たま〳〵あつたとしてもほんのおこぼれにすぎなかつたこと、後述の如くである。

やがて來た戰後の反動恐慌では徹底的に資本主義日本の潑溂性をうばひ去つて了つた。一方には巨大な生産力、尨大な滯荷の山、他方では食ふにこまる失業者の群と云つた「對象の妙」を資本主義日本はどうすることも出來なかつたのである。産業の合理化、統制經濟機構の充實と景氣不景氣の波瀾毎に、同じやうな農民勞働者への攻勢が强化されて行つた。

第二節　資本主義搖籃期の景氣變動

一、動搖期の財界變動

(イ)　明治十年代の景氣不景氣

明治年代に入つて最初の十年間は、わが經濟界にとつて全く